仙台市文化財調査報告書第394集

宮城県仙台市

郡山遺跡 31

平成22年度発掘調査概報
郡山遺跡・大野田官衙遺跡・法領塚古墳

2011.3

仙台市教育委員会

仙台市文化財調査報告書第394集

宮城県仙台市

郡山遺跡 31

平成22年度発掘調査概報
郡山遺跡・大野田官衙遺跡・法領塚古墳

2011.3

仙台市教育委員会

六反田遺跡7F-1区SK9木棺墓全景（北西から）

法領塚古墳全景（南西から）

序　文

郡山遺跡の発掘調査事業は、昭和55年の国庫補助事業による確認調査を開始して以来31年目となりました。平成18年７月に「仙台郡山官衙遺跡群　郡山官衙遺跡　郡山廃寺跡」として国史跡に指定され、今後の歴史公園を中心とした街づくりに大きな一歩を踏み出しているところです。31年のながきにわたり、発掘調査の継続が出来ましたのも遺跡の究明にご助言をいただいた先学の諸氏や、地元の地権者の皆様からのご協力があったからと感じております。

本年度は水道管埋設に伴う郡山遺跡の調査と郡山遺跡との関連が考えられる大野田官衙遺跡の調査、さらに、聖ウルスラ学院英智における校舎建設に関連し、法領塚古墳の追加調査を実施し、それらの成果を本書にまとめました。郡山遺跡の調査では、第152次調査で検出したものと同一の可能性があるⅠ期官衙の材木列を確認し、大野田官衙遺跡では官衙の東辺の区画溝を確認しました。法領塚古墳では新たに羨道と前庭部を確認し、全長が直径約55mの円墳であったということが分かりました。それぞれ解明に進展があったものと考えております。

これまでの調査成果が遺跡保護と整備に活かされ、さらに活用される資料となるよう努めてまいります。今後とも皆様のご理解とご協力を賜りますようお願い申し上げます。

最後になりましたが、発掘調査から本報告書の刊行に際しまして、ご指導、ご協力くださいました皆様、また３月11日の大震災以降、刊行までご努力下さいました方々に深く感謝申し上げる次第です。

平成23年３月

仙台市教育委員会
教育長　青沼　一民

例　言

1．本書は国庫補助事業による市内遺跡調査のうち、大野田官衙遺跡の範囲確認調査、法領塚古墳の発掘調査報告と、市道上の工事に関連した郡山遺跡の発掘調査報告書である。

2．本概報は調査速報を目的としている。執筆は以下のように分担した。

第１章　佐藤正弥

第２章　長島栄一、熊谷敏哉

第３章　Ⅰ～Ⅳ…森田賢司、佐藤正弥　　Ⅴ…及川謙作

第４章　Ⅰ～Ⅲ…森田賢司　　Ⅳ…大久保弥生　　Ⅴ…森田賢司、大久保弥生

第５章　森田賢司

遺物写真撮影は猪狩俊哉が、遺物観察表、遺構註記表の作成は森田賢司、熊谷敏哉が、図版作成は森田賢司、佐藤正弥、熊谷敏哉が、編集は森田賢司が行った。

3．本書の内容は既に公開されている「平成22年度宮城県遺跡調査成果発表会発表要旨」、「第37回古代城柵官衙遺跡検討会資料集」に優先する。

4．本書を作成するにあたり、下記の方に種々の御教示を頂いた。記して感謝の意を表します（敬称略）

松井一明

5．本調査に係わる出土遺物、実測図、写真などの遺物は仙台市教育委員会が保管している。

凡　例

1．平面図に示した座標系について、第２章の図は任意に設定した（X=0、Y=0）を通る磁北線（1984年頃の偏角で、真北から6°44′7″西偏）を基準にしたものであり、第3章の図は平面直角座標系X（旧測地系）、第４章の図は世界測地系である。

2．文中および図中の方位は真北を基準としている。但し、第２章の図のみ磁北を示す。

3．遺構の略称は次のとおりである。遺構番号は郡山遺跡、大野田官衙遺跡が遺跡全体の通しで、法領塚古墳は発見順である。但し、ピットは除く。

SA：柱列　　SB：掘立柱建物跡　　SD：溝跡　　SK：土坑　　SX：性格不明遺構　　P：ピット

4．遺物の略号は次のとおりである。登録番号は郡山遺跡、大野田官衙遺跡が遺跡全体の通しで、法領塚古墳は発見順である。

A：縄文土器　　B：弥生土器　　C：土師器（非ロクロ調整）　　D：土師器（ロクロ調整）

E：須恵器　　F：丸瓦　　G：平瓦　　I：陶器

Ka：剥片石器　　Kc：礫石器　　Na：鉄製品

5．土色については「新版標準土色帖」（小山・竹原1989）を使用した。

6．表中の（　）が付いた数字は図上復元した推定値である。

7．本書中の地形図は、国土地理院発行の1：25000「仙台東南部」、「仙台東北部」と1：10000「長町」、「西多賀」の一部を使用している。

8．本文中の「灰白色火山灰」は県内で広域に分布する「灰白色火山灰」（山田・庄子1980）と同義である。この火山灰は現在「十和田a火山灰（To－a）」（大池1972）と推定されており、降下年代は西暦915年とされている（町田・新井1992、小山2003など）。

9．出土した鉄製品、剥片の重量計測にはタニタ社製のスーパーミニ1220を用いた。

目　次

第１章　はじめに

Ⅰ．郡山遺跡・仙台平野の遺跡群の調査体制…… 1

Ⅱ．調査計画と実績…… 1

1．調査計画…… 1

2．調査実績…… 2

第２章　郡山遺跡　第203次発掘調査

Ⅰ．調査にいたる経過と調査方法…… 3

Ⅱ．基本層序…… 5

Ⅲ．遺構と遺物…… 5

Ⅳ．まとめ…… 6

第３章　大野田官衙遺跡

Ⅰ．調査概要

1．調査計画…… 7

2．調査方法…… 8

3．基本層序…… 8

Ⅱ．2a区の調査

1．調査概要…… 10

2．基本層序…… 10

3．遺構と遺物…… 11

4．まとめ…… 19

Ⅲ．2b区の調査

1．調査概要…… 32

2．基本層序…… 32

3．遺構と遺物…… 32

4．まとめ…… 33

Ⅳ．2c区の調査

1．調査概要…… 39

2．基本層序…… 41

3．遺構と遺物…… 41

4．まとめ…… 43

Ⅴ．六反田遺跡7F-1区の調査

1．調査概要…… 45

2．基本層序…… 46

3．遺構と遺物…… 46

4．まとめ…… 52

第４章　法領塚古墳　第２次発掘調査

Ⅰ．調査概要
１．調査経過……55
２．遺跡概要……55
３．調査方法……58
Ⅱ．基本層序……59
Ⅲ．発見遺構……59
Ⅳ．出土遺物……66
Ⅴ．まとめ……71

第５章　総括

Ⅰ．郡山遺跡……93
Ⅱ．大野田官衙遺跡……93
Ⅲ．法領塚古墳……96

第1章　はじめに

Ⅰ．郡山遺跡・仙台平野の遺跡群の調査体制

調査主体　仙台市教育委員会

調査担当　文化財課長　吉岡恭平

整備活用係　係長　長島栄一、主査　木村浩二、主任　熊谷智顕、主事　森田賢司、
文化財教諭　工藤慶次郎、文化財教諭　佐藤正弥、文化財教諭　熊谷敏哉

調査調整係　主幹兼係長　佐藤甲二、主査　荒井格、主査　平間亮輔、主事　廣瀬真理子、
主事　大久保弥生、主事　猪狩俊哉、主事　及川謙作、文化財教諭　吉野信、
文化財教諭　鈴木健弘

調査担当執員　○郡山遺跡　荒井格、廣瀬真理子、鈴木健弘
○大野田官衙遺跡　森田賢司、佐藤正弥、熊谷敏哉、平間亮輔、及川謙作
○法領塚古墳　木村浩二、森田賢司、荒井格、猪狩俊哉

発掘調査、整理作業を適正に実施するため、「郡山遺跡・陸奥国分寺跡等調査指導員会」を設置し、指導・助言を受けた。

委員長　今泉隆雄（東北大学文学部名誉教授　古代史）、副委員長　進藤秋輝（前東北歴史博物館館長　考古学）
委　員　岡田茂弘（国立歴史民俗博物館名誉教授　考古学）、桑原滋郎（多賀城市文化財保護委員会会長　考古学）、
須藤　隆（東北大学文学部名誉教授　考古学）、宮本長二郎（別府大学非常勤教授　建築学）、
渡部育子（秋田大学教育文化学部教授　古代史）

六反田遺跡７F-1区、法領塚古墳の発掘調査では次の方からも指導・助言を受けており、感謝申し上げる。
東北大学埋蔵文化財調査室　藤沢　敦、東北学院大学文学部教授　辻　秀人
さらに、鉄製品のＸ線写真撮影にあたり、東北歴史博物館より御協力を得たことを感謝申し上げる。
また発掘調査にあたり、宮沢駅周辺区画整理事業地内の地権者と至ウルスラ学院より協力を得たことを付記する。

Ⅱ．調査計画と実績

1．調査計画

平成22年度に計画された本書掲載の調査は、国庫補助事業である「市内遺跡発掘調査」の一部として計画され、郡山遺跡、大野田官衙遺跡、陸奥国分寺跡を対象としていた。このうち郡山遺跡については、個人住宅の建築に対応した調査である。郡山遺跡では第５次５ヶ年計画終了後に、平成17年度から補足調査を実施してきたが、平成20年度から郡山遺跡の南西1.5kmにある大野田官衙遺跡で、郡山遺跡Ⅱ期官衙と関連すると考えられる官衙跡が発見された。その範囲と性格究明が急務となったため、昨年度に引き続き郡山遺跡の補足調査を休止して調査計画を立案した。さらに平成18年度以降実施していた陸奥国分寺跡の整備計画策定のための調査計画を立案した。今年度の内容については平成22年３月５日に開催された郡山遺跡・陸奥国分寺跡等調査指導委員会において審議がなされ、了承を得ている。

発掘調査総経費は37,7535,000円、国庫補助金額18,876,000円の予算で計画し、当初は大野田官衙遺跡発掘調査に10,539,670円、陸奥国分寺跡発掘調査に2,899,240円、郡山遺跡の個人住宅対応に4,158,760円、「仙台平野の遺跡群」として郡山遺跡以外の市域全体の個人住宅対応に7,430,000円、仙台城跡に12,726,000円とした。これによって、本書の掲載に関わる発掘調査の実施計画を以下のように立案した。

調査次数	調査地区	調査予定面積	調査予定期間	調査原因
郡山遺跡	官衙中心部など５箇所	200㎡	４月～２月	個人住宅建築
大野田官衙遺跡	官衙区画溝東辺	1,000㎡	４月～８月	範囲確認調査
陸奥国分寺跡	陸奥国分寺跡東辺、寺域北部	100㎡	９月～10月	範囲確認調査

表１　平成22年度発掘調査計画

2．調査実績

郡山遺跡については、開発に伴う事前調査として３箇所、個人住宅の建築等で１箇所の調査を実施した。なお、店舗建築に伴う第200次調査は仙台市文化財調査報告書第391集で報告している。また、水道管埋設工事に伴う第203次調査は官衙中心部での調査であるため、これまでの調査の関連から報告は本書で扱った。

大野田官衙遺跡については、当初４箇所の調査を予定していたが、土地区画整理事業の進捗状況から１箇所をはずし、a、b、dの３調査区を設定した。なお、d区については、以下の報告ではc区と呼称する。また、土地区画整理事業に伴う六反田遺跡７F-1区の調査で、事業地外に調査区を拡張する必要が生じた。大野田官衙遺跡との関連を考慮する上で重要な地点でもあることから、大野田官衙遺跡の追加調査として調査区（７F-1区）の拡張を行った。

上記の予定した発掘調査とは別に、年度途中で法領塚古墳石室前面での緊急の遺構確認調査が必要となった。そのため陸奥国分寺跡の調査計画を変更し、法領塚古墳の調査を実施した。

遺跡名・調査次数	調査地区	調査面積	調査期間	調査原因	対応
郡山遺跡　第200次	Ⅱ期官衙北西部	300㎡	10月12日～12月10日	店舗建築	開発に伴う事前調査
郡山遺跡　第201次	Ⅱ期官衙外南西部	22.4㎡	6月21日～6月23日	個人住宅建築	仙台平野の遺跡群
郡山遺跡　第202次	遺跡範囲南西端	10.6㎡	8月9日～8月10日	児童館建築	開発に伴う事前調査
郡山遺跡　第203次	南方官衙東地区	60㎡	8月17日～8月26日	水道管埋設	開発に伴う事前調査
大野田官衙遺跡	官衙区画溝東辺	257㎡	5月21日～10月1日	範囲確認調査	郡山遺跡ほか調査
	六反田遺跡	27㎡	8月31日～10月1日	追加調査	
法領塚古墳　第２次	石室前庭部	160㎡	10月18日～11月20日	校舎建築	郡山遺跡ほか調査

表２　平成22年度発掘調査実績

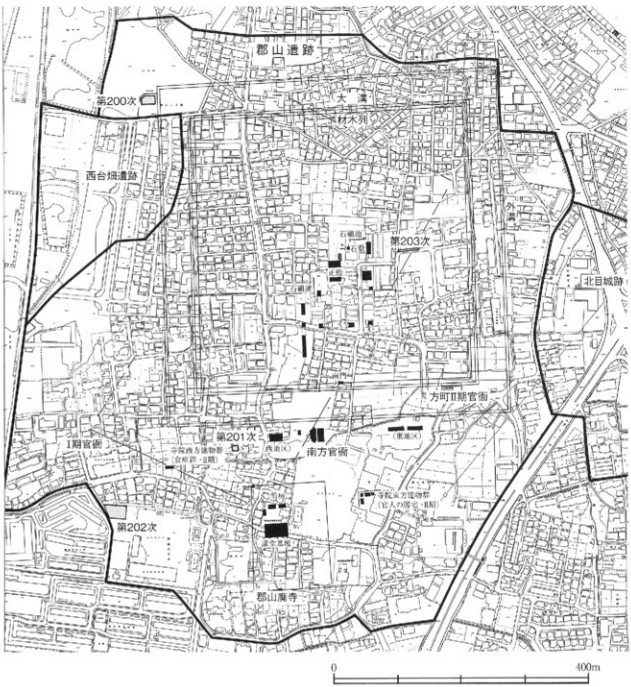
第１図　調査遺跡位置図

第２章　郡山遺跡第203次発掘調査

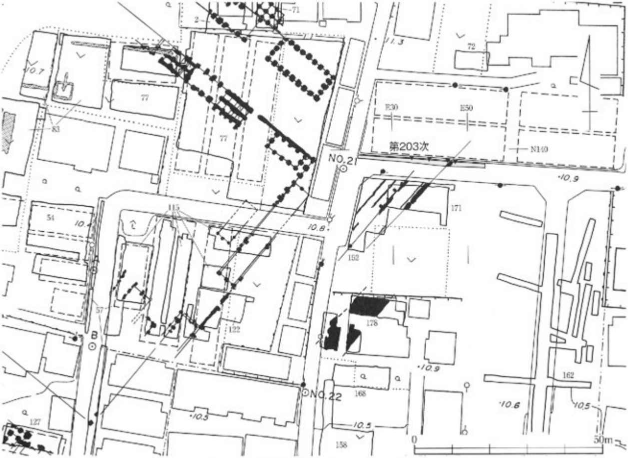
Ⅰ．調査にいたる経過と調査方法

第203次調査は水道管埋設工事に伴う調査である。平成22年８月16日付で、仙台市太白区郡山３丁目４－４、４－５における「埋蔵文化財の発掘の届出について」が提出され、それに基づき調査を実施した。

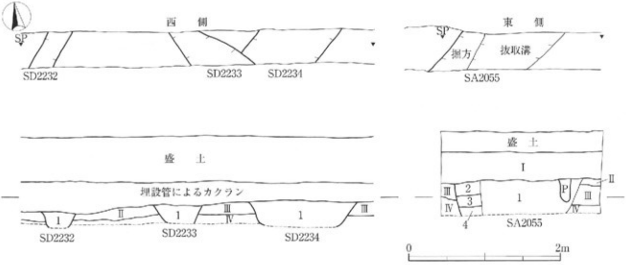
調査地点は方四町Ⅱ期官衙の中央よりやや東側である。調査は平成22年８月17日に埋設工事に伴って行い、調査区は南北69m×東西１mに設定した。すでに市道上となっており、埋設管もあることから、重機で掘削時に遺構が検出された場合のみ、平面及び壁断面で確認することとした。水道管埋設のため、掘削深度は調査区の東側が浅く、西側が深くなっている。精査した結果、調査区中央付近で遺構を検出した。８月26日に調査を終了した。



第２図　郡山遺跡全体図

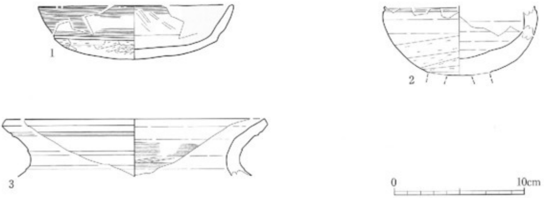


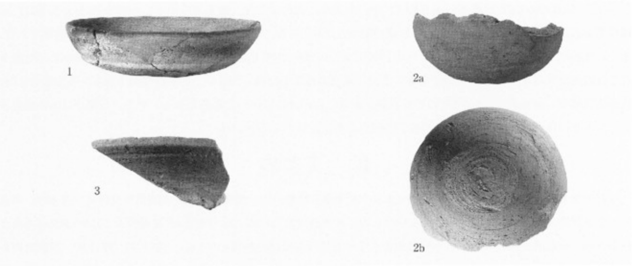
第３図　第203次調査区位置図（S=1/1000）



	層位	色調	土質	備考
基本層	Ⅰ			旧耕作土
	Ⅱ	10YR3/3暗褐色	粘土質シルト	部分的な堆積
	Ⅲ	10YR3/4暗褐色	粘土質シルト	褐色シルトの粒を少量含む
	Ⅳ	10YR4/4褐色	粘土質シルト	
SA2055	1	10YR3/4暗褐色	粘土質シルト	抜取溝堆積土　黒褐色シルトの粒～ブロック、炭化物粒をそれぞれ少量含む
	2	10YR4/4褐色	粘土質シルト	柱掘方埋土　黒褐色シルトの粒～ブロックを少量含む
	3	10YR3/3暗褐色	粘土質シルト	柱掘方埋土　黄褐色シルトの粒を極少量含む
	4	10YR4/4褐色	粘土質シルト	柱掘方埋土　黒褐色シルトの粒を少量含む
SD2232	1	7.5Y2/1黒色	粘土質シルト	
SD2233	1	10Y3/1オリーブ黒色	粘土	10Y3/2オリーブ黒色の粘土質シルトを少量含む
SD2234	1	5Y3/1オリーブ黒色	粘土	10Y3/2オリーブ黒色の粘土質シルトを少量含む粘土ブロックを多量含む

第４図　調査区平・断面図（S=1/50）





No.	登録No.	遺構・層位	種別・器種	法量（cm）	調整・特徴
1	C-1019	Ⅰ層	非ロクロ土師器・坏	器高4.15cm　口径14.9cm	外面：口縁部ヨコナデ　体部ヘラケズリ　内面：口縁部ヨコナデ、ヘラミガキ、ナデ　体部ナデ　黒色処理 胎土：砂粒、鉱物多量
2	E-537	Ⅰ層	須恵器・長頸壺	体部径（残存部）11.9cm	外面：ロクロナデ　胴部ヘラケズリ　7.5YR6/3にぶい褐　2.5Y7/1灰白　内面：ロクロナデ　10YR7/4にぶい黄橙　胎土：砂粒、石英、白針を少量含む
3	E-536	盛土	須恵器・甕	（口径19.9cm）	外面：ロクロナデ　内面：ロクロナデ→ヘラナデ　胎土：砂粒、鉱物

第５図　出土遺物（S=1/3）

Ⅱ．基本層序

調査地点には盛土が30～60cm堆積している。盛土以下の基本層は４層確認した。Ⅰ層は旧耕作土であり、Ⅱ層は暗褐色の粘土質シルト層である。Ⅱ層は部分的に確認され、この上面が遺構検出面である。Ⅲ層は暗褐色の粘土質シルト層で、褐色シルトの粒を少量含んでおり、Ⅳ層は褐色の粘土質シルト層である。

Ⅲ．遺構と遺物

今回の調査では材木列１条、溝跡３条が検出された。

SA2055材木列

調査区中央付近で検出された。壁断面の観察及び周囲の調査成果から、材木列の布掘り状の抜取溝と掘方と判断される。抜取溝の検出長は約56cmで、上端幅約76cmである。掘方の検出長は南北方向で約60cmである。上幅は抜取溝に壊されているため不明である。堆積土及び埋土は４層確認され、第１層は粘土質シルト層であり、抜取溝の堆積土である。第２層は褐色の粘土質シルト層、第３層は暗褐色の粘土質シルト層で、第４層は褐色の粘土質シルト層である。第２～４層は掘方埋土である。

SD2232溝跡

調査区中央やや西側で検出された。南北方向に延びる溝跡である。検出長約50cm、上端幅は約30cmである。堆積土は黒色の粘土質シルト層が１層確認された。

SD2233溝跡

調査区中央付近で検出された。南北方向に延びる溝跡である。検出長約50cm、上端幅は約50cmである。堆積土はオリーブ黒色の粘土層が1層確認された。重複関係としては、SD2234溝跡より新しい。

SD2234溝跡

調査区中央で検出された。南北方向に延びる溝跡である。検出長は約58cm、上端幅は約88cmである。堆積土はオリーブ黒色の粘土が1層確認された。重複関係としては、SD2233溝跡より旧い。

出土遺物については、盛土から須恵器のE-536甕（第5図3）が1点、Ⅰ層から非ロクロ土師器のC-1019坏（第5図1）、須恵器のE-537長頸壺（第5図2）がそれぞれ1点出土した。盛土から出土した須恵器のE-536甕は口縁部片である。外反する口縁を持つが、口唇部が肥厚したり、下方に張り出したりしておらず、特徴的な形態である。また、焼成はあまり良好でない。非ロクロ土師器のC-1019坏は内面黒色処理されており、口縁部と体部の境に段を有し、内湾気味に立ち上がる器形である。また、底部の器厚が7.5mmと厚いことが特徴的である。須恵器のE-537長頸壺は底面に直径約5cmの円形の剥離痕跡があり、台が付いていたと考えられる。また、色調がにぶい褐色を呈しており、焼成が良好でない。その他、遺構から遺物は出土していない。

Ⅳ. まとめ

今回調査地点は、方四町Ⅱ期官衙の中央よりやや東側に位置する。調査の結果、調査区中央付近で材木列、調査区中央～西側にかけての間で溝跡3条を検出した。今回調査地点の南7mの第152次発掘調査ではSA2055材木列が検出され、抜取溝底面において材木列の掘方とそれに伴う柱痕跡を検出している。方向はN-38°-Eで、調査区内の南部で抜取溝の一部を検出していることから、調査区を横断し外へ延びていると考えられる。

今回の調査で検出した材木列は遺構の掘り込みを行っていないため詳細は不明だが、第152次発掘調査で検出したSA2055材木列の延長線上にあり、同一の遺構と考えられる。

SA2055材木列の時期については、第152次発掘調査において、北西5mを平行して延びるSA2060材木列が検出されている。SA2055材木列とSA2060材木列は近接しており、材木塀が同時期に存在していたとは考えにくいことから、Ⅰ期官衙期内の別時期と考えられる。また、Ⅰ期官衙期に使われていたと考えられている道路跡、あるいは柴垣と見られるSD2070、2075溝跡も検出されており、両溝間の距離と同値でSA2060材木列がSD2075溝跡と平行している。よって、SA2060材木列が官衙内の道路と平行した塀の跡であると考えられる。官衙東辺部の状況については、第178次発掘調査によって、これら材木列の外側にSD2150溝跡があり、それぞれ開連していたことが考えられる。詳細にわたる整理はついていないが、この地区の調査を積み重ねることによって、検討される状況を目指していきたい。

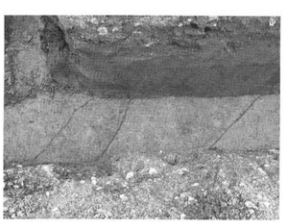


写真1　SA2055材木列検出状況（南から）

写真2　SD2233・SD2234溝跡検出状況（東から）

第３章　大野田官衙遺跡

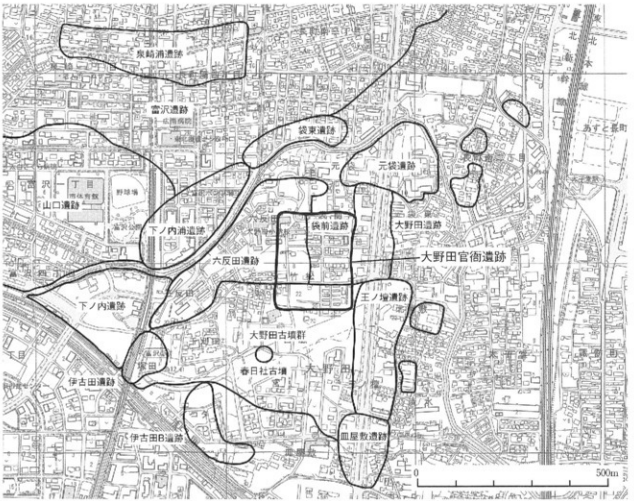
Ⅰ．調査概要

１．調査計画

大野田官衙遺跡は平成21年度に遺跡登録され、官衙の年代、機能を明らかにするために範囲確認調査を進めている。平成21年度の調査では、富沢駅周辺土地区画整理事業に伴う発掘調査と併せ、区画溝の西辺が検出されたことにより、官衙の範囲が南北245～259m、東西188～198mであることが明らかとなった。今年度は、官衙の区画溝について東辺の様相を把握するため、その想定ライン上に2a、2b、2c区の３調査区を設定した（第７図、註）。

また、土地区画整理事業に伴う六反田遺跡7F-1区の調査において、木棺墓が検出され、その東端部が事業地外に延びている状態であった。大野田官衙遺跡周辺地域における、官衙と前後する時期も含めた土地利用のあり方を考慮する上で、木棺墓の全容解明が重要であることから、国庫補助事業による範囲確認調査の追加調査として、木棺墓の東端部を拡張して調査を行った。

なお、2a、2b、2c区における区画溝の東辺の様相や、7F-1区における木棺墓の様相が明らかとなったことから、９月１日に報道発表を行い、９月４日に遺跡見学会を開催した。木棺墓については、その後さらに調査が進むにつれ、新たな様相が判明してきたことから、再度11月10日に報道発表を行い、11月13日に遺跡見学会を開催している。



第６図　大野田官衙遺跡と重複する遺跡群（S=1/10000）

2．調査方法

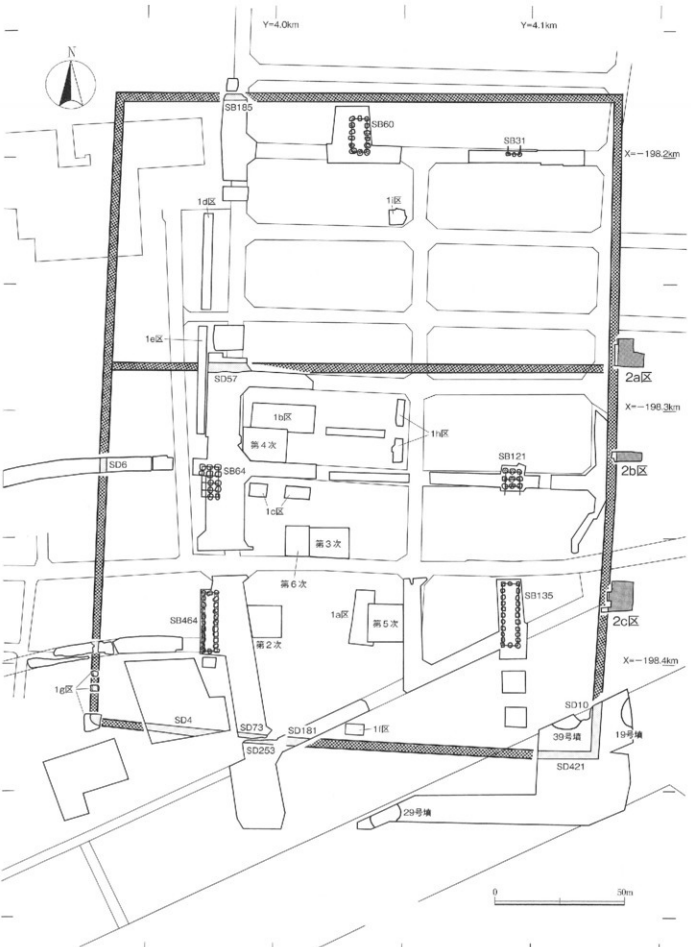
調査計画に準じて、2a区を５月21日より、2b区を７月１日より、2c区を７月26日より調査を開始した。この調査は官衙関連遺構の範囲確認調査であるため、官衙に関連すると考えられた遺構や、性格を把握する必要が生じた遺構についてのみ、一部掘り下げて調査を行っている。また、小溝状遺構群などの遺構は検出のみに留めている。各調査区とも、遺構の検出状況に合わせ一部拡張を行っている。

また、土地区画整理事業に伴う六反田遺跡7F-1区の調査は５月17日より開始し、拡張部の調査は国庫補助事業の追加調査として８月31日より開始した。この調査では木棺墓の構造の全容解明のため、遺構を完掘している。

3．基本層序

各調査区において基本層の堆積状況は異なっていたが、各地点で対応すると考えられる土層Ⅰ～Ⅴ層が確認された。Ⅰ層はⅡ耕作土であり、各調査区で堆積している。調査区により細分されるが、最上層は現代までの耕作土と考えられる。Ⅱ層は黒褐色の粘土層であり、2a、2b区で部分的に確認されている。Ⅲ層はにぶい黄褐色の粘土層であり、全調査区で確認されたが、部分的な分布状況を示す。しかし、下層のⅤ層上面で検出された溝跡の堆積土上部において、比較的厚く堆積しており、灰白色火山灰がブロック状に含まれることも明瞭に確認できた。Ⅳ層は暗褐色の粘土層であり、2b、2c区で部分的に確認された。Ⅴ層は褐色の粘土層であり、全調査区で確認された。遺構はⅡ、Ⅲ、Ⅴ層上面で検出されている。

註　調査区の表記について、昨年度の国庫補助事業による調査区を1a、1b、1c …とし、今年度の調査区を2a、2b、2cとする。また、第７図中に記載されている第２～６次調査の成果については、第２次調査が第393集、第３～６次調査が第395集に掲載されている。



第７図　大野田官衙遺跡調査区配置図（S=1/1500）

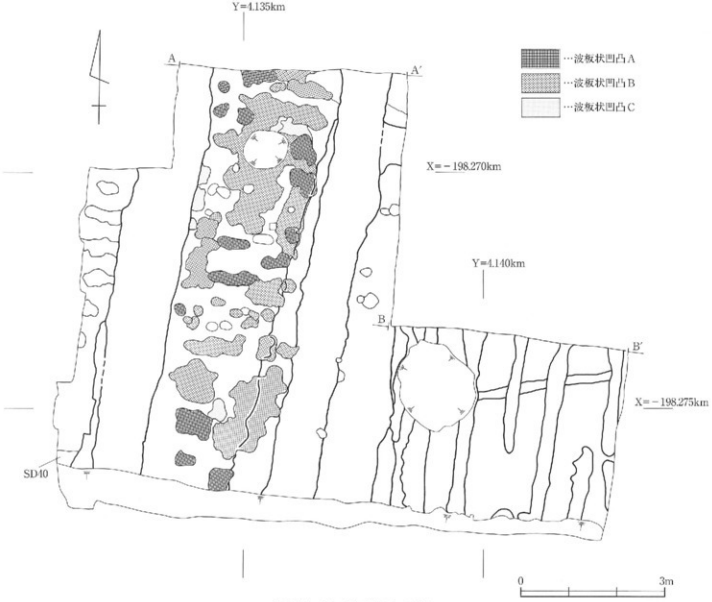
Ⅱ．2a区の調査

1．調査概要

2a区は、官衙の区画溝東辺の想定ライン上の中央やや北寄りに位置しており、官衙内部を東西に横断するSD57溝跡と東辺と接続すると想定される地点にあたる。南北10m×東西10mの範囲の中にL字形の調査区を設定し、重機により盛土、耕作土を除去し精査を行った。その結果、調査区西半で南北方向に縦走する道路跡が検出され、西側の道路側溝の西半が調査区外へ延びている状態であった。そのため、下層の遺構の検出状況も踏まえながら、調査区西部の拡張を順次行った。遺構は道路側溝や波板状凹凸など道路跡を構成するものについて、一部掘り下げて調査を行ったほか、調査区西端のSD38溝跡については、下部で別の溝跡が検出されたため、断面検討のためのベルトを残して完掘している。調査は写真撮影、図面作成による記録を行いながら進め、SD38溝跡の下部から検出された溝跡については、一部掘り下げて規模、形状を把握した上で調査を終了した。

2．基本層序

調査地点には盛土が1～1.1mあり、それより下にⅠ～Ⅲ、Ⅴ層が確認された。Ⅰ層は旧水田耕作土であり、土色、



第8図　2a区平面図（S=1/80）

土質によりⅠa～Ⅰc層に細分される。Ⅱ層は黒褐色の粘土層であるが、堆積状況が非常に薄く、調査区東半で部分的に確認されたのみである。Ⅲ層はにぶい黄褐色の粘土層である。調査区東半で部分的に確認されたほか、調査区西端でも確認され、SD40溝跡の上部に比較的厚く堆積している。Ⅲ層中に灰白色火山灰は確認されなかった。Ⅲ層上面では、SD38、SD39溝跡が検出されている。Ⅴ層は褐色の粘土層であるが、遺構の底面など下部では砂質シルトの割合が多くなる。SD40溝跡や小溝状遺構群などが検出されている。

3．遺構と遺物

Ⅲ層上面において、溝跡２条、ピット６基が検出された。また、Ⅲ層が削平されている地点において、Ⅴ層上面で溝跡、土坑などが検出されている。Ⅲ層上面で検出された２条の溝跡はⅤ層上面の溝跡と方向、規模が類似することから、これらの遺構と一連のものとして道路跡を構成すると考えられたため、Ⅱ層上面検出遺構の道路跡として報告する。また、道路跡関連遺構とは別に、Ⅴ層上面において、溝跡２条、土坑１基、性格不明遺構１基、小溝状遺構群１群、ピットが検出されている。

(1) Ⅲ層上面検出遺構

道路跡関連遺構

検出された道路跡の関連遺構は、溝跡４条と波板状凹凸である。ここでは個別の遺構について述べ、遺構の共伴関係の検討については後述する。

SD36溝跡

調査区中央部で検出された、南北方向に緩走する溝跡である。方向はN-10°-Eであり、規模は上幅１～1.1m、下幅10～40cm、深さは45～50cmである。断面形は基本的に、東側がやや深くなるU字形であるが、調査区南部では東側の落込みが顕著となり、明瞭な段を有している。堆積土は４層で、第１層は灰黄褐色の粘土質シルト層である。灰白色火山灰をブロック状に含んでいる。第２～４層はシルト質粘土層であり、第３、４層は基本層のⅤ層をブロック状に多く含んでいる。出土遺物については、第２層中より非ロクロ土師器のC-9坏が出土した（第14図１）。内湾気味に緩やかに立ち上がる器形で、丸底気味の底部であり、内面黒色処理されている。その他、遺構上面で内面黒色処理された土師器坏の小片が２点、第１層中より土師器、縄文土器の小片が数点、第２層中より土師器小片が１点、第３層中より内面黒色処理された土師器坏の小片が２点出土した。遺構の重複関係としては、SD37溝跡より新しい。

SD38溝跡

調査区西端で検出された、南北方向に緩走する溝跡である。方向はN-11°-Eであり、規模は上幅１～1.4m、下幅15～55cmを測る。深さについては、調査区南部では比較的浅く約40cmであるが、調査区中央付近では急激に落ち込んでおり、80～90cmである。断面形状についても、調査区南部ではやや不整な逆台形であるが、落込みをもつ調査区中央以北では段を有し、不整形となる。この落込みは溝の中心から東へ偏っており、深さ30～50cmで一度段を形成してから、ほぼ垂直に落ち込んでいる。堆積土は大別６層に区分される。第１層はシルト質粘土層であり、土色の違いから1a、1b層に細分される。第２層は灰黄褐色のシルト質粘土層であり、灰白色火山灰と考えられるシルトを粒状に含んでいる。第４層は4a、4b層に細分される。4a層はにぶい黄褐色の粘土質であるが、黒褐色の粘土などをブロック状に多く含んでおり、第１～３層が比較的均質な堆積土であるのに対し、明瞭な差異が認められる。第５層は暗褐色の粘土層で、部分的に堆積した土である。第５層の下部にはSD40溝跡の堆積土が位置し、土質が類似していることから、SD40溝跡の堆積土が攪拌されたものと考えられる。第６層は6a、6b層に細分され、6a層は黄褐色の細砂層である。灰黄褐色の粘土をブロック状に含んでいる。6b層は細砂と粘土の混合層であるが、他の混入物は6a層に比べて少なく、比較的均質な土層である。出土遺物については、遺構上面より土師器小片１点、後期前葉のA-1縄文土器（同図２）を含む縄文土器片２点が出土した。その他、第１層より土器小片１点、第２層

より土器小片数点、剥片１点、第３層より土器小片数点、4a層より土師器小片３点、須恵器の高台付坏の底部片１点が出土した（註１）。遺構の重複関係としては、SD39溝跡より新しい。

SD37溝跡

調査区中央で検出された、南北方向に縦走する溝跡である。方向はN-15°-Eであり、調査区北端で東に屈曲する。上幅はSD36溝跡により削平された残存部では60～90cmであるが、削平を比較的受けていない、東に屈曲した部分では1.2mである。下幅35～40cm、深さ約50cm、断面形は逆台形を呈する。堆積土は３層で、第１、２層は黒褐色のシルト質粘土層である。第３層は色調の異なる粘土の混合層であり、しまりも上層と比べ弱く、明瞭に区分される。出土遺物については、第１層よりNa-1鉄製品（写真図版1-9）、第３層よりロクロ土師器のD-4坏（第14図３）が出土した。Na-1鉄製品は残存長8.3cm、幅２cmの細長い形状を呈しており、刀子、或いは鎌などの刃部と考えられる。その他、遺構上面より土師器小片２点、第１層より土師器小片３点、第３層より土器小片２点が出土している。遺構の重複関係はSD36溝跡より旧い。

SD39溝跡

調査区西端で検出された、南北方向に緩走する溝跡である。大半がSD38溝跡と重複しており、調査区中央以北では完全に削平されている。上幅等の規模、断面形状は不明であり、深さは約30cmである。堆積土は２層確認されている。出土遺物については、第１層よりロクロ土師器坏の口縁部片１点、土器小片２点、第２層より土師器小片が２点出土している。遺構の重複関係はSD38溝跡より旧い。

波板状凹凸

調査区中央のSD36、SD37溝跡と調査区西端のSD38、SD39溝跡の間で検出された、平面形が不整形の土坑、ピット群である。いずれも砂と粘土の混合層で、しまりのある土層である。土質、土色によりA～Cの３群に大別された（第８図）。波板状凹凸Aは黒褐色の粘土質シルトと暗褐色の細砂の混合層である。ピットによって、粘土質シルトと細砂の割合が異なっている。波板状凹凸Bは灰黄褐色のシルト質砂層である。波板状凹凸Cは、土色が暗褐色で波板状凹凸Aと類似しているが、堆積土中に粘土の割合が大きいこと、周囲の遺構との重複関係からAとは区分した。この３種の重複関係は波板状凹凸Aが最も新しく、波板状凹凸Cが最も旧い。また、各大別群内でも重複関係が認められる。波板状凹凸A、Bについて、数基ずつ掘り下げて調査しており、以下に個別に報告する。

SK43土坑（波板状凹凸A）

調査区南端で検出された、不整形な土坑である。上幅が東西50cm、南北60cm、下幅が東西南北とも30cm、深さ約15cmであり、断面形は逆台形を呈する。堆積土は２層で、第１層は砂粒を含む粘土質シルト層、第２層は粘土層である。遺構底面において、上面に被熱痕跡の認められる礫が出土した。遺構の重複関係はSD37溝跡より新しい。

P1（波板状凹凸A）

調査区北部で検出され、東西50cm、南北70cmの不整形を呈する。深さ約15cmで、断面形は扁平なU字形であるが、底面には凹凸が認められる。堆積土は１層である。

P2（波板状凹凸A）

調査区北部でピット１の南隣で検出され、東西南北とも約60cmの不整形を呈する。深さ約10cmで、断面形は不整形であり、底面には凹凸が認められる。堆積土は１層であり、土器小片が数点出土している。遺構の重複関係はSD37溝跡より新しい。

P3（波板状凹凸B）

調査区中央部で検出され、東西80cm、南北60cmの不整形を呈する。深さ約10cmで、断面形は浅い皿状である。堆積土は１層であり、土師器坏の小片が１点出土したほか、底面中央部で礫が１点出土した。遺構の重複関係は

SD37溝跡より新しい。

P4（波板状凹凸B）

調査区南部で検出され、長軸約2.2m、短軸約1.1mの不整形を呈する。深さは10～20cm、断面形は皿状であるが、底面に緩やかな凹凸が認められ、北端が一段と深くなる。堆積土は1層であり、底面では南部で礫が数個出土したほか、北部で須恵器のE-5甕が出土した（第14図４）。口縁部破片であり、口唇部は外面が下方に突出しているほか、内面にも突帯が認められる。その他、ロクロ土師器坏の口縁部片１点と土器小片が数点出土した。遺構の重複関係はSD37溝跡より新しい。

その他、波板状凹凸Aのピットからロクロ土師器、須恵器片が数点出土した。また、波板状凹凸の上面で凹石が２点出土している（同図５、６）。両者とも、表裏両面の中央部に断面V字状の深い凹みを複数有している。

その他の遺構

P8　調査区西端中央部で検出され、長軸45cm、短軸25cmの不整形を呈する。深さは約８cm、断面形は扁平な浦鉢形で、堆積土は１層である。

P9　調査区西端中央部、ピット8の南隣で検出され、長軸90cm、短軸30cmの東西に細長い不整形を呈する。深さは４～10cm、底面はやや凹凸があり、東部が一段深くなる。断面形は不整形で、堆積土は１層である。遺構の重複関係としては、SD38溝跡より旧い。

ピット９のさらに南側において、東西に細長い不整形のピットが4基検出されている。これらの堆積土は全てシルト質粘土層１層である。

また、Ⅲ層中よりロクロ土師器など土器片が数点出土している。

(2) Ⅴ層上面検出遺構

SD40溝跡

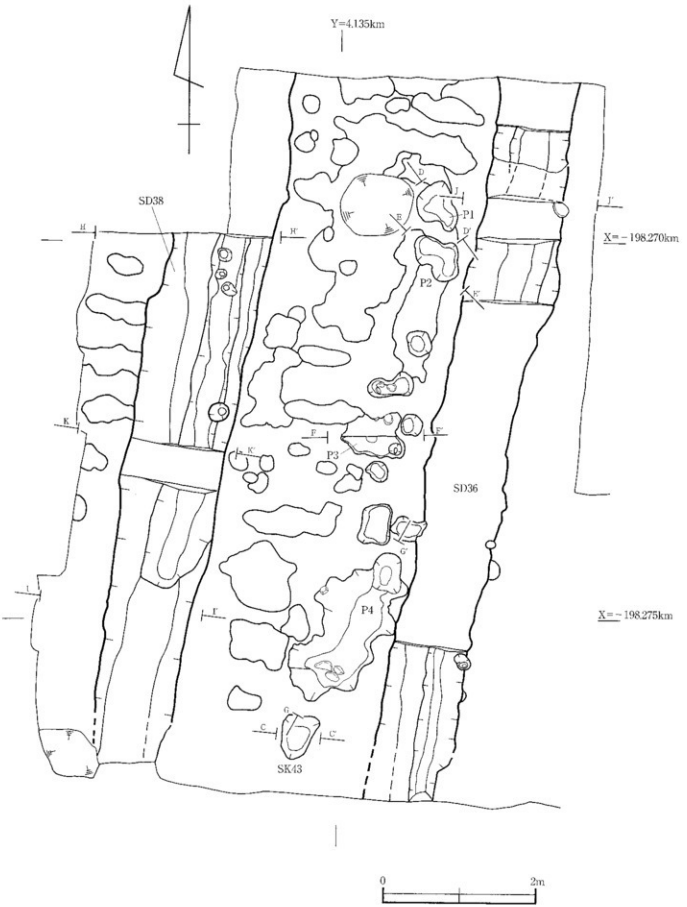
調査区西端で検出された、南北方向に縦走する溝跡である。方向はN-2°-Wであるが、調査区南端で西へ屈曲している。規模は上幅1.1～1.35m、下幅30～40cm、深さ60～70cmであり、断面形は逆台形を呈する。堆積土は４層で、第１層が黒褐色、第２～４層が暗褐色のシルト質粘土層である。第２、４層は褐色の砂質シルトをブロック状に多く含んでいる。この褐色の砂質シルトは基本層のⅤ層由来のものと考えられ、第４層の方に、より多く含まれている。出土遺物は、第１層よりロクロ土師器坏の口縁部片１点と土器小片１点、第２層より頁岩製の微細な剥片１点、第４層より非ロクロ土師器のC-13甕が出土している。これは体部の小片であるが、縦方向のハケメが認められる。遺構の重複関係としては、SK62土坑より旧い。

SK62土坑

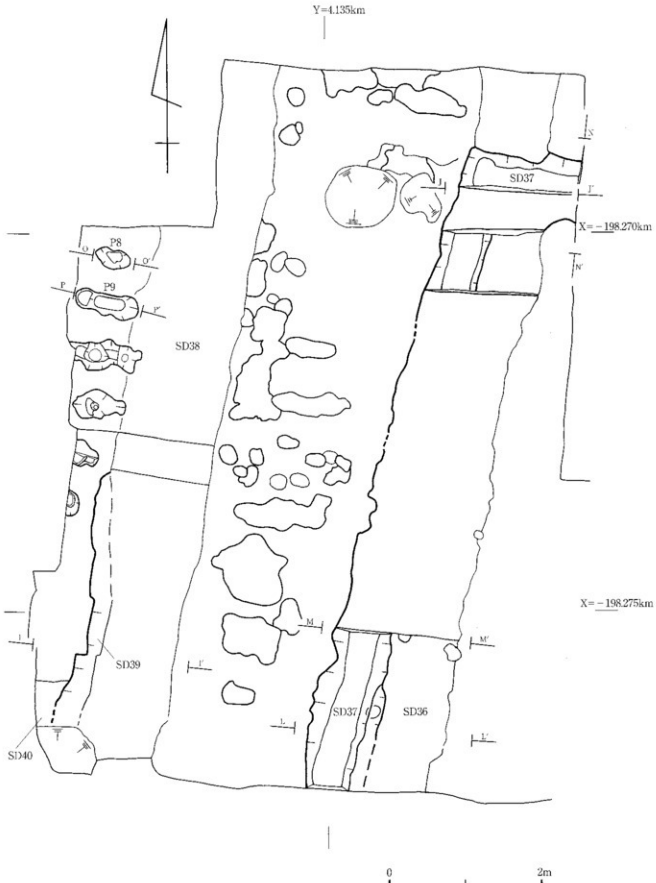
調査区西端で検出され、残存長で東西約35cm、南北約50cmの方形を呈する土坑である。東部はSD38溝跡が深く落ち込んだことにより、完全に削平されている。深さは10cm以上であり、堆積土は２層確認されている。第１層は黒褐色の粘土層であり、直径15cmほどの範囲で柱状に落ち込んで堆積している。第２層は暗褐色のシルト質粘土層である。遺構の重複関係としては、SD40溝跡より新しい。

SX44性格不明遺構

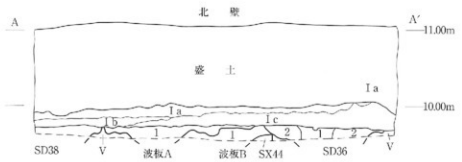
調査区北端で検出された遺構である。SD36、SD37溝跡や波板状凹凸によって遺構の大半が失われており、規模、形状は不明であるが、北西から南東方向へ斜走する溝状を呈していた可能性が考えられる。堆積土は暗褐色のシルト質粘土層１層である。

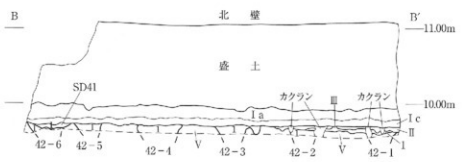


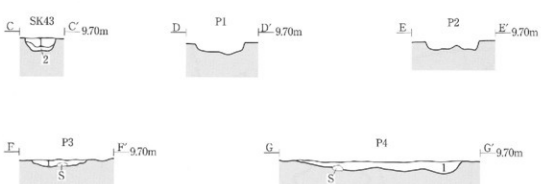
第９図　2a区道路跡（新）（S=1/50）



第10図　2a区道路跡（旧）（S=1/50）

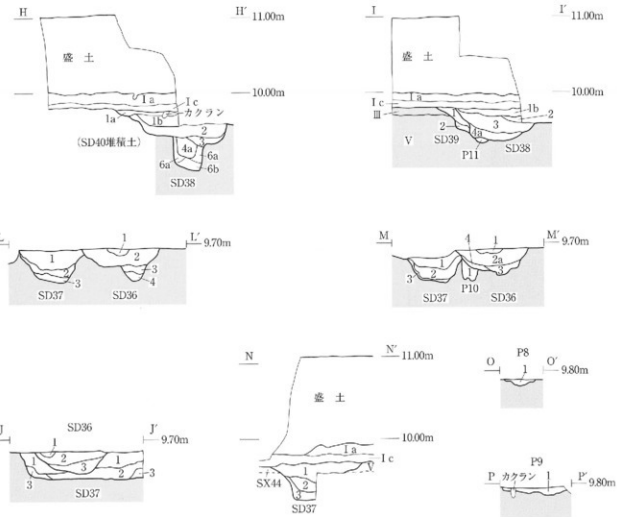






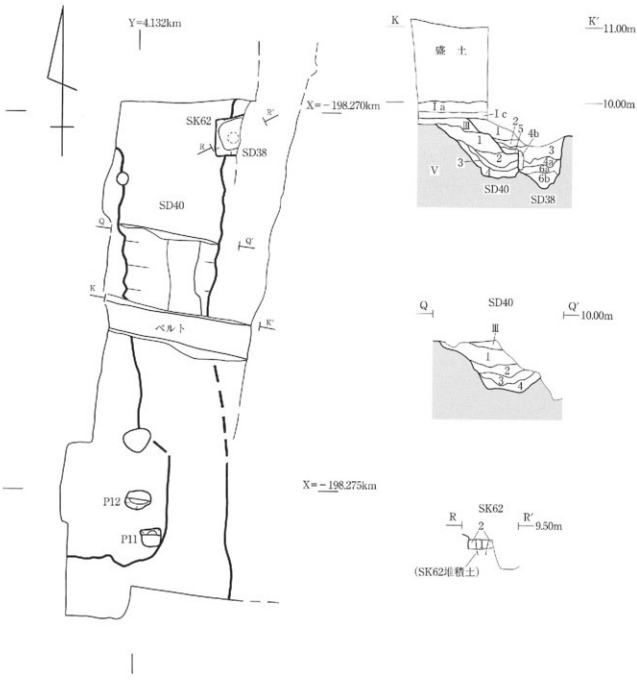
	層位	色 調	土 質	備 考
基本層	Ⅰa	2.5GY4/1 暗オリーブ灰色	粘土	旧水田層
	Ⅰb	2.5Y4/2 暗灰黄色	シルト質粘土	旧水田層、変化鉄少量
	Ⅰc	2.5Y5/2 黄褐色	シルト質粘土	旧水田層、変化鉄が斑状に点様、マンガン粒多量
	Ⅱ	10YR2/2 黒褐色	粘土	マンガン粒多量
	Ⅲ	10YR5/4 にぶい黄褐色	粘土	酸化鉄やや多量、マンガン粒少量
	Ⅴ	10YR4/4 褐色	粘土	酸化鉄やや多量、マンガン粒多量
波板A	1	10YR3/2 黒褐色 10YR3/4 暗褐色	粘土質シルト 細砂	両者の混合、しまりが強い、炭化物ブロック微量、酸化鉄多量、一部ににぶい黄橙色(10YR6/3) シルト粒を含む
波板B	1	10YR4/2 灰黄褐色	シルト質砂	しまりが強い、黒褐色（10YR3/2）粘土粒やや多量
SK43	1	10YR4/2 灰黄褐色	粘土質シルト	酸化鉄多量、マンガン粒やや多量、砂粒を含む
	2	10YR4/3 にぶい黄褐色	粘土	酸化鉄粒、マンガン粒少量
P4	1	10YR3/4 暗褐色	砂質シルト	しまりが強い、にぶい黄褐色（10YR7/3）細砂を含む
SX44	1	10YR2/3 黒褐色	シルト質粘土	マンガン粒多量、黄褐色（10YR5/6）粘土質シルト粒少量
SD41	1	10YR4/3 にぶい褐色	シルト質粘土	酸化鉄多量、マンガン粒少量
小海42-1	1	10YR3/4 暗褐色	粘土	マンガン粒、V層ブロック多量
小海42-2	1	10YR2/3 黒褐色	粘土	酸化鉄粒少量、マンガン粒多量、灰黄褐色（10YR4/2）シルト質粘土ブロックやや多量
小海42-3	1	10YR3/4 暗褐色	粘土	酸化鉄粒少量、マンガン粒、灰黄褐色（10YR4/2）シルト質粘土ブロック多量
小海42-4	1	10YR3/2 黒褐色	粘土	酸化鉄粒少量、マンガン粒、灰黄褐色（10YR4/2）シルト質粘土ブロック多量
小海42-5	1	10YR3/4 暗褐色	シルト質粘土	マンガン粒、灰黄褐色（10YR4/2）シルト質粘土ブロック多量
小海42-6	1	10YR2/3 黒褐色	シルト質粘土	マンガン粒多量

第11図　2a区断面図1（S=1/50）



	層位	色 調	土 質	備 考
SD36	1	10YR5/2 灰黄褐色	粘土質シルト	灰白色（10YR8/2）シルトブロックや中多量、黒褐色（10YR2/2）粘土ブロック、マンガン粒多量
	2	10YR4/2 灰黄褐色	シルト質粘土	酸化鉄少量、マンガン粒多量、炭化物ブロック、V層ブロック、灰白色（10YR8/2）シルト粒微量
	3	10YR4/3 にぶい黄褐色	シルト質粘土	酸化鉄やや多量、マンガン粒、にぶい黄褐色（10YR5/3）粘土ブロック少量、V層ブロック多量
	4	10YR4/3 にぶい黄褐色	シルト質粘土	マンガン粒微量、V層ブロックやや多量、にぶい黄橙色（10YR7/3）シルト粒少量
SD37	1	10YR3/2 黒褐色	シルト質粘土	酸化鉄粒少量、マンガン塊やや多量、黒色（10YR2/1）粘土ブロックが上層に多量
	2	10YR3/2 黒褐色	シルト質粘土	酸化鉄やや多量、灰黄褐色（10YR4/2）粘土質シルトブロック多量、にぶい黄橙色（10YR5/4）粘土質シルトブロック少量
	3	10YR6/3 にぶい黄橙色 10YR2/2 黒褐色	砂上	色調の異なる粘土ブロックの混合、しまりが上層より弱い、酸化鉄少量
SD38	1a	10YR4/3 にぶい黄褐色	シルト質粘土	酸化鉄、マンガン粒多量
	1b	10YR4/2 灰黄褐色	シルト質粘土	酸化鉄、マンガン粒多量
	2	10YR4/2 灰黄褐色	シルト質粘土	酸化鉄、マンガン粒多量、にぶい黄橙色（10YR7/2）シルト粒混在、黒褐色（10YR3/2）粘土ブロックを含む
	3	10YR3/2 黒褐色	粘土	炭化物粒量、酸化鉄、マンガン粒やや多量、灰黄褐色（10YR6/2）砂質シルトブロック少量
	4a	10YR4/3 にぶい黄褐色	粘土	黒褐色（10YR2/2）粘土ブロック、にぶい黄褐色（10YR5/4）の粘土と砂の混合ブロック多量、酸化鉄ブロックやや多量、マンガン粒少量
	4b	10YR3/3 暗褐色	粘土	酸化鉄粒、マンガン粒やや多量、にぶい黄褐色（10YR5/4）礫砂ブロックを下部に含む
	5	10YR2/3 暗褐色	粘土	マンガン粒少量
	6a	10YR5/6 黄褐色	礫砂	同色の粘土粒多量、しまりが弱い、酸化鉄粒、マンガン粒、灰黄褐色（10YR4/2）粘土ブロック少量
	6b	10YR5/6 黄褐色	礫砂、砂上	土質の異なるブロックの混合、酸化鉄粒微量、マンガン粒やや多量
SD39	1	10YR2/3 黒褐色	シルト質粘土	マンガン粒少量、褐色（10YR4/4）粘土質シルトブロック微多量
	2	10YR2/3 黒褐色	シルト質粘土	褐色（10YR4/4）粘土質シルトブロック微多量
P8	1	10YR4/3 にぶい黄褐色	シルト質粘土	礫砂をやや多量に含む、酸化鉄粒、マンガン粒少量
P9	1	10YR4/3 にぶい黄褐色	シルト質粘土	酸化鉄粒やや多量、マンガン粒微多量、黒褐色（10YR2/3）シルト質砂土ブロック少量
P10	1	10YR3/3 暗褐色	シルト質粘土	マンガン粒少量
P11	1	10YR3/4 暗褐色	粘土質シルト	炭化物灰、酸化鉄粒、黄褐色シルト粒微量

第12図　2a区断面図２（S=1/50）



	層位	色 調	土 質	備 考
SD40	1	10YR2/3 黒褐色	シルト質粘土	マンガン粒多量、褐色（10YR4/6）砂質シルト粒少量
	2	10YR3/4 暗褐色	シルト質粘土	炭化物微量、マンガン粒やや多量、暗色（10YR4/6）砂質シルトブロック多量
	3	10YR3/4 暗褐色	シルト質粘土	褐色（10YR4/6）砂質シルト粒少量
	4	10YR3/4 暗褐色	シルト質粘土	炭化物粒微量、暗色（10YR4/6）砂質シルトブロック極多量
SK62	1	10YR3/2 黒褐色	粘土	
	2	10YR3/3 暗褐色	シルト質粘土	Ⅴ層ブロック微量

第13図　2a区SD40溝跡平・断面図（S=1/50）

SD41溝跡

調査区中央を南北方向に縦断する溝跡である。上幅20～30cmで、深さは5cm、方向はN-7°-Eである。断面形は皿状で、堆積土は1層である。出土遺物は、上面より土器小片が数点出土している。遺構の重複関係としては、小溝状遺構群42より新しい。

小溝状遺構群42

調査区東半を南北に縦走する溝跡群で、6条検出された。上幅20～50cmで、方向はN-5～8°-Eである。遺構の重複関係としては、SD41溝跡より旧い。また、小溝状遺構群42より旧い溝跡が1条検出されている（第8図a）。

P10　調査区南部でSD36溝跡の下部から検出された。南部のみのため、形状は不明である。検出長は長軸20cm、短軸10cm以上、検出面からの深さは30cm以上である。堆積土は1層である。

P11　調査区南西部でSD38溝跡の下部から検出された。検出長は長軸25cm、短軸25cmの隅丸方形を呈する。深さは約8cm、断面形はU字形で、堆積土は1層である。

その他の出土遺物としては、V層上面より須恵器のE-6甕（同図7）、Ka-1剥片（同図8）が出土している。E-6甕は口唇部外面が鋭く突出する形態であり、自然釉の痕跡が認められる。Ka-1剥片は頁岩製であり、背面には自然面が残っている。また、腹面の端部には二次加工が一部施されている。さらに、須恵器の高台付坏の底部片1点、甕の破片数点、ロクロ土師器坏の口縁部片2点、底部片1点、内面黒色処理された土師器片など土器小片が多数、珪質凝灰岩製の剥片1点が出土した。また、SD38溝跡底面のV層中より縄文土器片が2点出土している。他の基本層出土遺物としては、Ib層より須恵器甕の体部片1点、土器小片2点、凹面に布目痕が認められる平瓦1点、珪質凝灰岩製の石核1点が出土したほか、Ic層より須恵器甕の体部片1点、土器片1点が出土した。

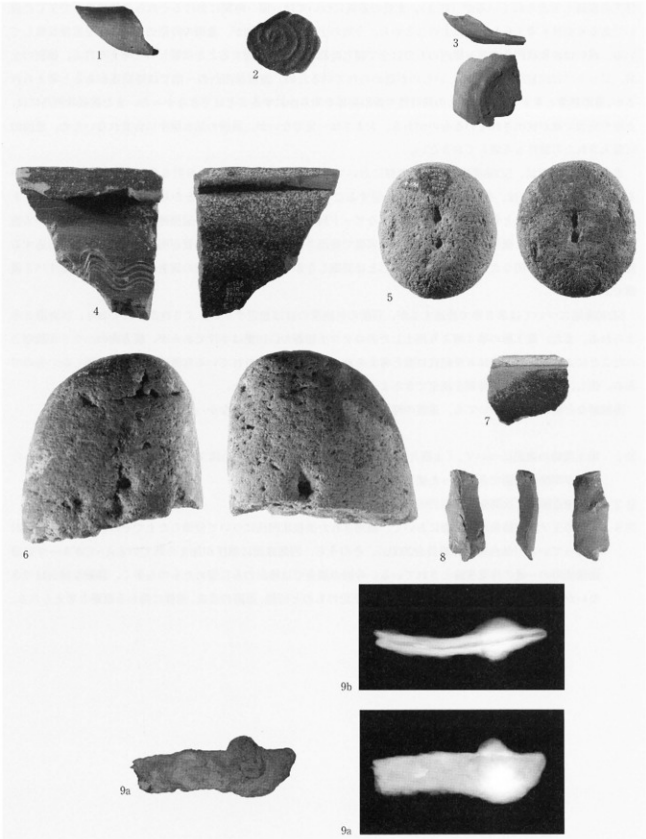
4．まとめ

Ⅱ層上面検出遺構とした道路跡について、調査区中央部で検出されたSD36溝跡と、調査区西端で検出されたSD38溝跡がほぼ平行して縦走している。この2本の溝跡は平面規模や上層の堆積土が非常に類似している。さらに、波板状凹凸は2本の溝跡の間にのみ分布しており、調査区東部には分布していない。以上のことから、SD36、SD38溝跡は同時期のものであり、道路跡の東西側溝として機能していたと考えられる。また、SD36溝跡と重複関係にあるSD37溝跡についても、SD36溝跡と規模、堆積土、方向が類似しており、同様の機能を持っていたと考えられる。調査区西端ではSD38溝跡と重複関係にあるSD39溝跡が検出されており、SD37溝跡と対応して道路側溝として機能していた可能性がある。このような溝跡の重複関係から、道路跡は少なくとも新旧2時期の段階があったと想定される。さらに、SD37溝跡が調査区北端で東へ屈曲していることから、旧期の道路跡はT字、或いはL字形を呈していた可能性が高い。また、SD38溝跡が調査区中央以北で急に深くなることについて、王ノ壇遺跡における過去の道路跡の調査でも類似した事例が認められる（註2）。その調査では、道路の合流点や、鍔溝が途切れ通路として機能していたと考えられる地点において、側溝が幅広く、深くなる傾向が指摘されている。今回のSD38溝跡の場合は調査区以北の様相が明らかでないため、これらと同様の事例とは即断できないが、深く掘り込んだ要因としてSD40溝跡と重複していることも一因と考えられる。深く掘り込まれる地点は、SD40溝跡と重複する部分であり、この落込み部の底面ではSD40溝跡の堆積土は完全に削平され、基本層が検出されている。落込み部が東側に偏っていることも、SD40溝跡の堆積土の分布がより少ない側を選択して掘り下げたためと考えられる。

また、この新旧2時期の道路跡と波板状凹凸の詳細な共伴関係は不明であった。波板状凹凸は土質により3群に大別したが、遺構検出面は全てV層上面であったため、掘り込み面の差異などは識別できなかった。また、掘り下げて調査を行った波板状凹凸A、Bの土坑、ピットについて、断面形状などで特徴的な差異は認められていない。両者とも底面に緩やかな凹凸をもつなど、状況は類似している。波板状凹凸の性格については、道路の造成、補修

No.	登録No.	遺構・層位	種別・器種	法量（cm）	調整・整数	写真図面
1	C-9	SD36・2層	赤ロクロ土師器・坏	器高4.1cm　口径14.2cm	内面：口縁部ヨコナデ→ヘラナデ　体部ヘラナデ・ナデ　内面：ヨコナデ→ヘラミガキ・黒色処理　胎土：砂粒・石英・白雲少量	1-1
2	A-1	SD38上面	縄文土器・深鉢	不明	外面：渦巻文　胎土：砂粒・石英少量、白針を含む	1-2
3	D-4	SD37・3層	ロクロ土師器・坏	残存高1.7cm　底径5.4cm	外面：体部ロクロナデ→ヘラナデ　底部：回転糸切り　胎土：砂粒・石英	1-3
4	E-5	P4・1層	須恵器・甕	不明	外面：ロクロナデ・波状文　内面：ロクロナデ　胎土：砂粒・石英・白針少量	1-4
5	Kc-4	流水状西白土面	四石	長さ10.6cm　幅6.6cm　厚さ5.5cm　重量470g		1-5
6	Kc-3	流水状西白土面	四石	残存長13.9cm　幅13.7cm　重量1.8kg		1-6
7	E-6	V層	須恵器・甕	不明	外面：ロクロナデ　内面：ロクロナデ　胎土：砂粒	1-7
8	Ka-1	V層	剥片	長さ7.1cm　幅2.2cm　厚さ1.5cm　重量29.6g	腹面：二次加工	1-8
–	Na-1	SD37・1層	洗練品	残存長8.5cm　幅2.3cm　厚さ1.1cm　重量31.4g		1-9

第14図　2a区出土遺物



写真図版1　2a区出土遺物（縮尺は第14図と同一　9…S=1/2）

作業の痕跡と考えられているが（註３）、土質の差異については、同一時期におけるそれらの作業の中で生じた違いである可能性も考えられる。以上のことから、今回の土質による大別が、遺構の時期の新旧関係を直接反映している、或いは波板状凹凸の同一群内のものは全て同じ時期のものと判断することは難しいと考えられる。個別の土坑、ピットではSD37溝跡より新しいものが認められているため、波板状凹凸の一部では時期差があると考えられるが、道路側溝と考えられる溝跡との同時性や新旧関係を明らかにすることはできなかった。また波板状凹凸には、上面や底面で踏が検出されているものがある。大きさは一定でないが、周囲の基本層中に含まれないため、意図的に混入された可能性も考慮しておきたい。

また Ⅱ層上面では、SD38溝跡のさらに西側において、ピット８、９を含め、合計６基のピットが検出されている（第10図）。これらは、東西に細長い形状を呈することや堆積土が類似することから、一連のものとしてピット列を形成しているものと考えられる。このようなピット列の検出状況は、過去の道路跡の調査で指摘されている波板状凹凸の検出状況と類似している。今回は、東側で検出された波板状凹凸と土質が明らかに違うこと、対応する側溝などの遺構が不明なことから、波板状凹凸とは認識しなかったが、今後周囲の調査を行う場合、注意すべき遺構である。

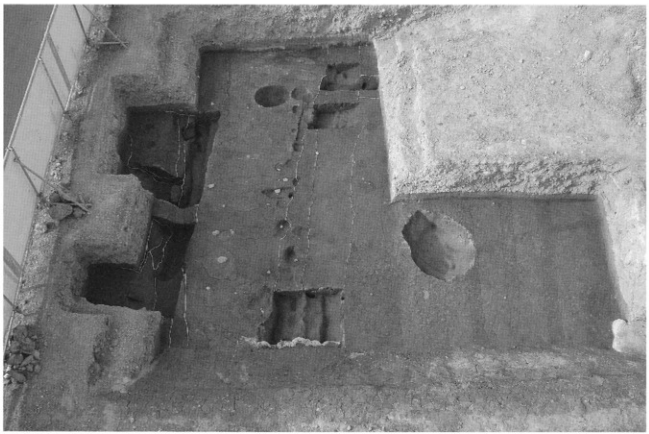
SD40溝跡については第５章で後述するが、官衙の区画溝のほぼ想定ライン上より検出されており、区画溝と考えられる。また、最下層の第４層より出土した非ロクロ土師器のC-13甕は小片であるが、縦方向のハケメが観察されたことにより遺物の年代は８世紀代以前と考えられ、これまで想定されている官衙の年代とは矛盾しないものである。但し、詳細な遺構の時期を決定できるような遺物は出土しなかった。

道路跡など他の遺構についても、遺構の時期を比定できる遺物は出土しなかった。

註１　出土遺物の表記について、「土器片」と記載したものは、細片のため縄文土器、弥生土器、土師器といった種別が明確に判別できなかった破片である。

註２　王ノ壇遺跡第２次調査（竹田1999、仙台市教育委員会2000a）

註３　前述の王ノ壇遺跡第２次調査において、検出された波板状凹凸について分類した上でその性格について検討を行っている（仙台市教育委員会2000a）。そのうち、凹部底面に圧痕が加えられているA～Cグループは道路構築時の一連の作業痕跡とされている。今回の調査では検出のみに留めたものも多く、詳細な検討はできないが、堆積土がしまりの強い土層であり、上記のものと同様、道路の造成、補修に関わる痕跡と考えられる。



1．調査区全景（南から）

2．調査区西部（南から）

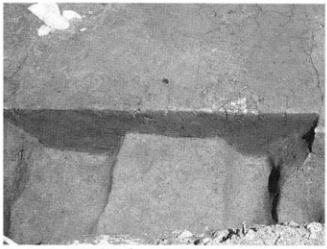
写真図版２　2a区調査区全景

1．道路跡検出状況（南から）

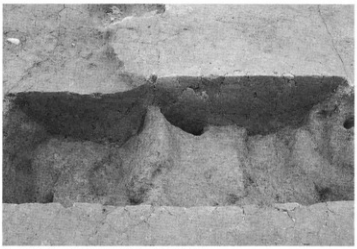
2．道路跡調査状況（南から）

写真図版３　2a区道路跡

1．調査区北壁断面（西部）

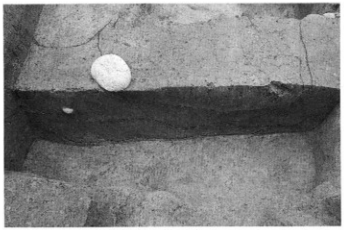


2．SD36・SD37断面（L－L′南から）

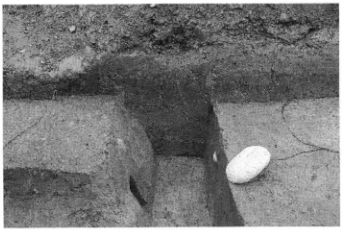


3．SD36・SD37断面（M－M′南から）

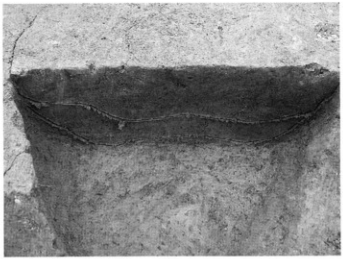
写真図版4　道路跡関連遺構断面1



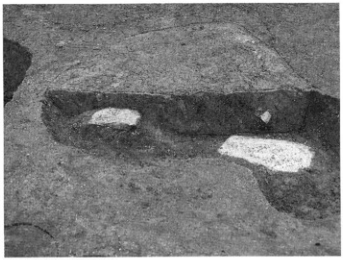
1．SD36・SD37断面（J′－J北から）



2．SD37断面（N－N′調査区東壁）

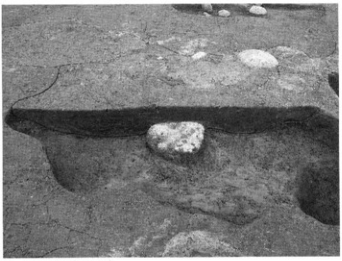


3．SK43断面（南から）



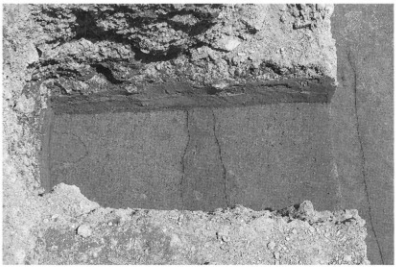
4．P1断面（南から）

5．P2断面（南から）



6．P3断面（南から）

写真図版5　道路跡関連遺構断面2



1．SD38・SD39検出状況（南から）

2．SD38・39検出状況（南から）

3．SD38・SD39断面（I′－I北東から）

写真図版6　SD38・SD39溝跡調査状況（調査区南西部）

1．SD38断面（H－H′南から）

2．SK62断面（南東から）

3．SK62掘下げ後（南東から）

写真図版7　SD38溝跡・SK62土坑

1．SD40調査状況（調査区北部　南から）

2．SD40検出状況（南から）

写真図版８　SD40溝跡１

1．SD40検出状況（南から）

2．SD40屈曲部（北東から）

写真図版９　SD40溝跡２（調査区南端の屈曲部）

1．SD40断面（Q－Q′南から）

2．SD40断面（K′－K北から）

写真図版10　SD40溝跡（断面）

Ⅲ．2b区の調査

1．調査概要

2b区は官衙の区画溝東辺の想定ライン上で、中央やや南寄りに位置しており、西方に約40m離れてSB121総柱建物跡が検出された地点である。ここに南北３m×東西11mの調査区を設定した。重機により盛土、耕作土を除去し、精査を行った。その結果、調査区西端で溝跡が検出され、その規模を把握するため、調査区を西へ1.5m拡張した。調査区東半ではⅢ、Ⅳ層が比較的厚く堆積していたため、Ⅲ層上面で検出された遺構は完掘し、写真撮影と図面作成を行った後、Ⅴ層上面での精査を行っている。Ⅴ層上面で検出された遺構については、その性格を明らかにするため一部掘り下げて調査を行い、成果がまとまった時点で写真撮影と図面作成を行った。

2．基本層序

調査地点には盛土が70～130cmあり、それより下に１～Ⅴ層が確認された。Ⅱ層はシルト質粘土層であり、調査区東南部に堆積するほか、北西部で部分的に堆積している。Ⅲ層は粘土質シルト層であり、調査区東部に堆積しており、西部では部分的な堆積となっている。また、SD50溝跡の上部では厚く堆積しており、灰白色火山灰がブロック状に含まれることが確認された。Ⅳ層は粘土質シルト層であり、調査区東部に厚く堆積している。Ⅴ層はシルト質粘土層である。どの基本層も他の調査区と比べ、シルトの割合が多い土層であった。

3．遺構と遺物

Ⅱ、Ⅲ、Ⅴ層で遺構が検出された。Ⅱ層上面では溝跡２条が検出され、Ⅲ層上面では溝跡４条、小溝状遺構群１群、ピット７基、Ⅴ層上面では溝跡３条、小溝状遺構群２群、ピット25基が検出された。

(1) Ⅱ層上面検出遺構

SD46溝跡

調査区西端でSD47溝跡と並行して検出された、南北方向に緩走する溝跡であり、方向はN-0～1°-Eである。土層の堆積状況から、新旧２時期あることが確認された。遺構の重複関係としては、SX48性格不明遺構より新しい。

SD46a溝跡　旧期の溝跡である。上幅0.8～1.1m、下幅35～60cm、深さ40cmで、断面形は逆台形を呈する。堆積土は２層である。

SD46b溝跡　新期の溝跡であり、旧期よりも幅が狭く、やや深い溝跡である。上幅約50cm、下幅約20cm、深さ約50cmで、断面形はU字形を呈する。堆積土は粘土層が２層である。

SX48性格不明遺構

SD46溝跡の下部で、溝跡と並行して検出された遺構であり、規模は上幅50～60cm、下幅10cmである。深さについては、調査区北壁付近では落ち込んでおり90cmであるが、１m南では60cmほどとなる。断面形はV字形を呈している。堆積土は大別して５層に区分される。第１、２層がシルト質粘土層であり、以下の第３～５層は上層よりしまりの弱い粘土層であった。また、第３、4b、５層は部分的な堆積土である。第１層より土器小片が２点出土している。

SD49溝跡

調査区西部で検出された、南北方向に緩走する溝跡である。検出長は約1.7mであり、調査区中央付近から北へ延びており、方向はN-1°-Wである。上幅40～50cm、下幅20～25cm、深さ15cmで、断面形は扁平なU字形を呈する。堆積土はシルト質粘土層が１層である。

(2) Ⅲ層上面検出遺構

SD47溝跡

調査区西端でSD46溝跡と並行して検出された、南北方向に緩走する溝跡であり、方向はN-2～3°-Wである。上

幅70～80cm、下幅25cm、深さ50cmで、断面形は不整形な逆台形を呈する。堆積土は４層で、いずれもシルト質粘土層である。堆積土の大半を占める第１、２層はSD46溝跡の堆積土と類似しているが、東寄りに堆積する第３、４層は黒褐色のシルト質粘土をブロック状に含む特徴がある。第４層より土器小片が数点出土している。遺構の重複関係としては、SD50溝跡より新しい。

SD51溝跡

調査区中央部を南北に縦走する溝跡であり、方向はN-2°-Eである。上幅80～90cm、下幅30～60cm、深さ15～20cmで、断面形は扁平な箭鋒形を呈するが、部分的に底面に凹凸が認められる。堆積土は基本的にシルト質砂層の１層であり、底面の凹部にのみ、シルト質粘土層が堆積している。第１層中には粗砂の集積部が認められる。

小溝状遺構群45

調査区南東部で３条検出された、北西から南東方向へ斜走する溝跡群である。方向はS-32～51°-Eであり、規模は上幅20～35cm、下幅10cm、深さは５～15cmである。堆積土はいずれも１層で、遺構の上面に堆積するⅡ層よりやや明るい黒褐色のシルト質粘土層である。土器小片が数点出土した。遺構の重複関係ではピット２より旧い。

(3) Ⅴ層上面検出遺構

SD50溝跡

調査区西端で検出された、南北方向に縦走する溝跡である。上幅2.7～3.2m、下幅1.6～1.7m、深さ約１mで、断面形は逆台形を呈するが、上部で傾斜が緩やかになる。堆積土はシルト質粘土、粘土層が９層で、第２層中には粗砂が、第３、５層中には細砂が含まれている。第６層は暗褐色のシルト質粘土層、第７層は黒褐色の粘土層であり、第８層は褐色の砂質シルトをブロック状に非常に多く含む粘土層であった。また、第９層は底面東寄りにのみ薄く堆積する粘土層であり、粘性が非常に強い土層である。また、第９層中には黒褐色粘土も帯状に堆積している。溝の底面からはピット４、５が並んで検出された。いずれも暗褐色のシルト質粘土層が堆積している。さらに溝の東壁面からは、ピット６が検出された。これらのピットも含め、溝跡の堆積土から遺物は出土していない。

SD54溝跡

調査区東部で検出された、南北方向に縦走する溝跡である。検出長1.9mで、調査区中央付近から南へ延びており、方向はN-0～1°-Wである。上幅80cm、下幅35～50cm、深さ15cmで、断面形は不整形である。堆積土は暗褐色のシルト質粘土層であり、砂粒を含んでいる。遺構の重複関係は、小溝状遺構群52、53より新しい。

小溝状遺構群52

調査区東半で２条検出された、東西方向に横断する溝跡群である。方向はE-1～3°-Nで、上幅約30cmである。小溝状遺構群52-1の上面より、上器小片がⅠ点出土している。SD54溝跡より旧く、小溝状遺構群53より新しい。

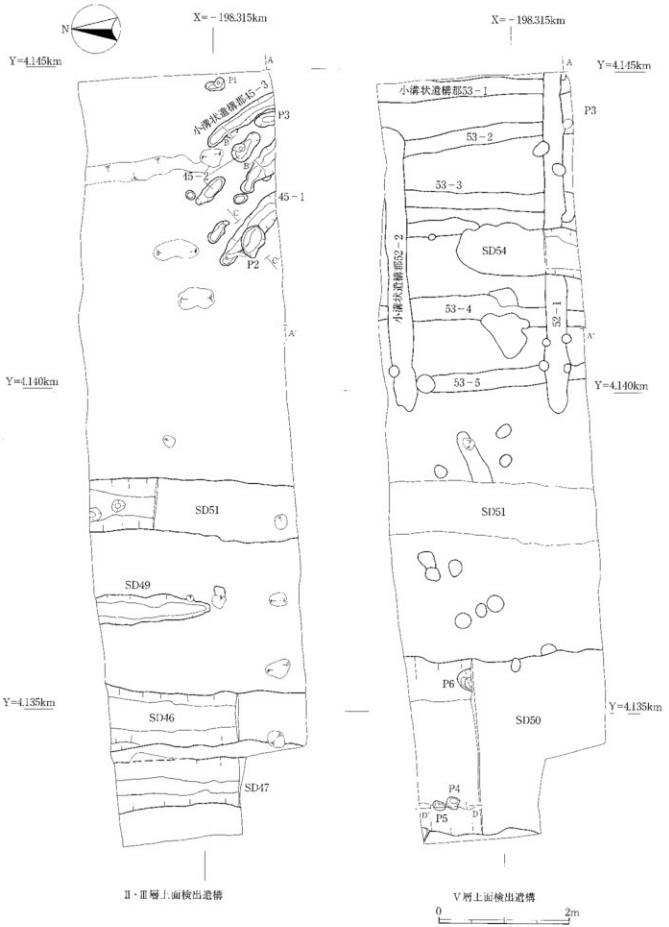
小溝状遺構群53

調査区東半で６条検出された、南北方向に縦走する溝跡群である。方向はN-0～8°-Wで、上幅25～35cmである。SD54溝跡、小溝状遺構群52より旧い。

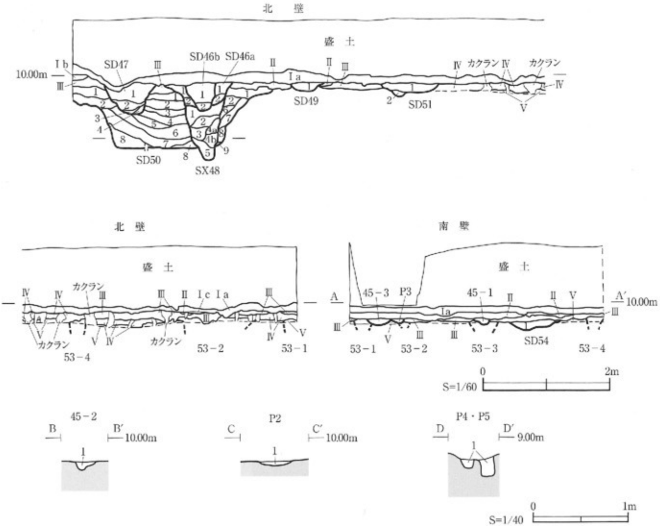
遺構外出土遺物としては、Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ、Ⅴ層より土器小片が数点ずつ出土している。

４．まとめ

2b区ではⅡ、Ⅲ、Ⅴ層において遺構が検出された。遺構の新旧関係について、Ⅲ層で検出された遺構はⅤ層で検出された遺構より新しい。また、Ⅲ層上面で検出されたSD47溝跡は堆積土の第３、４層中に、Ⅱ層と同質の黒褐色シルト質粘土を含んでいる。そのため、SD47溝跡は本来、Ⅱ層上面から掘り込まれ、その後、周囲の土が崩落して第３、４層中に混入した可能性が考えられる。また、時期を判別できる遺物は出土していないため、各遺構の年代は不明である。Ⅴ層上面で検出されたSD50溝跡については、2c区のSD60溝跡と併せ、第５章で後述する。



第15図　2b区平面図（S=1/60）



	層位	色　調	土　質	備　考
基本層	Ⅰa	2.5Y5/2　暗灰黄色	粘土	旧水田層、酸化鉄下面に集積
	Ⅰc	2.5Y5/3　黄褐色	砂質シルト	粘土粒少量
	Ⅱ	10YR2/2　黒褐色	シルト質粘土	炭化物粒、黄褐色（10YR5/6）シルト粒少量、マンガン粒やや多量
	Ⅲ	10YR5/3　にぶい黄褐色	粘土質シルト	酸化鉄、マンガン粒多量、灰白色（2.5Y8/2）シルトブロックやや多量（灰白色火山灰）
	Ⅳ	10YR3/3　暗褐色	粘土質シルト	マンガン粒多量
	Ⅴ	10YR4/4　褐色	シルト質粘土	酸化鉄粒少量、マンガン粒やや多量
SD46a	1	10YR3/3　暗褐色	シルト質粘土	酸化鉄、マンガン粒やや多量、灰白色（2.5Y8/1）シルト粒少量
	2	10YR4/2　灰黄褐色	粘土	マンガン粒やや多量、酸化鉄、灰白色（2.5Y8/1）シルト粒少量
SD46b	1	10YR4/3　にぶい黄褐色	粘土	マンガン粒多量、灰白色（2.5Y8/1）シルト粒微量
	2	10YR4/2　灰黄褐色	粘土	酸化鉄やや多量、マンガン粒多量、灰白色（2.5Y8/1）シルト粒微量
SD47	1	10YR4/2　灰黄褐色	シルト質粘土	酸化鉄粒多量、マンガン粒やや多量、白色シルト粒、黒色（7.5YR2/1）シルト質粘土ブロック少量
	2	10YR3/2　黒褐色	シルト質粘土	酸化鉄やや多量、白色シルト粒、黒色（7.5YR2/1）シルト質粘土ブロック、にぶい黄褐色（10YR5/3）砂質シルトブロック微量
	3	10YR4/3　にぶい黄褐色	シルト質粘土	黒褐色（10YR2/3）シルト質粘土ブロック多量、褐色（10YR4/4）粘土質シルトブロック少量
	4	10YR4/3　にぶい黄褐色	シルト質粘土	黒褐色（10YR2/3）シルト質粘土ブロック、酸化鉄微量
SX48	1	10YR4/3　にぶい黄褐色	粘土	上層より粘性が強い、酸化鉄粒、マンガン粒多量、灰白色（2.5Y8/1）シルト粒微量
	2	10YR5/6　黄褐色	シルト質粘土	同色砂質シルトブロック少量、酸化鉄粒、マンガン粒少量
	3	10YR4/3　にぶい黄褐色	粘土	上層よりしまりが弱い、酸化鉄粒、明黄褐色（10YR6/8）砂質シルトブロック少量、マンガン粒微量
	4a	10YR3/4　暗褐色	粘土	しまりが比較的弱い、酸化鉄ブロック、マンガン粒少量、にぶい黄褐色（10YR5/4）粘土質シルト粒やや多量、明褐色（7.5YR5/6）シルトブロック微量（壁上か）
	4b	10YR4/3　にぶい黄褐色	粘土	しまりが比較的弱い、酸化鉄ブロック微量、黄褐色（10YR5/8）シルト質粘土ブロック極多量、黒褐色（10YR2/3）粘土ブロック下部に多量
	5	10YR3/4　暗褐色	粘土	しまりが比較的弱い、酸化鉄微量、マンガン粒、黄褐色（10YR5/6）シルトブロック少量
SD50	1	10YR3/3　暗褐色	シルト質粘土	マンガン粒、にぶい黄褐色（10YR4/3）粘土粒やや多量
	2	10YR3/3　暗褐色	シルト質粘土	同色の粗砂を含む、炭化物粒、にぶい黄褐色（10YR4/3）粘土粒微量、マンガン粒やや多量
	3	10YR3/3　暗褐色	粘土	2層より明るい、同色細砂、酸化鉄粒、マンガン粒少量、黒褐色（10YR2/3）粘土ブロック微量
	4	10YR4/2　灰黄褐色	粘土	上層よりしまりが弱い、酸化鉄やや多量、マンガン粒少量
	5	10YR3/3　暗褐色	粘土	同色細砂、黄褐色（10YR5/6）砂質シルトブロック、酸化鉄少量、マンガン粒やや多量
	6	10YR3/3　暗褐色	シルト質粘土	酸化鉄粒少量、マンガン粒やや多量、褐色（10YR4/6）シルト粒微量
	7	10YR2/3　黒褐色	粘土	炭化物粒微量、褐色（10YR4/4）砂質シルトブロックが壁際に堆積
	8	10YR4/4　褐色	砂質シルト	両者の混合、マンガン粒少量
		10YR3/4　暗褐色	粘土	
	9	10YR4/4　褐色	粘土	両者の混合、粘性が上層より強い、黒褐色（10YR3/2）粘土ブロック多量、シルトを少量含む
		10YR3/4　暗褐色	粘土	
SD49	1	10YR4/2　灰黄褐色	シルト質粘土	酸化鉄粒、マンガン粒少量、Ⅱ層粒微量
SD51	1	10YR4/4　褐色	シルト質砂	粗砂が集積、酸化鉄少量、マンガン粒やや多量
	2	10YR5/3　にぶい黄褐色	シルト質粘土	砂粒、マンガン粒少量
小溝52-1	1	10YR2/3　黒褐色	粘土	マンガン粒多量、黄褐色（10YR5/6）砂質シルトブロック少量
小溝52-2	1	10YR3/3　暗褐色	シルト質粘土	酸化鉄微量、マンガン粒多量
小溝53-1	1	10YR3/3　暗褐色	シルト質粘土	マンガン粒、黄褐色（10YR5/6）砂質シルトブロックやや多量
小溝53-4	1	10YR3/3　暗褐色	粘土	酸化鉄少量、マンガン粒微量
P2	1	10YR2/3　黒褐色	シルト質粘土	マンガン粒多量、Ⅲ層ブロック少量

第16図　2b区断面図

1．遺構検出状況（南から）

2．SD46・SD47検出状況（北から）

3．SD46・SD47完掘状況（南から）
右…SD46　左…SD47

写真図版11　SD46・SD47溝跡

1．SX48検出状況（南から）

2．SX48調査状況（南から）

3．SD50調査状況（南から）

写真図版12　2b区西部遺構調査状況

1．調査区全景（南から）

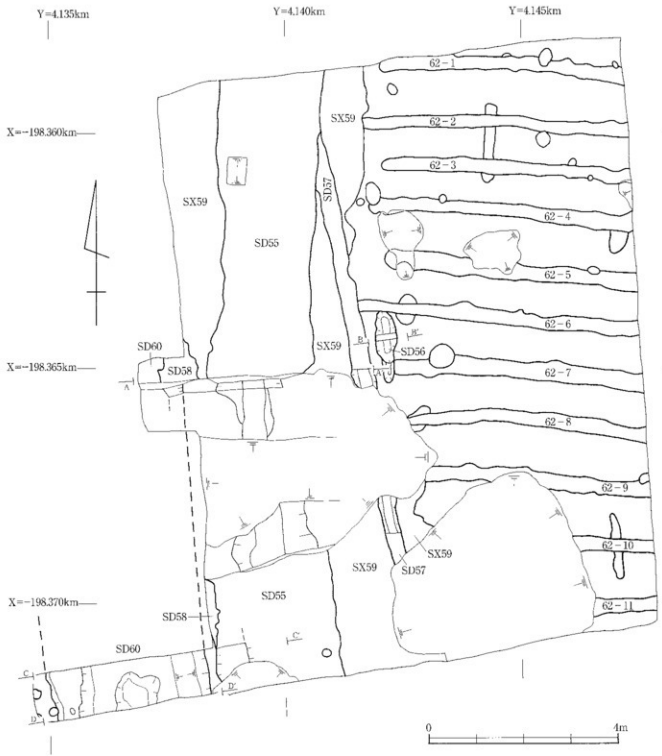
2．SD50断面（調査区北壁）

写真図版13　2b区遺構調査状況

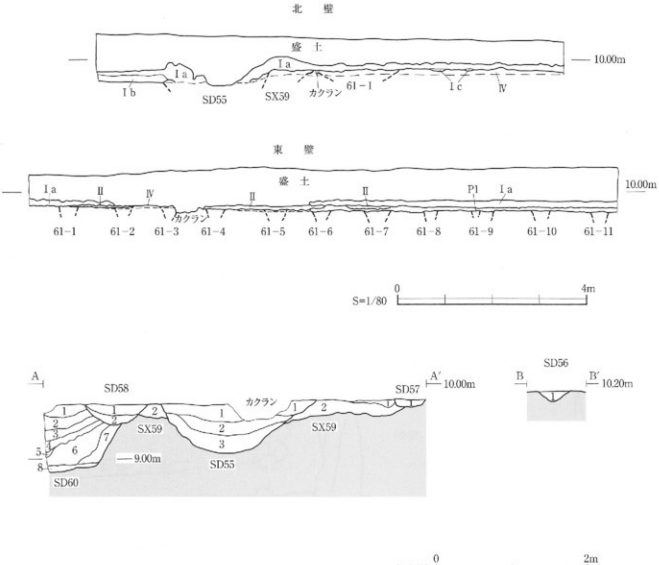
Ⅳ．2c区の調査

1．調査概要

2c区は官衙の区画溝東辺の想定ライン上の南部に位置し、西方に約40m離れてSB135掘立柱建物跡が検出された地点である。ここに南北12m×東西10mの調査区を設定し、重機により盛土、耕作土を除去し、精査を行った。その結果、調査区西端部において溝跡の一部が検出され、調査区南西端を西側へ約４m拡張して調査を進めた。調査区東半に分布していたⅣ層は掘り下げ、Ⅴ層上面で遺構を検出している。遺構についてはその性格を明らかにするため、部分的に掘り下げており、成果がまとまった時点で写真撮影、図面作成を行い調査を終了した。



第17図　2c区平面図（S=1/80）



	層位	色　調	土　質	備　考
基本層	Ⅰa	10YR5/3　にぶい黄褐色	シルト質粘土	肥水田層、酸化鉄下面に偏積、マンガン粒少量
	Ⅰb	10YR5/3　にぶい黄褐色	シルト質粘土	Ⅰa層よりやや暗く、粘性が強い、酸化鉄粒やや多量、マンガン粒多量
	Ⅰc	10YR5/3　にぶい黄褐色	シルト	マンガン粒やや多量、砂粒少量
	Ⅱ	10YR3/4　暗褐色	粘土	旧層ブロック極多量
	Ⅳ	10YR3/4　暗褐色	粘土	主層より暗い、マンガン粒多量
	Ⅴ	10YR4/4　褐色	粘土	マンガン粒多量
SD55	1	10YR4/3　にぶい黄褐色	粘土質シルト	酸化鉄粒多量、白色小礫、雑砂少量
	2	10YR5/2　灰黄褐色	粘土	マンガン粒極多量、雑砂少量
	3	10YR5/2　灰黄褐色	粘土	粘性が強い、しまりは上層に比べ弱い、マンガン粒多量
SD56	1	10YR4/3　にぶい黄褐色	シルト質粘土	酸化鉄、マンガン粒やや多量
SD57	1	10YR3/4　暗褐色	粘土質シルト	酸化鉄、マンガン粒多量
SD58	1	10YR4/3　にぶい黄褐色	シルト質粘土	酸化鉄粒少量、マンガン粒多量
	2	10YR5/2　灰黄褐色	シルト質粘土	マンガン粒多量、黄褐色（10YR5/6）粘土ブロックを下部に多量に含む
SX59	1	10YR5/4　にぶい黄褐色	シルト質砂	しまりが非常に強い、酸化鉄少量、マンガン粒やや多量
	2	10YR5/3　にぶい黄褐色	砂質シルト	マンガン粒極多量、粘土やや多量
小溝61-1	1	10YR2/3　黒褐色	粘土質シルト	マンガン粒極多量、V層ブロックやや多量、明褐色（7.5YR5/6）シルト粒微量
小溝61-2	1	10YR3/3　暗褐色	シルト質粘土	マンガン粒極多量、V層ブロックやや多量、明褐色（7.5YR5/6）シルト粒微量
小溝61-3	1	10YR2/3　黒褐色	粘土	マンガン粒極多量、V層ブロックやや多量、明褐色（7.5YR5/6）シルト粒微量
小溝61-4	1	10YR3/3　暗褐色	粘土	炭化物粒、V層ブロック少量、マンガン粒やや多量
小溝61-5	1	10YR3/3　暗褐色	粘土質シルト	炭化物ブロック微量、V層ブロック、マンガン粒やや多量
小溝61-6	1	10YR3/2　黒褐色	粘土	炭化物粒、V層ブロック少量、明褐色（7.5YR5/6）シルト粒微量、他より粘性が強い
小溝61-7	1	10YR2/3　黒褐色	粘土	炭化物粒、V層ブロック少量
小溝61-8	1	10YR3/4　暗褐色	シルト質粘土	炭化物粒、V層ブロック少量
小溝61-9	1	10YR3/3　暗褐色	シルト質粘土	マンガン粒、V層ブロック多量
小溝61-10	1	10YR3/3　暗褐色	粘土	マンガン粒、V層ブロック多量
小溝61-11	1	10YR3/4　暗褐色	シルト質粘土	マンガン粒、V層粒やや多量
P1	1	10YR4/3　にぶい黄褐色	シルト質粘土	炭化物粒、V層ブロック少量

第18図　2c区断面図

2．基本層序

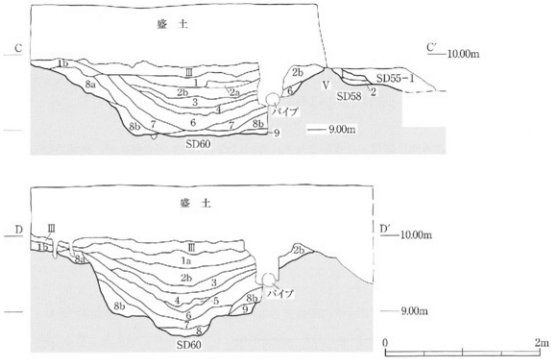
調査区には盛土が0.5～1mあり、その下部にⅠ、Ⅲ～Ⅴ層が確認された。Ⅰ層はⅠa～Ⅰb層に細分される。Ⅰb層は調査区東部で堆積しており、Ⅰc層は非常に部分的な堆積状況である。Ⅲ層は調査区東部で部分的に分布していたほか、SD60溝跡の堆積土上部で検出された。Ⅳ層は暗褐色の粘土層で、調査区東部のみに分布していた。Ⅴ層は褐色の粘土層で、遺構は全てこのⅤ層上面で検出されている。

3．遺構と遺物

Ⅴ層上面より溝跡５条、性格不明遺構１基、小溝状遺構群１群、ピットが検出された。

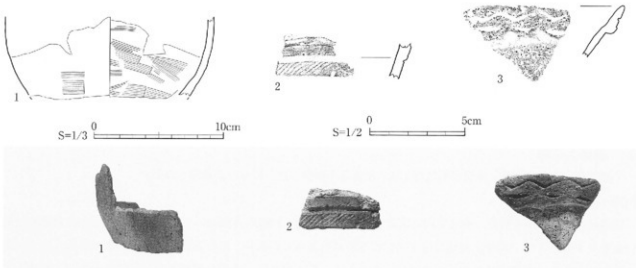
SD60溝跡

調査区西端で検出された、南北方向に縦走する溝跡である。上幅3.5～3.8m、下幅1.8m、深さ1mで、断面形は逆台形を呈する。また、調査区南端では中央部に不整形な落込みがあり、段を形成している。この落込み部では深さ約1.2mである。堆積土は大別して９層に区分される。第１層は1a、1b層に細分され、1a層は中央部に堆積する粘土層であり、1b層は溝の西側上部に堆積するシルト質粘土層である。1a層中では炭化物、焼土の集中部が検出された。第２層も2a、2b層に細分される。2a層はにぶい黄褐色のシルト質粘土層であるが、部分的な堆積である。2a、2b層とも粗砂を含んでいる。第３層は細砂を含む暗褐色の粘土層であるが、にぶい黄橙色のシルトが帯状に



	層位	色　調	土　質	備　考
SD60	1a	10YR3/3　暗褐色	シルト質粘土	マンガン粒、にぶい黄褐色（10YR4/3）粘土粒やや多量
	1b	10YR3/3　暗褐色	粘土	マンガン粒多量
	2a	10YR4/3　にぶい黄褐色	シルト質粘土	マンガン粒多量、埋砂、暗褐色（10YR3/3）粘土粒微量
	2b	10YR3/3　暗褐色	シルト質粘土	褐色の粗砂を含む、炭化物粒、にぶい黄褐色（10YR4/3）粘土粒微量、マンガン粒やや多量
	3	10YR3/3　暗褐色	粘土	埋砂、酸化鉄粒、マンガン粒少量、黒褐色（10YR2/3）粘土ブロック微量、にぶい黄橙色（10YR6/3）シルトを帯状に含む
	4	10YR4/2　灰黄褐色	粘土	上層よりしまりが弱い、酸化鉄やや多量、マンガン粒少量
	5	10YR3/3　暗褐色	粘土	褐色細砂、黄褐色（10YR5/6）砂質シルトブロック、酸化鉄少量、マンガン粒やや多量
	6	10YR3/3　暗褐色	シルト質粘土	酸化鉄粒少量、マンガン粒やや多量、褐色（10YR4/6）シルト粒微量
	7	10YR2/3　黒褐色	粘土	炭化物粒微量、褐色（10YR4/4）砂質シルトブロックが斑状に堆積
	8a	10YR4/4　褐色	シルト	部分的な堆積、8b層に比べ、褐色シルトブロックの混合が多い
		10YR3/4　暗褐色	粘土	
	8b	10YR4/4　褐色	砂質シルト	両者の混合、マンガン粒少量
		10YR3/4　暗褐色	粘土	
	9	10YR4/4　褐色	粘土	両者の混合、粘性が上層より強い、黒褐色（10YR3/2）粘土ブロック多量、シルトを少量含む
		10YR3/4　暗褐色	粘土	

第19図　SD60溝跡断面図（S=1/50）



No.	登録No.	遺構・層位	種別・器種	法量（cm）	調整・粘土
1	C-12	5層	赤ロクロ土師器・逆	不明	外面：体部ヘラナデ　内面：体部ヘラナデ　粘土：砂粒・石英
2	A-2	61-7上面	縄文土器・深鉢	不明	外面：RL縄文→沈線→ミガキ　内面：ミガキ　粘土：砂粒・石英
3	B-2	カクラン	弥生土器・壁か壺	不明	外面：擬面文・粘土紐貼付→横横得圧　粘土：砂粒・石英

第20図　2c区出土遺物

堆積している状況が確認された。第４層は灰黄褐色の粘土層で、しまりが比較的弱い。第５層は細砂を含む暗褐色の粘土層であるが、部分的な堆積状況である。第８層は褐色のシルトと暗褐色の粘土の混合層であるが、8a、8b層に細分される。8a層は溝の西側上部、8b層は溝跡底面近くに堆積している。第９層は溝跡底面東部にのみ堆積する粘土層である。出土遺物については、8b層より内面黒色処理された坏と考えられる土師器小片が１点出土している。遺構の重複関係としては、SD58溝跡より旧い。

SD55溝跡

調査区西半を南北方向に縦断する溝跡であり、方向は北半でN-2°-Eであるが、南部ではN-5°-Wとなる。規模は上幅1.8～２m、下幅40～50cm、深さ70cmであり、断面形はU字形を呈する。堆積土は３層で、第１層はにぶい黄褐色の粘土質シルト層、第２、３層は灰黄褐色の粘土層である。第１層は基本層のⅠb層と非常に類似している。出土遺物については、第２層より大堀相馬産陶器の灰釉碗の口縁部片が１点、第３層より在地産の無釉陶器の１-3甕、土師質土器片１点が出土している。遺構の重複関係としては、SD57溝跡、SD58溝跡、SX59性格不明遺構より新しい。

SD56溝跡

調査区中央部で検出された南北方向の溝跡である。検出長約1.5mと小規模な溝跡であり、上幅25～45cm、下幅15cm、深さは13cmで、方向はN-3°-Wである。断面形はU字形で、堆積土はシルト質粘土層の１層である。出土遺物については、内面黒色処理された土師器小片１点と土器小片１点が出土している。遺構の重複関係としては、小溝状遺構群61より新しい。

SD57溝跡

調査区中央部を南北方向に縦断する溝跡で、方向はN-11°-Wである。上幅30～40cm、下幅15～25cmで、深さは10cmである。断面形はU字形で、堆積土は粘土質シルト層１層である。遺構の重複関係としては、SD55溝跡より旧く、SX59性格不明遺構より新しい。

SD58溝跡

調査区西端を南北方向に縦断する溝跡で、中央部が撹乱により削平されている。上幅80cmで、深さは25cm、方向はN-5°-Wである。断面形は逆台形で、堆積土はシルト質粘土層が２層確認された。遺構の重複関係としては、

SD55溝跡より旧く、SD60溝跡より新しい。

SX59性格不明遺構

調査区西半に分布する遺構で、溝跡やカクランにより削平されており、形状、規模は不明である。深さは20～30cmで、堆積土は2層である。第1層はにぶい黄褐色のシルト質砂層であり、しまりの強い土層であった。第2層はにぶい黄褐色の砂質シルト層であり、基本層のV層と類似していたが、マンガンが粒状に多量に集積しており、周囲のV層と区分された。第1層より内面黒色処理された土師器坏の口縁部片と底部片がそれぞれ1点ずつ出土した。遺構の重複関係としては、SD55、SD57、SD58溝跡より旧い。

小溝状遺構群61

調査区東半を東西に横断する溝跡群で、11条検出された。上幅20～40cmで、方向はW-1～7°-Nである。出土遺物については、小溝状遺構群61-7の上面より、縄文後期後葉～末葉のA-2深鉢（第20図2）が出土した。その他、土器小片1点が出土している。遺構の重複関係としては、SD56溝跡、SD57溝跡、SX59性格不明遺構より旧い。また、小溝状遺構群61より旧い、南北方向に縦走する小規模な溝跡が2条検出されている。

遺構外出土遺物としては、SD55溝跡の上部に落ち込んで堆積しているIa層より、大堀相馬産陶器の灰釉碗や朝顔形灰釉碗、在地産の可能性がある擂鉢の小片が出土した。その他、土器小片が1点出土している。また、層の細別は不明であるが、I層中より華南地方産のI-2褐釉壺や、岸窯系のI-1鉄釉擂鉢など、中近世の陶器片が数点出土している。IV層からは、非ロクロ土師器のC-12甕（同図1）、C-11甕をはじめ、多数の土師器片が出土している。V層上面では、土器小片が3点出土したのみである。また、攪乱中であるが、B-2弥生土器も出土した（同図3）。器厚が3mmと非常に薄い甕、または広口壺の口縁部片である。口縁部は肥厚し、やや緩やかな斜衝文が1条施されている。また、さらにその下に粘土紐を1条貼り付け、下方から指で押圧して波状文を形成している。これらの特徴より、弥生時代後期の天王山式期に比定される。その他、攪乱中からは在地産の可能性が考えられる陶器片2点、土器片1点が出土した。

4．まとめ

調査区西端において、宮衙の区画溝のほぼ想定ライン上よりSD60溝跡が検出された。SD60溝跡については、2b区のSD50溝跡と併せ第5章で後述するが、宮衙の区画溝と想定される。SD60溝跡を含め、今回検出された遺構の時期を比定できる遺物は出土しておらず、遺構の年代は不明である。またSD55溝跡については、上部にIa層が落ち込んでいること、堆積土が3層に区分されるものの、比較的類似した均質な土層であること、第2層から出土した大堀相馬産の灰釉碗が18世紀代であることから、近世以降の溝跡と考えられる。

1．遺構検出状況（南から）

2．SD60完掘状況（南から）

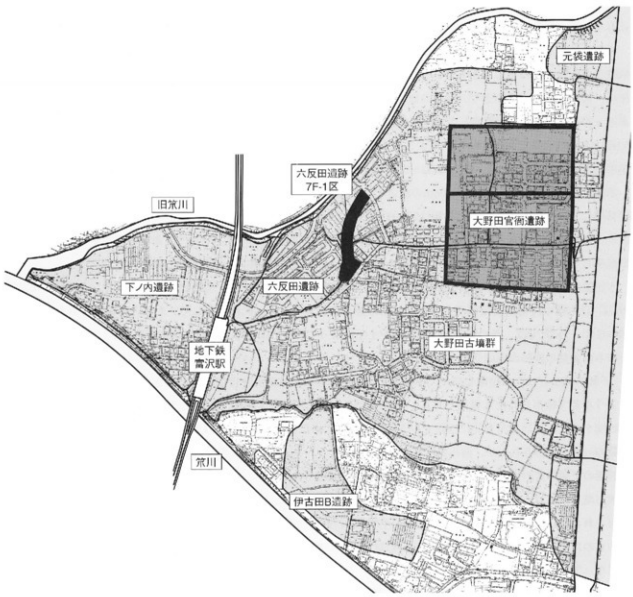
写真図版14　2c区調査状況

Ⅴ．六反田遺跡7F-1区の調査

1．調査概要

六反田遺跡は仙台市太白区の市営地下鉄南北線富沢駅の北東に広がる遺跡であり、笊川と旧笊川に挟まれた標高約12mの自然堤防上に立地する。遺跡範囲の東端が大野田官衙遺跡と重複している。今回調査した7F-1区は富沢駅と大野田官衙遺跡のほぼ中間点に位置する（第21図）。富沢駅周辺土地区画整理事業に伴い平成22年５月19日から調査が行われ、調査面積は2,550㎡である。7F-1区の南部において、調査区の東壁にかかる形で木棺墓が検出され、管玉とガラス小玉が数点出土した。遺構の重要性を鑑み、その全容を解明する必要性が高いと判断されたことから、調査区の一部を約27㎡拡張した。この拡張区については、国庫補助事業の大野田官衙遺跡調査の追加調査として扱っている。拡張区の調査は８月31日より開始し、10月１日に調査を終了した。

今回は国庫補助事業が関わるSK9木棺墓について報告を行うが、木棺墓を含め7F-1区から検出された遺構と遺物については、今後刊行される富沢駅周辺土地区画整理事業に伴う発掘調査報告書内にて本報告がなされる予定であり、今回は現段階における概報である。



第21図　富沢駅周辺の遺跡群と調査地点（六反田遺跡7F-1区）位置図

2．基本層序

調査地点には盛土が70～90cmあり、それより下に基本層であるⅡ～Ⅴ層が確認された。Ⅱ層はにぶい黄褐色の粘土質シルト層で、検出範囲は部分的である。Ⅲ層は暗褐色のシルト質粘土層であり、溝跡やピットの一部はこのⅢ層が検出面である。Ⅳ層は黒褐色の粘土質シルト層、Ⅴ層はにぶい黄褐色の粘土質シルト層で、大半の遺構の検出面である。

3．遺構と遺物

六反田遺跡7F-1区からは、北部を中心に平安時代の住居跡や掘立柱建物跡、土坑などが検出され、円面硯や漆紙が付着した土器片などが出土している。

調査区の南部からは五反田古墳の周溝の一部が検出され、円筒埴輪などが出土したほか、SK9木棺墓が発見された。

SK9木棺墓

7F-1区の調査区南東隅から約６m北の地点に、調査区の東壁にかかる形で検出された。SD16、SD22溝跡、ピットを重複しており、これらの中で最もⅢ層である。

掘り下げて調査を進めた結果、木棺が比較的良好な状態で残存していることが明らかとなった。また、木棺以外にも木質部が複数検出されたほか、袋状掘り込みも発見されている。

堆積土は、木棺墓全体で79層が確認された。第１～13層は木棺蓋部が腐食して陥没した所に動いた土と、その際形成された窪みに堆積したと考えられる層である。Ⅴ層をブロック状に多く含む暗褐色の粘土質シルト層である。第14～19層は木棺の埋め土で、大半の層でⅤ層をブロック状に含んでいるほか、炭化物を粒状に少量含んでいる。第21～25層は木棺蓋部が腐食した土層、第26～44層は木棺内堆積土、第46層は木棺身部が腐食した土層である。第50層は木棺の下部で検出された、厚さ３～５cmのにぶい黄褐色の粘土層である。しまりの強い土層であるため、棺床粘土の可能性が考えられる。第52～69層は木棺掘り方の埋土である。

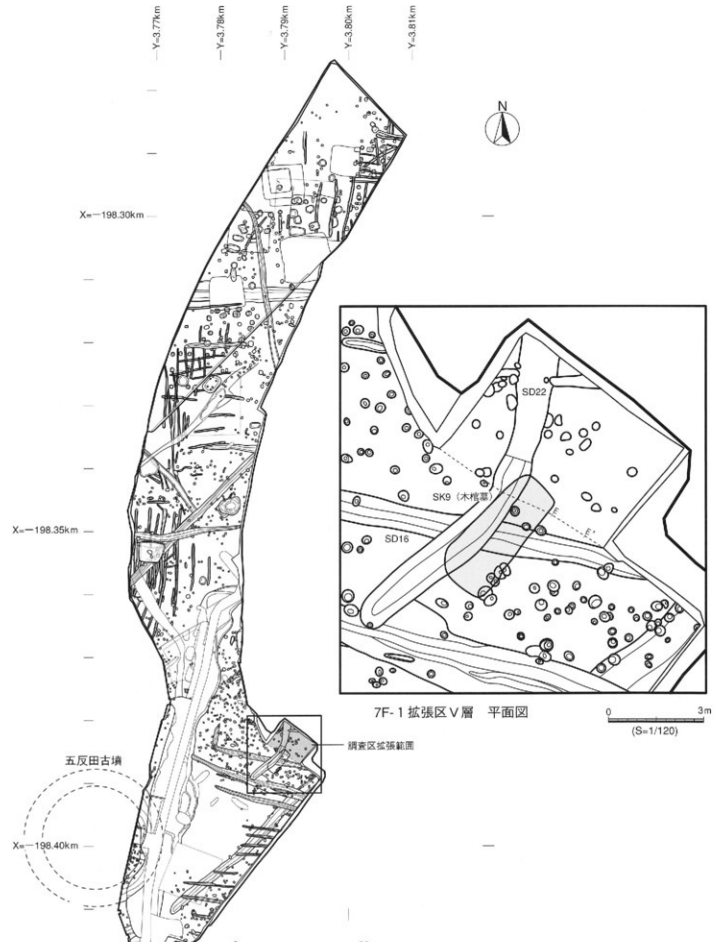
木棺身部は、検出面から87～113cmの深さで、木質部分が腐食した黒い粘土状になっていたため、その規模や形が判明した。棺の全長は3.0m、横幅は70～80cmで、深さは18～26cmである。掘方の北西側の壁寄りに設置されており、長軸方向は掘方より若干東寄りのN-43°-Eである。底面が浅い「U」字形で、長軸の両端が緩やかに上がる舟形をしていることから、丸太を半分に裁ち割った後に、中を刳り抜いた舟形木棺と考えられる。

木棺蓋部の痕跡は、木棺が検出された高さから木棺の堆積土内にかけて、部分的に確認された。そのうち第23図のC-C′は木棺中央部の断面図であるが、木棺の蓋の痕跡が「ハ」字状に残存していたことが確認された。また同図のB-B′、D-D′では、蓋の南西と北東両端が土圧によって押しつぶされたような状態で確認された。第24図１は、その木棺蓋部の痕跡が確認された範囲である。

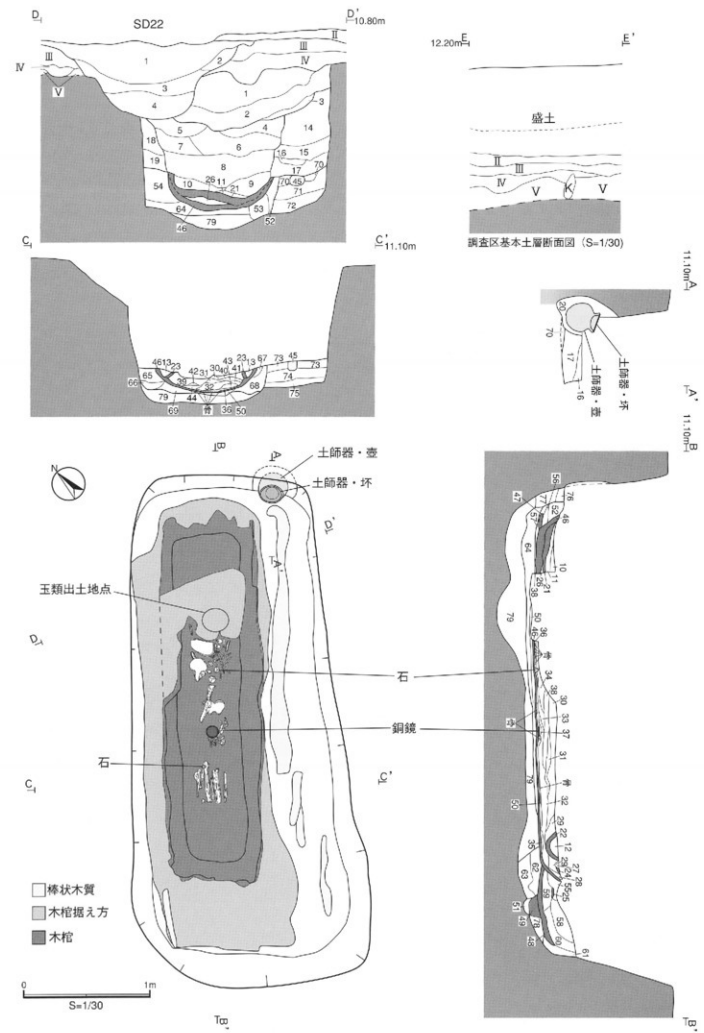
「下層木質」とは、木棺除去後に、木棺掘り方の南西側の木棺床面とほぼ同一の高さで、南西端が若干持ち上がるような形で検出された木質部である。全長は約50cm、横幅は最大約80cmで、やや歪な三角形を呈している。検出状況から、本来は木棺身部に接続するように置かれていたと考えられる。反対側の北東側の木棺下層でも同様の木質の一部が検出されたが、南西側ほどの規模ではなく、一部が突出する程度の大きさである。用途は不明である。南西側の下層木質のさらに下部からは、ピットが３基確認された。

掘方埋土からは、木棺身部が検出された高さで、黒く腐食した「棒状木質」が木棺東側で４ヶ所、西側で１ヶ所検出された。この棒状木質は隣接する大野田古墳群の過去の調査でも同様に検出例があるが（註１）、大野田古墳群のものは掘方の底面で検出されているのに対し、今回検出されたものは木棺の検出面の高さで検出されている点が異なっている。

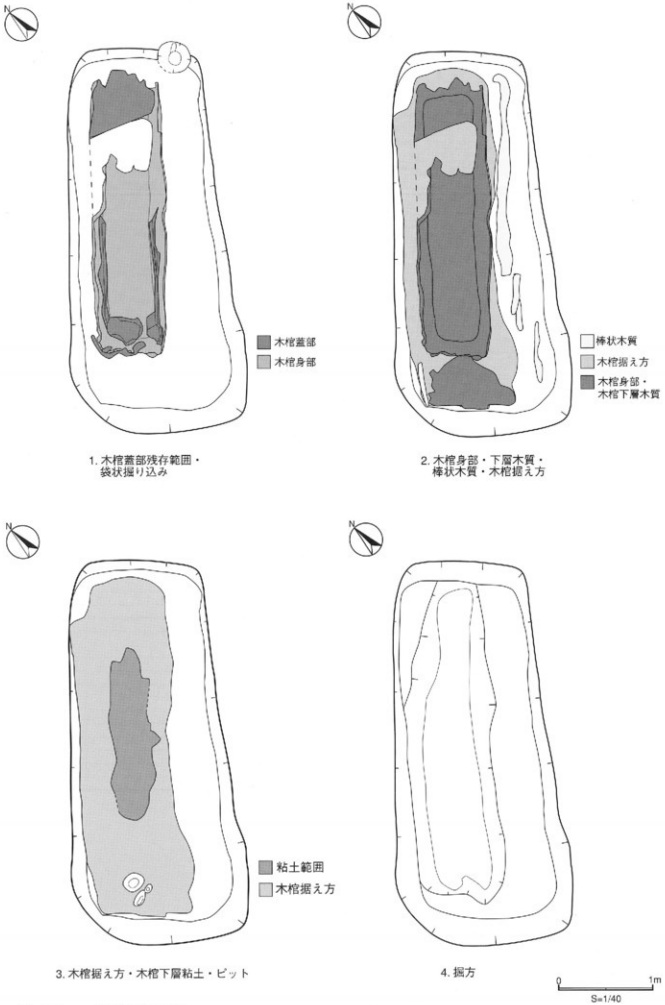
棺内からは１体分の人骨が出土し、頭骨、肋骨、腕骨、指骨、脚骨などが確認された。北東側から順に、頭骨、



第22図　六反田遺跡7F-1区Ⅴ層遺構配置図



第23図　7F-1区SK9木棺墓遺物出土状況・土層断面・調査区基本土層断面図



第24図　SK9木棺墓遺構平面図
（1．木棺蓋部残存範囲・袋状掘り込み、2．木棺身部・下層木質・棒状木質・木棺掘え方、3．木棺掘え方・木棺下層粘土・ピット、4．掘方）

	層位	色調	土質	備考
基本層	II	10YR4/3 にぶい黄褐色	粘土質シルト	酸化鉄粒極めて多量、灰黄褐色（10YR4/2）粘土質シルトブロック少量、III層ブロック少量
	III	10YR3/4 暗褐色	シルト質粘土	褐灰色（10YR4/1）粘土質シルトブロック斑状に含む、酸化鉄粒多量、マンガン粒多量、炭化粒微量
	IV	10YR2/2 黒褐色	粘土質シルト	暗褐色（10YR3/3）シルト質粘土ブロック斑状に含む、小礫中量、粗砂中量
	V	10YR5/3 にぶい黄褐色	粘土質シルト	灰黄褐色（10YR4/2）シルト質粘土ブロック中量、酸化鉄粒多量、マンガン粒多量
SD22	1	10YR3/3 暗褐色	粘土質シルト	炭化物粒中量、V層ブロック少量
	2	10YR4/4 褐色	粘土質シルト	マンガン粒少量、V層ブロック少量
	3	10YR4/4 褐色	粘土質シルト	V層ブロック主体、浅黄橙色（10YR8/3）粘土粒少量、明黄褐色（10YR7/6）粘土粒少量
	4	10YR3/4 暗褐色	粘土質シルト	V層ブロック・暗褐色（10YR3/3）粘土質シルトブロック斑状に含む、明黄褐色（5YR5/6）粘土質シルト粒少量

	層位	色調	土質	備考	
SK9	1	10YR3/4 暗褐色	粘土質シルト	V層ブロック主体、灰黄褐色（10YR5/2）粘土ブロック中量、炭化物粒少量	陥没坑堆積土
	2	10YR3/4 暗褐色	粘土質シルト	V層ブロック中量、灰黄褐色（10YR5/2）粘土ブロック中量、炭化物粒少量	陥没坑堆積土
	3	10YR4/4 褐色	粘土質シルト	V層ブロック主体、炭化物粒少量	陥没坑堆積土
	4	10YR3/4 暗褐色	粘土質シルト	V層ブロック多量、黒褐色（10YR3/2）粘土質シルトブロック中量、 灰黄褐色（10YR5/2）粘土ブロック中量、炭化物粒少量	陥没坑堆積土
	5	10YR4/4 褐色	粘土質シルト	V層ブロック主体、灰黄褐色（10YR5/2）粘土ブロック中量、 黒褐色（10YR3/1）粘土質シルトブロック少量、炭化物粒少量	陥没坑堆積土
	6	10YR4/4 褐色	粘土質シルト	V層ブロック主体、灰黄褐色（10YR5/2）粘土ブロック中量、 黒褐色（10YR3/2）粘土質シルトブロック少量、炭化物粒少量	陥没坑堆積土
	7	10YR3/4 暗褐色	粘土質シルト	V層ブロック主体、灰黄褐色（10YR5/2）粘土ブロック中量、炭化物粒少量	陥没坑堆積土
	8	10YR4/4 褐色	粘土質シルト	V層ブロック主体、灰黄褐色（10YR5/2）粘土ブロック少量、炭化物粒少量	陥没坑堆積土
	9	10YR3/3 暗褐色	粘土質シルト	V層ブロック主体、灰黄褐色（10YR5/2）粘土ブロック中量	陥没坑堆積土
	10	10YR4/4 褐色	粘土質シルト	V層ブロック主体、灰黄褐色（10YR5/2）粘土ブロック少量	陥没坑堆積土
	11	10YR4/6 褐色	粘土質シルト	均一層	陥没坑堆積土
	12	10YR4/6 褐色	粘土質シルト	灰黄褐色（10YR6/2）粘土粒中量、明褐色（7.5YR5/6）砂質粒少量	陥没坑堆積土
	13	10YR2/3 黒褐色	粘土質シルト	黒褐色粘土ブロック（10YR2/3）多量、明赤褐色（7.5YR5/8）砂質粒中量	陥没坑堆積土
	14	10YR3/4 暗褐色	粘土質シルト	V層ブロック中量、黒褐色（10YR3/2）粘土質シルトブロック中量、炭化物粒少量、 浅黄橙色（10YR8/4）粘土粒少量	木棺埋め土
	15	10YR3/4 暗褐色	粘土質シルト	黒褐色（10YR3/2）粘土質シルトブロック主体、V層ブロック中量、炭化物粒少量、 にぶい浅黄橙色（10YR6/3）粘土ブロック少量	木棺埋め土
	16	10YR3/3 暗褐色	粘土質シルト	黒褐色（10YR3/2）粘土質シルトブロック主体、V層ブロック少量	木棺埋め土
	17	10YR4/4 褐色	粘土質シルト	V層ブロック主体、灰黄褐色（10YR5/2）粘土ブロック少量、炭化物粒少量	木棺埋め土
	18	10YR3/4 暗褐色	粘土質シルト	V層ブロック主体、灰黄褐色（10YR5/2）粘土ブロック中量、炭化物粒少量、 黒褐色（10YR2/3）粘土質シルトブロック少量	木棺埋め土
	19	10YR3/4 暗褐色	粘土質シルト	V層ブロック主体、灰黄褐色（10YR5/2）粘土ブロック中量、 黒褐色（10YR2/3）粘土質シルトブロック少量	木棺埋め土
	20	10YR4/4 褐色	粘土質シルト	橙色（5YR7/8）粘土質シルト粒微量	袋状掘り込み
	21	10YR3/1 黒褐色	シルト質粘土	明黄褐色（10YR6/8）砂質シルト粒中量、灰黄褐色（10YR5/2）粘土ブロック中量	木棺蓋部
	22	10YR2/2 黒褐色	シルト質粘土	黄褐色（10YR5/8）砂質粒少量、明黄褐色（10YR7/6）粘土ブロック少量	木棺蓋部
	23	10YR3/1 黒褐色	シルト質粘土	明黄褐色（10YR6/8）砂質粒中量、灰黄褐色（10YR5/2）粘土ブロック中量	木棺蓋部
	24	10YR2/1 黒色	粘土	明赤褐色（5YR5/8）砂質粒少量	木棺蓋部
	25	10YR3/1 黒褐色	シルト質粘土	V層ブロック主体、炭化物粒少量	木棺蓋部
	26	10YR3/4 暗褐色	粘土質シルト	黒褐色（10YR3/1）粘土質シルトブロック少量、 明黄褐色（10YR6/8）砂質シルト粒少量	木棺内堆積土
	27	10YR3/4 暗褐色	粘土質シルト	黒褐色（10YR2/3）シルトブロック中量、橙色（7.5YR6/6）砂質粒少量	木棺内堆積土
	28	10YR4/3 にぶい黄褐色	粘土質シルト	黒褐色（10YR2/2）粘土質シルト粒少量	木棺内堆積土
	29	10YR3/4 暗褐色	粘土質シルト	黒褐色（10YR3/1）粘土質シルトブロック少量、 にぶい黄橙色（10YR7/2）粘土ブロック少量	木棺内堆積土
	30	10YR3/4 暗褐色	粘土質シルト	黒色（10YR2/1）粘土ブロック少量、灰白色（10YR8/2）粘土粒少量	木棺内堆積土
	31	10YR3/3 暗褐色	粘土質シルト	褐色（10YR4/4）粘土粒中量	木棺内堆積土
	32	10YR2/3 黒褐色	粘土質シルト	褐色（10YR4/4）砂質ブロック少量、炭化物粒少量	木棺内堆積土
	33	10YR2/3 黒褐色	粘土質シルト	炭化ブロック少量	木棺内堆積土
	34	10YR3/3 暗褐色	粘土質シルト	炭化ブロック少量、黄褐色（10YR5/8）砂質粒少量	木棺内堆積土
	35	10YR2/1 黒色	粘土質シルト	褐色（10YR4/6）粘土質シルトブロック少量	木棺内堆積土

表3　土層注記表1

	層位	色　調	土　質	備　考	
	36	10YR2/2 黒褐色	粘土質シルト	褐色（10YR4/4）シルト質粒少量	木棺内堆積土
	37	10YR2/3 黒褐色	シルト質粘土	均一層	木棺内堆積土
	38	10YR3/3 暗褐色	粘土質シルト	暗褐色（10YR2/3）粘土粒少量	木棺内堆積土
	39	10YR3/3 暗褐色	粘土質シルト	V層ブロック中量、黒褐色（10YR3/1）粘土ブロック少量	木棺内堆積土
	40	10YR3/4 暗褐色	粘土質シルト	黒褐色（10YR2/2）粘土ブロック中量、褐色（10YR4/6）砂質粒少量	木棺内堆積土
	41	10YR2/3 黒褐色	シルト質粘土	浅黄橙色（10YR8/4）粘土質シルトブロック少量	木棺内堆積土
	42	10YR3/4 暗褐色	粘土質シルト	黒褐色（10YR2/2）粘土ブロック中量、にぶい黄褐色（10YR5/4）砂質粒中量	木棺内堆積土
	43	10YR3/4 暗褐色	粘土質シルト	浅黄橙色（10YR8/6）砂質粒少量	木棺内堆積土
	44	10YR4/3 にぶい黄褐色	粘土質シルト	黒褐色（10YR3/1）粘土粒少量	木棺内堆積土
	45	10YR3/2 黒褐色	粘土質シルト	褐色（10YR4/6）砂質シルト粒少量	鉢状木質
	46	10YR2/1 黒色	腐土	黄褐色（10YR4/3）砂質粒少量	木棺東部
	47	10YR3/2 黒褐色	粘土質シルト	にぶい黄橙色（10YR7/4）砂質粒少量	木棺下層木質
	48	10YR2/1 黒色	粘土	明赤褐色（5YR5/8）砂質粒少量、 明黄褐色（10YR6/6）粘土質シルトブロック少量	木棺上層木質
	49	10YR3/3 暗褐色	粘土	にぶい黄褐色（10YR5/4）粘土質シルトブロック少量	木棺下層木質
	50	10YR4/3 にぶい黄褐色	粘土	暗褐色（10YR3/4）粘土質状に含む、炭化物粒中量	木棺下層粘土
	51	10YR3/4 暗褐色	粘土質シルト	V層ブロック少量、炭化粒少量	木棺下層ピット
	52	10YR4/4 褐色	粘土質シルト	にぶい黄橙色（10YR6/3）粘土ブロック少量、 暗褐色（10YR3/3）粘土質シルトブロック少量	木棺掘え方
	53	10YR3/4 暗褐色	粘土質シルト	にぶい黄橙色（10YR4/3）粘土粒中量、炭化物粒少量	木棺掘え方
	54	10YR3/2 黒褐色	粘土質シルト	褐色（10YR4/6）砂質粒少量	木棺掘え方
	55	10YR4/4 褐色	粘土質シルト	黒褐色（10YR3/1）粘土質シルトブロック中量、明黄褐色（10YR6/6）砂質粒少量	木棺掘え方
	56	10YR3/4 暗褐色	砂質シルト	炭化物粒少量	木棺掘え方
SK9	57	10YR4/3 にぶい黄褐色	粘土質シルト	にぶい黄橙色（10YR6/4）砂質粒斑状に含む、炭化物粒少量	木棺掘え方
	58	10YR3/4 暗褐色	粘土質シルト	V層ブロック斑状に含む、黒褐色（10YR2/3）粘土ブロック少量	木棺掘え方
	59	10YR4/3 にぶい黄褐色	粘土質シルト	黒褐色（10YR2/3）粘土ブロック中量、V層ブロック少量	木棺掘え方
	60	10YR4/4 褐色	粘土質シルト	V層ブロック主体、黒褐色（10YR2/3）粘土ブロック中量	木棺掘え方
	61	10YR4/4 褐色	粘土質シルト	V層ブロック主体、炭化物粒少量	木棺掘え方
	62	10YR4/3 にぶい黄褐色	粘土質シルト	V層ブロック少量、炭化物粒少量	木棺掘え方
	63	10YR3/4 暗褐色	粘土質シルト	V層ブロック中量、炭化物粒少量	木棺掘え方
	64	10YR3/4 暗褐色	粘土質シルト	黒褐色（10YR2/3）粘土質シルトブロック少量	木棺掘え方
	65	10YR3/4 暗褐色	粘土質シルト	黒褐色粘土ブロック（10Y R3/2）中量	木棺掘え方
	66	10YR4/4 褐色	砂質シルト	V層ブロック少量、黄橙色（10YR8/6）砂質粒少量	木棺掘え方
	67	10YR4/3 にぶい黄褐色	粘土質シルト	浅黄橙色（10YR8/6）砂質粒少量、炭化物粒少量	木棺掘え方
	68	10YR4/4 褐色	粘土質シルト	V層ブロック少量	木棺掘え方
	69	10YR4/4 褐色	粘土質シルト	炭化物粒中量、V層ブロック少量	木棺掘え方
	70	10YR3/4 暗褐色	粘土質シルト	黒褐色（10YR3/1）粘土質シルトブロック中量、炭化物粒少量	墓坑掘方
	71	10YR4/4 褐色	粘土質シルト	V層ブロック主体、にぶい黄褐色（10YR5/4）粘土ブロック中量、炭化物粒少量	墓坑掘方
	72	10YR3/4 暗褐色	粘土質シルト	にぶい黄褐色（10YR5/4）粘土ブロック少量、炭化物粒少量	墓坑掘方
	73	10YR3/4 暗褐色	粘土質シルト	V層ブロック主体、黒褐色（10YR2/3）粘土質シルトブロック中量	墓坑掘方
	74	10YR4/4 褐色	粘土質シルト	V層ブロック主体、暗褐色（10YR3/3）粘土質シルトブロック中量、炭化物粒少量	墓坑掘方
	75	10YR4/4 褐色	粘土質シルト	V層ブロック主体、炭化物粒少量	墓坑掘方
	76	10YR3/4 暗褐色	粘土質シルト	にぶい黄橙色（10YR7/3）粘土ブロック少量、黒褐色（10YR2/3）シルトブロック少量	墓坑掘方
	77	10YR4/3 にぶい黄褐色	粘土質シルト	V層ブロック主体、炭化物粒少量	墓坑掘方
	78	10YR4/4 褐色	砂質シルト	炭化物粒少量	墓坑掘方
	79	10YR3/4 暗褐色	粘土質シルト	V層ブロック主体、にぶい黄褐色（10YR5/4）粘土ブロック中量、炭化物粒少量	墓坑掘方

表4　土層注記表2

肋骨が検出され、中央部では銅鏡の周囲から腕骨、指骨が検出された。さらに、南西側から脚骨が検出されている。脚骨は両足分６本が確認されたが、平行に並んだ状態で出土している。

棺内の副葬品は、碧玉製管玉10点と青色のガラス小玉８点（註２）が、頭骨の北東側からまとまって出土している。管玉は長さが約２～2.7cm、直径が約５～９mmで、片面穿孔によって直径0.5～２mmの孔が開けられている。ガラス小玉は長さが約３～４mmで直径が約４～６mmの大きさである。

その他にも棺内からは、中央部やや南西寄りの地点から銅鏡１面が出土した。銅鏡は直径が９cmで、鏡面を上向きにした状態で出土した。銅鏡の鏡背面の中央には、高さ約６mm、最大径約１cmの鈕孔が設けられている。鏡背面の一部に繊維状の付着物が確認されたが、詳細については不明である。銅鏡の種類についても、文様が鮮明でないため現時点では不明である。また、脚骨と肋骨が検出された場所で、それぞれ大きさ約３cmの石が１点ずつ、骨の上から出土した。

木棺墓の掘方北東壁には、直径約30cm、深さが約15cmの不整円形をした袋状掘り込みが確認され、土師器の壺の口縁部に、坏が重ねられた状態（入子）で出土した。壺は口径約16cmで、高さが約27.5cmである。坏は直径が14.3cmで高さは4.5cm、丸底で体部と口縁部の境に強い稜が形成されて、内面が黒色処理されている。この袋状掘り込みは、木棺を据えて、ある程度の高さまで土を埋め戻した後、第17層より上位の面から掘り込まれ、遺物が埋納されている。

４．まとめ

今回の調査では、木棺墓が比較的良好な残存状況で発見された。人骨も検出され、玉類や土器、銅鏡などの副葬品がまとまって発見されており、貴重な発見といえる。

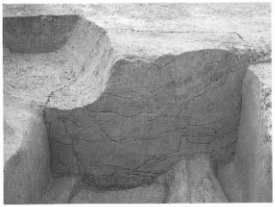
今回発見された木棺墓の年代は、出土したが住社式土器であることから、６世紀中葉～末葉（仙台市教育委員会2010b）と考えられる。仙台市内で古墳時代の木棺墓が検出されたのは６例目で、この６例は全て大野田古墳群の周辺地域で発見されている（註３）。また、古墳時代の銅鏡が出土した事例は仙台市内では４例目で、木棺墓から出土した事例としては初めてである。

註１　大野田１号木棺墓（仙台市教育委員会2000a）

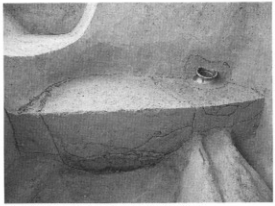
註２　今回出土した人骨は木棺床面と共に取り上げられており、今後の整理作業によって、人骨と癒着した木棺身部を剥がせば、玉類等の遺物がさらに出土する可能性がある。

註３　大野田古墳群の周囲では過去の調査で５例の木棺墓が検出されているが、そのうち２例が既に報告されている（仙台市教育委員会1981、2000a）。残りの３例についても、今後刊行が予定されている宮沢駅周辺土地区画整理事業の発掘調査報告書内にて報告される予定である。

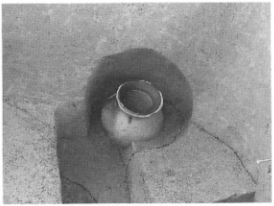
1．SK9木棺墓検出状況（南西から）



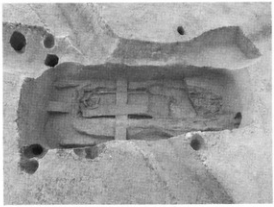
2．SK9木棺墓土層断面（南西から）



3．袋状掘り込み検出状況（南西から）

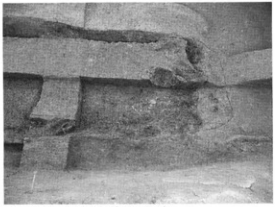


4．袋状掘り込み遺物出土状況（南西から）

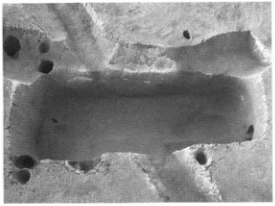


5．木棺蓋部検出状況（南東から）

6．木棺内土層断面（南西から）

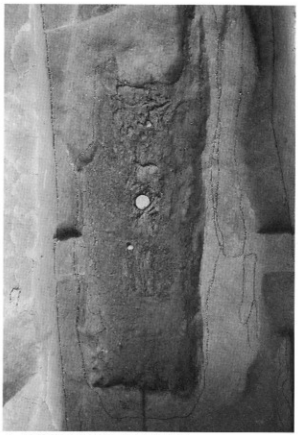


7．木棺内土層断面（北西から）



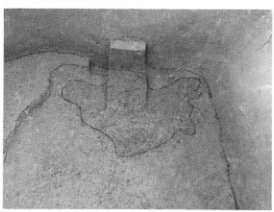
8．木棺墓完掘状況（南東から）

写真図版15　SK9木棺墓調査状況



1．木棺墓遺物出土状況（直上から）

2．銅鏡出土状況（南西から）



3．木棺下層木質検出状況（北東から）

4．木棺墓内出土遺物（土師器坏・壺・銅鏡・管玉・ガラス小玉）

写真図版16　SK9木棺墓調査状況と出土遺物

第４章　法領塚古墳　第２次調査

Ⅰ．調査概要

１．調査経過

法領塚古墳は仙台市若林区一本杉町１－２他に所在する、横穴式石室をもつ円墳である。今回の調査は、平成22年７月26日付で、学校法人聖ウルスラ学院より学校校舎新築工事に伴う「埋蔵文化財の取り扱いについて（協議）」が提出され、それにより平成22年８月17日から８月27日に試掘調査が行われた。その結果、従来考えられていた古墳の墳丘の範囲が広がる可能性が考えられた。その後、保存に係る協議を経た上で、校舎建築範囲における本発掘調査を平成22年10月12日から11月12日にかけて実施した。以上の一連の調査は開発に伴う調査であるが、試掘調査において、石室の前方である南側で溝状の落ち込みが検出された。この地点は校舎建築範囲に隣接しており、工事による削平は免れるものの校舎建築後の調査が困難となる地点であった。遺構は石室の前方で検出されたことから、その性格を把握することが非常に重要であると判断されたため、建築範囲に隣接する墳丘南部について国庫補助事業として確認調査を行うこととなった。調査は平成22年10月14日から11月20日にかけて実施している。また、建築工事に伴う調査の成果と併せ、11月11日に報道発表を行い、同時に聖ウルスラ学院英智の生徒に現場を公開している。さらに石室について、昭和45年の調査時に比べ、歪みが生じるなどの変化が認められた。そのため、今回改めて石室の現況図を作成することとなり、石室内のレーザー測量を平成23年２月18日に行った。

なお、今回の発掘調査の成果により、法領塚古墳の墳丘が従来想定されていた範囲より広がることが判明したため、平成23年１月に遺跡範囲を拡大訂正して宮城県教育委員会に通知している。

今回の報告は国庫補助事業の調査についての報告であるが、検出された遺構は、南側に隣接する建築工事範囲内の調査において検出されたものと一体を成す遺構であるため、併せて報告する。また遺物についても、試掘調査時に出土したものを含めて報告することとする。

２．遺跡概要

法領塚古墳はJR仙台駅の南東約2.5km、学校法人聖ウルスラ学院英智中学校、高等学校の敷地内北東隅に位置している。本古墳周辺の土地は伊達家家臣佐々家の屋敷地であったが、明治初年に伊達屋敷に転じ、その後、昭和29年より聖ウルスラ学院の所有となり、墳丘部が現在まで保存されるに至っている。

古墳の石室について、東壁の一部の自然崩壊や天井石落盤の危険性があったため、その修復、補強の必要性から、昭和45年に石室の実態把握を目的とした調査が行われている（註１）。この第１次調査により、法領塚古墳は墳丘径約32m、高さ約６mの円墳であることや、石室内の詳細な構造が明らかにされた。古墳の築造年代については、石室の構造や出土遺物から、７世紀初頭前後から７世紀中葉前後と推定されている。

なお、調査終了後の昭和46年に石室補強工事が行われ、側壁の裏側にコンクリートが注入された。また、今回の調査時に石室内の現況を第1次調査時の図面、写真等の記録を比較した結果、天井石や西側壁などには石を充填するなどの補強も行われたと考えられる。

(1) 地理的環境

遺跡周辺の地形について、西方では奥羽山脈の東麓から派生する青葉山丘陵が延びており、その丘陵を貫流する形で名取川、広瀬川が東流している。これらの河川の浸食作用により丘陵部では４～５段の段丘面が形成され、丘陵の東方では沖積作用により宮城野海岸平野が形成される。平野部では河川の周囲に自然堤防、後背湿地が発達しており、広瀬川と名取川の合流点付近について、広瀬川以北は特に霞目低地と呼ばれている。本遺跡はこの霞目低地に位置し、広瀬川左岸の標高約12mの自然堤防上に立地している。

(2) 歴史的環境

縄文時代では、本遺跡周辺において遺構は検出されていないが、本遺跡の南東側に広がる南小泉遺跡の中央部で晩期後半の包含層が確認されている。また、南小泉遺跡に隣接する養種園遺跡や、さらに西に位置する保春院前遺跡でも中期から晩期の土器が出土している。

弥生時代では、中期において、南小泉遺跡東部の霞目飛行場地内で袋形囲式期の合口土器棺が出土したほか、土器、石器が多量に出土している。養種園遺跡でも同時期と考えられる土器棺墓が検出されている。また、本遺跡の南約2.5kmの広瀬川対岸に位置する郡山遺跡では、中期中葉以前とされる水田跡が検出されたほか、郡山遺跡に西接する西台畑遺跡や長町駅東遺跡からは、中期中葉の住居跡、土器棺墓、土坑墓が検出されている。

古墳時代では本遺跡を含め、平野部に多くの古墳が築造される。前期の古墳としては、本遺跡の南東約1.2kmに遠見塚古墳が築造されており、東北有数の規模である。しかしこの時期には、周辺の遺跡では大規模な集落跡は確認されておらず、南小泉遺跡で塩釜式期の住居跡が1軒検出されたのみである。その後、中期前半から南小泉遺跡では集落が本格的に形成され、多数の竪穴住居跡が検出されている。これらの住居跡では、地床炉をもつものとカマドを持つものがあり、古墳時代中期が地床炉からカマドへの移行期にあたることを示している。また、石製模造品が多数出土したほか、その製作工房と考えられる住居跡も検出されている。さらに、遺跡中心部に近い第16次調査地点からは鉄滓が出土しているが、鉱物組成の分析の結果、原料は中国大陸からの移入品である可能性が指摘されている（註1）。また、遠見塚小学校の南に位置する第17次調査地点では、仿製鏡が出土している。古墳時代の集落内における鏡の出土は市内ではこの1例のみであり、非常に珍しい事例である。南小泉遺跡では、後期にも継続的に集落が営まれ続けている。竪穴住居跡の検出数から、中期に比べ集落の規模は縮小する傾向が窺えるほか、出土遺物についても石製模造品が消滅し、小型手捏ね土器や土玉が出土する傾向が指摘されている。その他、養種園遺跡でも住居跡が検出されているが、うち1軒が焼失住居であり、出土した土器の器種組成や偶体数から、当時の生活様式を知る上で重要である。一方、中期以降の古墳に関しては、中期前半では古墳は築造されず、5世紀後半から6世紀にかけて多数の古墳が築造される。本遺跡の南西約4kmに位置する大野田地区では、大野田古墳群、六反田遺跡の範囲に前方後円墳1基を含む44基の古墳が発見されている。同時期には、西方の丘陵縁部でも古墳が築造されており、裏町古墳、兜塚古墳、砂押古墳など主要な前方後円墳、円墳が存在する。さらに三神峯古墳群や原遺跡で小規模な円墳が築造されている。本遺跡周辺では、南方約800mに位置する若林城跡の敷地内で若林城内古墳が発見され、その規模や出土した円筒埴輪から、上記の古墳と同時期と考えられる。その他詳細は不明であるが、本遺跡の南約250mには蛇塚古墳が、約350mの地点には猫塚古墳がそれぞれ立地している。6世紀半ば以降になると、時期が明らかな古墳の数は減少する。また、大野田古墳群では木棺墓が数基検出されている。これらの木棺墓は残存状況が悪く、遺物が少ないものも認められるが、時期が明らかなものは6世紀代である。一方、丘陵部では7世紀初頭から横穴墓が形成され始める。また、名取川右岸の自然堤防上に立地する安久東古墳群において、横穴式石室をもつ古墳も築造され始める。この古墳群は南方1kmに位置する清水遺跡と併せ、出土遺物や石室の構造から、埼玉県北西部や群馬県南部など利根川流域との関連性が指摘されている。7世紀中葉になると、郡山遺跡で官衙が造営される。Ⅰ期、Ⅱ期に大別され、Ⅰ期は7世紀半ばから7世紀末、Ⅱ期は7世紀末から8世紀初頭である。また、隣接する西台畑遺跡、長町駅東遺跡からは、関東地方と同様のカマド構造をもつ竪穴住居跡が多数検出され、関東系土師器も多数出土し、官衙造営に携わった人々の集落跡と考えられている。さらにⅡ期官衙期には、大野田地区で官衙関連の遺構が検出されており、大野田官衙遺跡として調査が行われている。この遺跡はその性格や時期など解明すべき点がまだ多いが、郡山遺跡との関連が考えられる官衙跡である。

奈良時代では、本遺跡の北約700mに陸奥国分寺、その東約500mの地点に陸奥国分尼寺が創建される。国分寺はその創建瓦が多賀城第Ⅱ期のものと同時期であり、その頃には伽藍の主要部が完成したと考えられている。南小泉

番号	遺跡名	種別	立地	時代
1	法領塚古墳	円墳	自然堤防	古墳
2	表種園遺跡	集落跡、屋敷跡、包含地	自然堤防	縄文、弥生、古墳、平安、中世、近世
3	蛇塚古墳	円墳	自然堤防	古墳
4	猫塚古墳	円墳	自然堤防	古墳
5	保春院前遺跡	集落跡	自然堤防	古代、中世、近世
6	南小泉遺跡	集落跡、屋敷跡	自然堤防	縄文、弥生、古墳、奈良、平安、中世、近世
7	遠見塚古墳	前方後円墳	自然堤防	古墳
8	若林城跡	円墳、集落跡、城館跡	自然堤防	古墳、平安、中世、近世
9	陸奥国分寺跡	寺院跡	砂礫地	奈良、平安
10	陸奥国分尼寺跡	寺院跡	砂礫地	奈良、平安
11	仙台東郊条里跡	条里跡	後背湿地	奈良、平安
12	志波遺跡	散布地	自然堤防	奈良、平安
13	谷地館跡	城館跡	後背湿地	中世
14	正雲寺遺跡	散布地	段丘	平安
15	国分寺東遺跡	集落跡	砂礫地	古代、中世、近世
16	薬師堂東遺跡	集落跡	砂礫地	奈良、平安、中世、近世

第25図　法領塚古墳の位置と周辺の遺跡（S=1/25000・註3）

遺跡、養種園遺跡、保春院前遺跡では当該期の集落跡が確認されている。

平安時代では、南小泉遺跡西部から保春院前遺跡、若林城跡北東部にかけて、住居跡が散在的に分布している。また南小泉遺跡南西部の第６次調査地点では、９世紀代の住居跡としては異例の大きさをもつ竪穴住居跡が検出され、墨書土器を含め多数の遺物が出土している。周辺の状況も含め、一般集落とは性格を異にする可能性が指摘されている。

中世では南小泉遺跡において、12世紀後半頃の初現的な屋敷跡が検出され、13世紀には堀を方形に巡らせた屋敷跡も検出されている。その後、14世紀後半代には巨大な堀と土塁をもつ大規模な館に発展した様子が明らかにされている。またこの時期には、養種園遺跡の第２次調査地点において土坑墓が多数検出され、庶民の墓と推定されている。15世紀中頃以降は、南小泉遺跡内では城館は検出されておらず、遺物包含層も認められない。一方、養種園遺跡では15世紀末から17世紀初頭にかけて、大溝で区画された中に掘立柱建物跡や井戸跡などが検出され、当時のこの地域の領主である国分氏の家臣クラスの居住地と推定されている。また、この居住地内からは鍛冶関連の遺構や遺物が多数見つかっており、金属加工を行った工人集団の存在も指摘されている。さらに、若林城跡における近年の調査成果により、若林城造営前にも堀が巡らされていたことが一部で明らかになり、今後城館の存在を考える上で重要な事例である。また陸奥国分寺跡については、最近の調査成果により国分寺東遺跡や薬師堂東遺跡で中世の遺構、遺物が検出されており、この時期の国分寺のあり方を考える上で重要である。

近世では、1628年（寛永５年）に伊達政宗の居城として若林城が完成し、城下町も形成される。1636年（寛永13年）に政宗が死去した後、若林城は廃城となり、建築物は仙台城二ノ丸に移築された。若林城跡で検出された建物跡の構造と二の丸の絵図に描かれた建物跡の構造が一致するなど、発掘調査成果からも移築の事実が証明されている。若林城廃城後、養種園遺跡地内には「御仮屋」、「小泉屋敷」が造営され、堀跡や池跡などが検出されている。また、保春院前遺跡では鍛冶関連の遺物が相当量出土しており、工人集団の存在が想定されている。一方、陸奥国分寺跡については政宗により再興され、1607年（慶長12年）に薬師堂が造営されており、現在に至っている。

３．調査方法

国庫補助事業による調査区は、石室前方部を中心とした校舎建築工事範囲に隣接する部分について、当初は南北約15m×東西約21mの範囲に不整形の調査区を設定した（第26図）。重機により盛土、攪乱の堆積土を除去し、精査を行った。出土した遺物については遺直、写真、図面による記録を行いながら取り上げている。その後、南北方向の溝状の落ち込みが石室へ延びることが確認されたため、石室の中軸線を通る南北方向に９mのベルトを設定し、西半を掘り下げて調査を進めた。玄室内について調査前の段階では、北半で凝灰岩切石が数ま並べられた状態で露出しており、南半はこの凝灰岩の検出面まで砂層が堆積している状態であった。今回の調査では、この玄室南半の砂層から石室前方の遺構まで通して掘り下げ、底面の様子や土層断面の観察を行っている。遺構については、当初設定した調査区内では掘方埋土を除く堆積土を全て掘り上げている。また石室の中軸線を基準とした南北方向のトレンチでは、遺構の堆積土を掘り上げたほか、底面付近では礫が密集して検出された（第31図）。これらの礫は平面図を作成し、調査終了後には土嚢で保護した上で埋め戻しを行っている。なお、玄室南半や羨道部の底面で検出された礫については、現況が第１次調査の図面と一致することを確認している。また、閉塞を構成する礫についても、図面の照合を行っている。その他、今回の図面作成については、基本的に１m×１mの任意のグリッドを設定して平面図を作成している。また、工事範囲も含めた古墳全体の図面に関しては、測量業者による光波測距機を用いた測量図とグリッド設定による平面図、第１次調査の墳丘実測図を合成して作成している。また一連の発掘調査終了後、石室の現況を図化する必要があると判断し、測量業者に委託して石室のレーザー測量を行った。

なお、以下の文中の「調査区」とは国庫補助事業による調査区だけでなく、南に隣接する建築工事範囲内の調査

区も含めた表記とする。

また遺物の整理作業について、遺物の接合の際には第１次調査時に出土したものも含めて検討を行っている。第１次調査出土遺物は、遺物カードを伴って袋にまとめられた状態であった。今回の接合作業で袋ごとのまとまりに変更が生じるもの、今回図化するために遺物登録番号を新たに付けたものについては、遺物カードを新たに付加し、ネーミングを追加して整理を行った。

Ⅱ．基本層序

調査地点には盛土が0.3～1.3mあり、下部にⅠ～Ⅳ層が堆積している。Ⅰ層はにぶい黄褐色の砂質シルト層で、旧耕作土の可能性が考えられる。Ⅱ層は黄褐色の砂質シルト層であるが、褐色の粘土を多く含んでおり、砂質シルトと互層状に堆積している箇所も認められる。層厚は残存状況の良好な北部で約80cmである。古墳はこのⅡ層上面で築造されている。Ⅲ層は黒褐色の粘土質シルト層であり、層厚は調査区南部では10cm弱であるが、北部では約30cmと厚くなる。しまりが強い土層であり、１cm以下の小礫を含んでいる。Ⅳ層は暗褐色の砂質シルト層であるが、地点により黒褐色や褐色を呈する。大小の礫を非常に多く含んでいる。

Ⅲ．発見遺構

今回の調査では、古墳に関わるものとして石室の前庭部と墳丘の一部が検出された。なお、墳丘については建築工事に伴う調査において比較的良好に確認されている。そのため、墳丘部の調査については仙台市文化財調査報告書第393集で報告する。その他、溝跡２条、ピットが検出されている。また出土遺物については、「Ⅳ．出土遺物」の項で詳細を述べる。

(1) 古墳

墳丘積土

石室の南東部、南西部においてA～Cの３層が確認された。A層は暗褐色の砂質シルトと黄褐色の粘土質シルトの混合層である。B層は黄褐色の砂質シルト層で、比較的均質な層である。C層は褐色の粘土質シルト層であるが、基本層のⅡ層をブロック状に多く含んでいる。

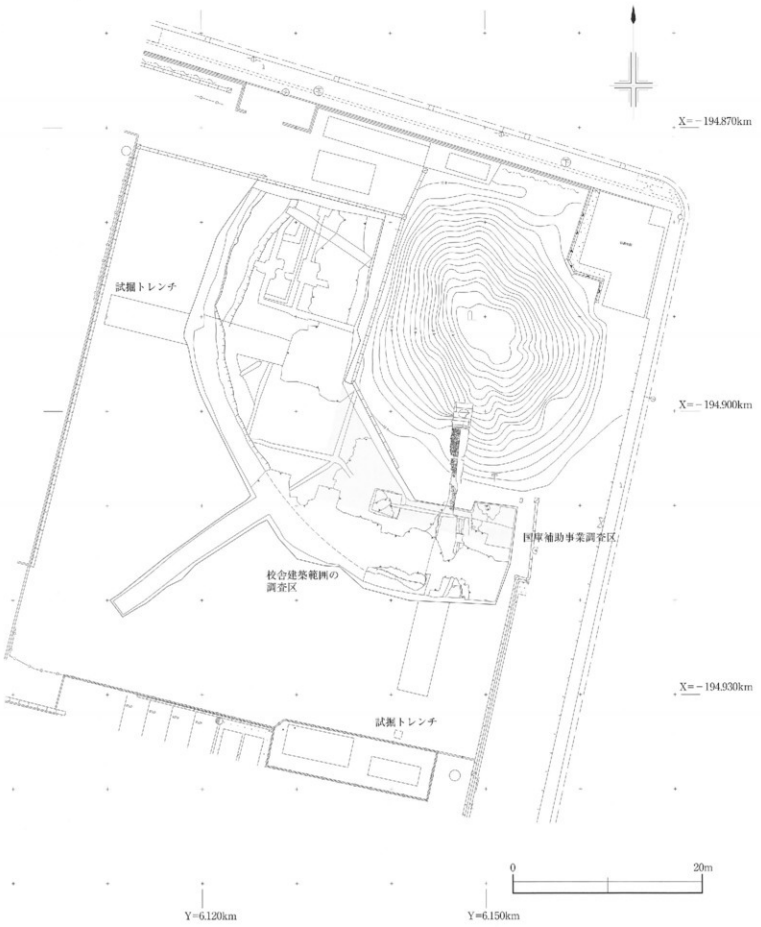
以上の３層が確認され、その下部には基本層のⅡ層が厚く堆積している。このような状況から、墳丘構築時には当時の旧表土を一度削平して整地した後、積土を施して墳丘の築造を行ったと考えられる。

前庭部

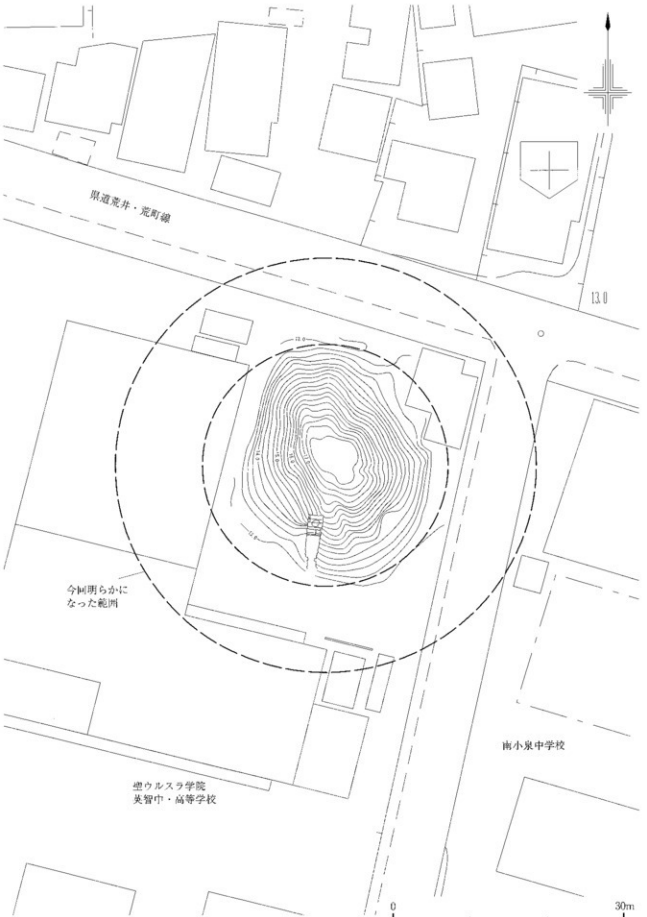
石室前方において、南北方向に延びる溝状の落込みとして検出された。撹乱による削平が大きく、中央部では完全に失われているが、調査区南端で前庭部の西肩と墳丘裾の屈曲部（第29図a）が検出されており、築造との境界（同図b）から墳丘裾との部（a－b）までの長さが約12.2mである。下幅は北部で2.8～３mで、深さは約90cmである。前庭部の横断面形については、西側が撹乱で大きく削平されており不明な部分がある。但し、前庭部中央やや北寄り（第29図B－B'）では、逆台形に掘り込んだ後、前庭部底面に埋土を積み上げ整形している。また南北方向では、埋土上面が北から南へ緩やかに傾斜している。

堆積土については、底面に入れられた埋土（14、15、16層）の上方に大別して13層が確認されている。第４層は灰白色火山灰を含んでおり、土色や火山灰の混入状況により4a、4b層に細分される。また、前庭部北部では第６層の下面で20～40cm大の礫が密集して検出されている。

なお、前庭部は撹乱により中央部が完全に削平されたため、北部と南部の堆積土の新旧関係や連続性は不明であった。そのため、南部の堆積土はa～d層として記録をとっている。また、d層は、墳丘西側の工事範囲内の調査で検出された周溝内堆積土の第１、２層とそれぞれ対応している。



第26図　法領塚古墳第２次調査　調査区配置図（S=1/300）



第27図　法領塚古墳墳丘範囲復元図（S=1/500）

SD１溝跡

前庭部東半でSD1溝跡が検出されている。前庭部北半で検出されており、検出長は約4mである。方向はN-5～6°-Eであり、上幅70～90cm、下幅25～30cm、深さ10～15cmで、断面形は浅いU字形を呈している。前庭部南畔では撹乱により完全に削平されている。堆積土としては、前庭部内の堆積土の第10、11層が確認されている。第11層はSD1溝跡内だけでなく、前庭部東部に堆積している土層であり、前庭部全体が埋没する過程でSD1溝跡も埋没したことが窺える。

羨道

第１次調査で「前庭部」とされていた部分である。西半分を掘り下げて調査したところ、底面で検出された礫が第１次調査の図面と一致することを確認した。全長約1.7m、幅約1.3mである。前庭部とは20cmほどの比高差があり、羨道部の方が高い。南端で急激に落ち込んで段を形成している（第30図A－A′）。側壁を第１次調査の図面と比較したところ、南側上部において、図面には記録の無い礫、図面には記録されているが現況では認められない礫が確認された。図面に記録の無い礫は、第１次調査後の補強土事によるものであり、一部ではコンクリートも確認されている（第28図、註４）。

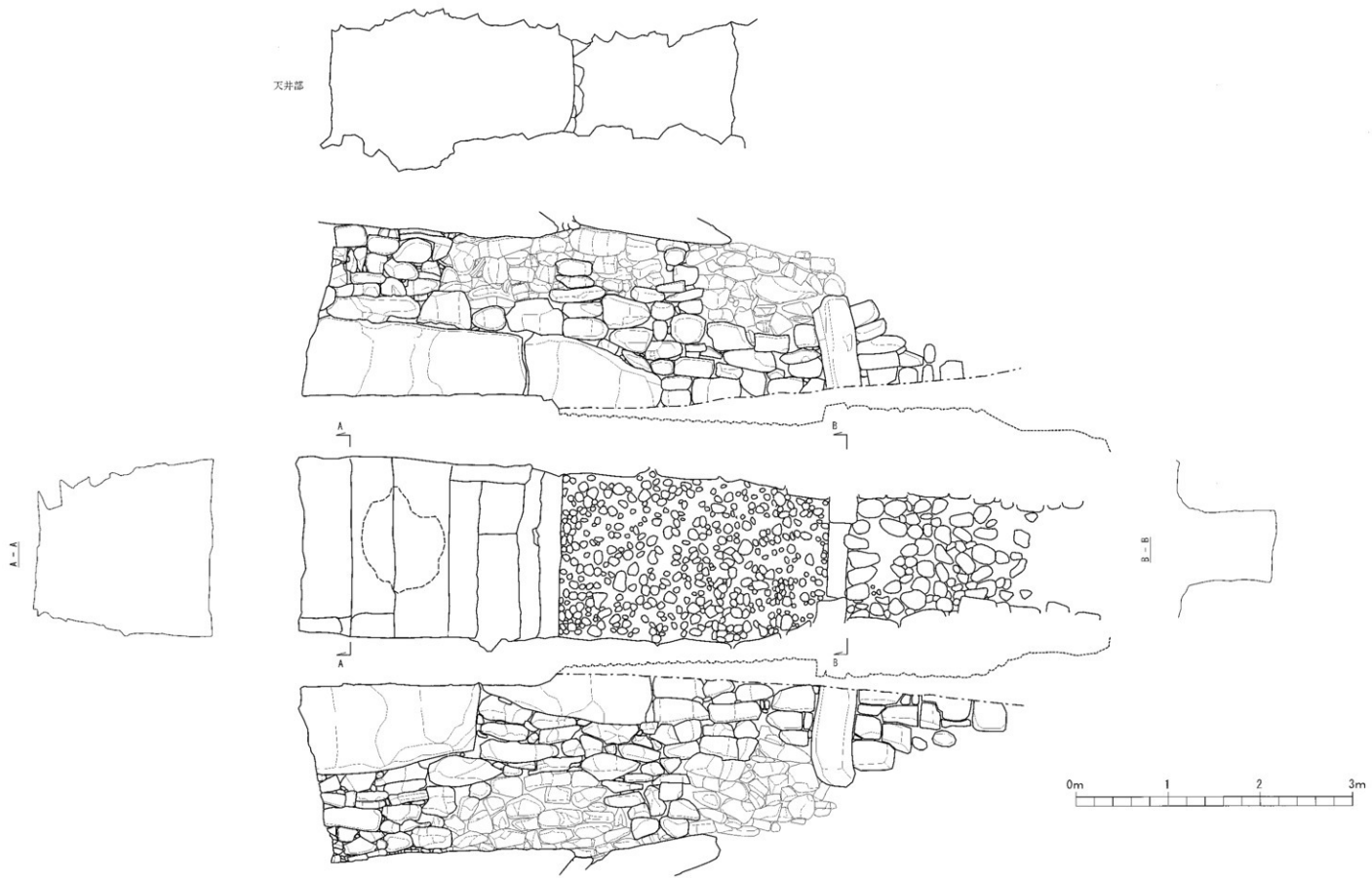
玄室

第１次調査において、奥壁側の北半には凝灰岩の切石が敷かれ、手前側の南半には拳大の円礫が敷かれていたことが明らかにされている。今回の調査では、玄室南半に堆積した砂層について西半を掘り下げて調査し、円礫を検出している。凝灰岩切石の上面と円礫の検出面の比高差は約20cm弱であり、南半には凝灰岩切石上面と同じ高さまで砂層が堆積していた。この砂層は第１次調査終了後に流入したものである。底面の円礫敷きの範囲には凝灰岩が多数認められ、第１次調査の報告と一致している。玄室内の構成は、奥壁から凝灰岩切石部の南端までが2.8m、その南３mにわたって円礫敷きの範囲が続いている。そのため、玄室内全体の規模は全長約5.7m、幅約1.9m、高さは奥壁沿いで約1.9mとなる。玄門部の幅については玄門西石の厚さが約34cmであり、その南に羨道、前庭部が続くという構成である。第１次調査の図面と比較した結果、図面に記録の無い部分が西壁で認められた。この部分は盗掘坑であり、第１次調査終了後、補強工事によって礫が充填された部分である。

(2) その他の遺構

SD2溝跡

調査区南端において、前庭部南部の堆積土c層上面で検出された、北東から南西方向へ斜走する溝跡である。北部は撹乱で削平されており、検出長は約2.3mである。方向はN-22°-Eであり、規模は上幅約80cm、下幅約20cm、深さ約40cmで、断面形はU字形を呈している。堆積土は５層で、いずれも黒褐色土層であり、シルト質粘土層と粘土層が交互に堆積している。遺構検出面であるc層は周溝内堆積土と対応する土層であり、SD2溝跡は墳丘造営時よりも新しい時期の遺構と考えられる。



第28図　法領塚石室展開図（S=1/40）

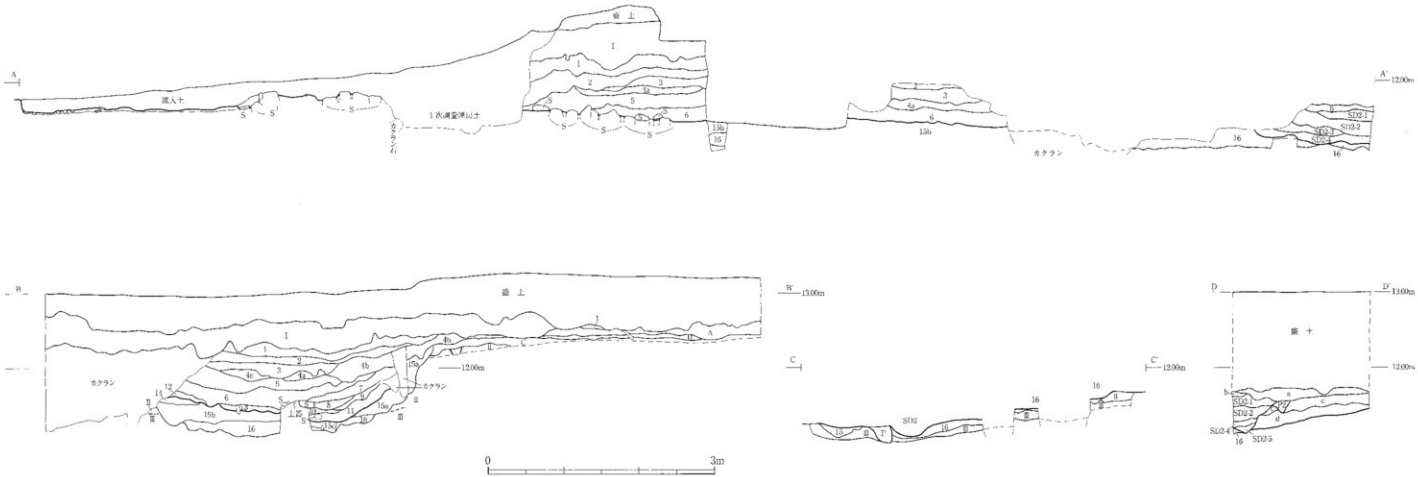
第29図　調査区平面図（S=1/80）

Ⅳ．出土遺物

今回の調査では、石室前庭部を中心として、須恵器を主体とした遺物が多量に出土している。第１次調査出土遺物についても今回併せて報告する。

（1）前庭部出土遺物

北部の堆積土の出土遺物としては、第１層から須恵器のE-25平瓶が出土している（第33図１）。体部片であり、自然釉がかかっている。第２層からは内面黒色処理された土師器片１点、須恵器甕の体部片２点が出土している。第３層からは須恵器のE-35甕（同図２）、E-34甕（同図３）が出土している。両者とも口縁部の破片である。口縁端部は、外側に折り曲げて成形されており、口縁部には波状文が施されている。その他、須恵器の甕片やロクロ土師器片を含め土器片が数点ずつと鉄製品の可能性のある小片が１点出土している。第４層からはロクロ土師器のD-1坏（同図４）が出土している。D-1坏は底部が平底で、体部がやや直線的に外傾する。底部には糸切の痕跡が見られる。体部下方は手持ちヘラケズリにより調整が施され、内面にはミガキが施されている。第５層からは須恵器のE-24長頸瓶（同図７）、E-27フラスコ形長頸瓶（同図８）、鉄製品のNa-1馬具（写真図版24-5）、Na-2不明鉄製品（同写真図版６）が出土している。E-27フラスコ形長頸瓶は体部片である。外面には、深緑色の自然釉がかかっている。胎土は混合物がなく均質で滑らかであり、灰白色を呈している。E-24長頸瓶は２点の破片であるが、胎土や自然釉の色が近似しているため、同一個体と判断した。肩部が張るタイプのものである。Na-1馬具はX線写真の観察の結果、幅５～７mmの鉄棒により環状部と基部を形成する金具と幅８mm程の鉄棒が組み合っている状態であった。環状部をもつ金具は長さ7.8cm、環状部の最大幅5.6cm、基部先端の幅2.8cmを測る（註５）。組み合う鉄棒は長さ6.3cmであり、金具の環状部を貫通する形でほぼ直角に屈曲している様子が窺える。また側面の写真の観察から、この鉄棒を折り曲げることで金具の基部に固定していると思われる（同写真図版5c）。このような金具の形状から、鞍に取り付けられる鞍金具である可能性が考えられる。その他、ロクロ土師器のD-2坏や須恵器甕の体部片２点、土器小片３点が出土している。第６層からは、多くの遺物が比較的良好な残存状況で出土している。非ロクロ土師器のC-1坏は内外面に黒色処理を施されている（同図９）。丸底風の底部で、底部と体部の境界は緩やかに湾曲する。体部はほぼ垂直に立ち上がり、口縁端部はわずかに外側に開く。底部と体部の両面にミガキ調整が、口縁部にはヨコナデが施されている。須恵器のE-20平瓶は口縁部片である（同図10）。頸部は直線的に外傾し、口縁端部は内側に屈曲する。E-29平瓶も口縁部片であり、頸部が外反するものである（同図11）。E-21は提瓶と考えられる（第34図１）。破片は５点あり（写真図版25-1）、それぞれは接合しないが、胎土や色調から同一個体と考えられる。破片aは提瓶の把手であり、下向きの鉤針状を呈する。破片eは体部の中央にあたる部分と考えられる。外面には体部中央から幅の細かい同心円状のカキメが施されている。内面にはユビオサエの痕跡が見られる。破片cは右端部で湾曲が急になっている。カキメの方向などの様相から破片は体側部であり、右端部が平坦面への傾斜変換部であると考えられる。E-19フラスコ形長頸瓶は体部と口縁部の一部を欠くが、器形の全体を把握できる（同図２）。器壁が２～３mmと薄い部分があるにも関わらず、全体が焼き締まっており丈夫な作りである。外面には、口縁部から体部にかけて深緑色の自然釉が厚めにかかっている。また体部下部には、焼台が貼りついた痕跡が見られる。体部は球形に近く、製作時の底部は体部の左側に位置し、粘土を引き上げた後、円盤状の粘土板によって閉塞されて成形されていることが分かる（同図２b）。頸部は体部の中央を刳り抜き、別作りのものを接合している。外面には２本の沈線が施されている。頸部の形状は体部との接合部の直上でやや内湾し、そこからほぼ直線的に外傾する。E-31壺は完形品である（同図３）。全体は青灰色を呈しており、外面には口縁部から体下部の回転ヘラケズリの直上までの範囲に、横方向の細かいカキメが施されている。しかし肩部は灰がかかっているため、カキメは明瞭に観察できない。体部と肩部の境界に１条の沈線、その直下にもう１条の沈線が廻っている。底部は回転ヘラケズ



	層位	色調	土質	備考
前庭部	1	10YR3/3 暗褐色	砂質シルト	白色シルト粒多量、礫（φ2～5cm）少量
	2	10YR3/4 暗褐色	砂質シルト	炭化物ブロック、小礫（φ1～2cm）やや多量、白色シルト粒少量
	3	10YR3/4 暗褐色	砂質シルト	炭化物ブロック多量、明黄褐色（10YR7/6）シルト粒少量
	4a	10YR4/6 褐色	砂質シルト	灰白色火山灰ブロック（φ2～3cm）を下部に含む、炭化物粒微量
	4b	10YR4/4 褐色	砂質シルト	灰白色火山灰粒（φ3～5cm）を上部に含む、炭化物粒微量
	5	10YR3/4 暗褐色	砂質シルト	炭化物ブロック微量、白色シルト粒、小礫（φ2～3cm）少量
	6	10YR3/3 暗褐色	砂質シルト	マンガン粒やや多量、白色シルト粒少量
	7	10YR5/4 にぶい黄褐色	粘土質シルト	炭化物粒微量、明黄褐色（10YR6/8）砂質シルト粒少量
	8	10YR3/3 暗褐色	粘土質シルト	炭化物ブロック、明黄褐色（10YR6/8）砂質シルト粒微量
	9	10YR3/4 暗褐色	粘土質シルト	土質の異なるブロックの混合、炭化物粒微量
		10YR4/6 褐色	砂質シルト	
	10	10YR3/4 暗褐色	粘土質シルト	明黄褐色（10YR6/8）砂質シルト粒微量　SD1地積上
	11	10YR3/4 暗褐色	粘土質シルト	マンガン粒、明黄褐色（10YR6/8）砂質シルト粒少量、10層より明るい　SD1地積上
	12	10YR3/4 暗褐色	砂質シルト	褐色（10YR4/4）砂質シルトブロック多量
	13	10YR3/4 暗褐色	砂質シルト	褐色（10YR4/4）砂質シルトブロック極多量
	14	10YR3/3 暗褐色	粘土質シルト	白色シルト粒少量、黄褐色（10YR5/6）シルトブロック下部に少量
	15a	10YR3/3 暗褐色	粘土質シルト	土質の異なるブロックの混合、東部下部では4層状に堆積
		10YR5/6 黄褐色	砂質シルト	
	15b	10YR3/3 暗褐色	粘土質シルト	15a層に比べ、黄褐色砂質シルトの割合が多い、III層ブロックやや多量
		10YR5/6 黄褐色	砂質シルト	
	15c	10YR3/3 暗褐色	粘土質シルト	黄褐色砂質シルトの割合が多い
		10YR5/6 黄褐色	砂質シルト	
	16	10YR3/3 暗褐色	粘土質シルト	暗褐色粘土質シルトの割合が多い、しまりが強い
		10YR5/6 黄褐色	砂質シルト	

	層位	色調	土質	備考
基本層	I	10YR5/4 にぶい黄褐色	砂質シルト	炭化物少量、マンガン粒やや多量、白色シルト粒多量、大小の礫を含む、現代耕作上の
	II	10YR5/6 黄褐色	砂質シルト	褐色（10YR4/4）粘土を多量に含む
	III	10YR2/3 黒褐色	粘土質シルト	しまりが強い、褐色（10YR4/6）粘土質シルトブロック少量、小礫（φ2～10mm）やや多量
	IV	10YR3/4 暗褐色	砂質シルト	大小の礫を極多量に含む
遺伝粘土	A	10YR3/3 暗褐色	砂質シルト	土質の異なるブロックの混合、マンガン粒やや多量
		10YR5/6 黄褐色	粘土質シルト	
	B	10YR5/6 黄褐色	砂質シルト	マンガン粒少量
	C	10YR4/4 褐色	粘土質シルト	II層ブロック多量
前庭部	a	10YR3/3 暗褐色	粘土質シルト	炭化物ブロック微量、鏡化鉄粒少量、マンガン粒多量、明黄褐色（10YR6/6）シルト粒やや多量
	b	10YR2/3 黒褐色	シルト質粘土	炭化物粒少量、マンガン粒、白色シルト粒やや多量
	c	10YR2/2 黒褐色	シルト質粘土	鏡化鉄少量、マンガン粒、白色シルト粒やや多量
	d	10YR3/4 暗褐色	粘土	マンガン粒多量、鏡化鉄、白色シルト粒やや多量、小礫（φ2～3cm）少量
SD2	1	10YR2/3 黒褐色	シルト質粘土	炭化物粒微量、マンガン粒やや多量
	2	10YR3/2 黒褐色	粘土	炭化物粒少量、マンガン粒やや多量、黄褐色（10YR7/8）砂質シルトブロック、白色シルト粒微量
	3	10YR3/2 黒褐色	シルト質粘土	マンガン粒少量
	4	10YR2/3 黒褐色	粘土	炭化物ブロック、マンガン粒やや多量、にぶい黄褐色（10YR7/2）シルト粒多量、黄褐色（10YR5/6）砂質シルトブロック微量
P2	1	10YR2/1 黒色	粘土	炭化物粒微量

第30図　法領塚古墳断面図（S=1/50）

リによって丁寧に調整されており、ほぼ平底を呈する。底部と体部の境界は緩やかな曲線を描き、体部は垂直気味に立ち上がる。肩部には明瞭な屈曲を持ち、直線的に内側に伸び、頸部との接合部に至る。頸部は直線的に外傾して口縁部に至る形態である。出土状況については、南北方向のトレンチの南端付近で横位で検出された。付近からはC-1坏やE-5須恵器片も出土している（第31図、写真図版23-1）。E-33横瓶は体部の外面には平行タタキ目、内面には青海波文の当て具痕が認められる（第35図1）。体部に比して頸部とLI縁部が小さい。頸部には波状文が廻る。口縁端部の断面は、長方形を呈している。出土状況について、SD1溝跡が撹乱に削平される境界部からまとまって出土している。E-20平瓶も同地点から折り重なる状態で出土している（第32図、写真図版23-2、3）。E-5はE-33横瓶と法量や頸部の形状が類似することから、同様の器種と考えられる（第35図2）。その他、非ロクロ土師器のC-3甕など土師器甕の小片が多数、須恵器甕の小片が2点出土している。また、鉄製品の可能性のある小片が1点出土している。また、第9層から土師器坏の小片1点、第11層から土師器小片1点が出土している。

また試掘調査の時に出土したため、詳細な出土層位が不明であるが、第4層以下から須恵器甕が出土している。E-32甕は体部外面に平行タタキの後、横方向にカキメが一定間隔で施されている（同図3）。内面には青海波文の当て具痕が見られ、頸部外面には波状文が施される。その他、甕の体部片が4点出土しており、うち1点には鉱滓が付着している。

前庭部南部の堆積土出土遺物としては、d層から須恵器のE-3甕が出土したほか、内面黒色処理されたロクロ土師器坏片2点、土師器甕の小片数点、須恵器甕の体部片2点、鉄製品の可能性のある小片が1点出土している。

(2) SD2溝跡出土遺物

第2層からは須恵器のE-10甕（第36図1）が出土したほか、土器小片が2点出土している。第3層からはロクロ土師器坏の小片が出土している。第4層からは須恵器のE-23提瓶が出土している（同図2）。頸部から体部にかけて深緑色の自然釉がかかる。胎土は灰白色を呈し、混合物はほとんどなく均質である。体部正面の形状はほぼ円形であり、側面観はやや扁平である。体部から肩部にかけては放射状のカキメ、体部中央には同心円状のカキメが施されている。体部中央部の内面には、成形時の結土円盤の痕跡が見られる。頸部外面には2条の沈線が施されている。口縁端部は欠けているが、すぐに収束するもので、頸部は体部に比して短い。第5層からはE-28須恵器が出土している（同図3）。これは甕の体部破片と比べて器壁が薄いことから、須恵器横瓶の体部破片と考えられる。外面は平行タタキ目の後カキメが施されている。その他、第5層からは鉱滓が1点出土している。

(3) その他の出土遺物

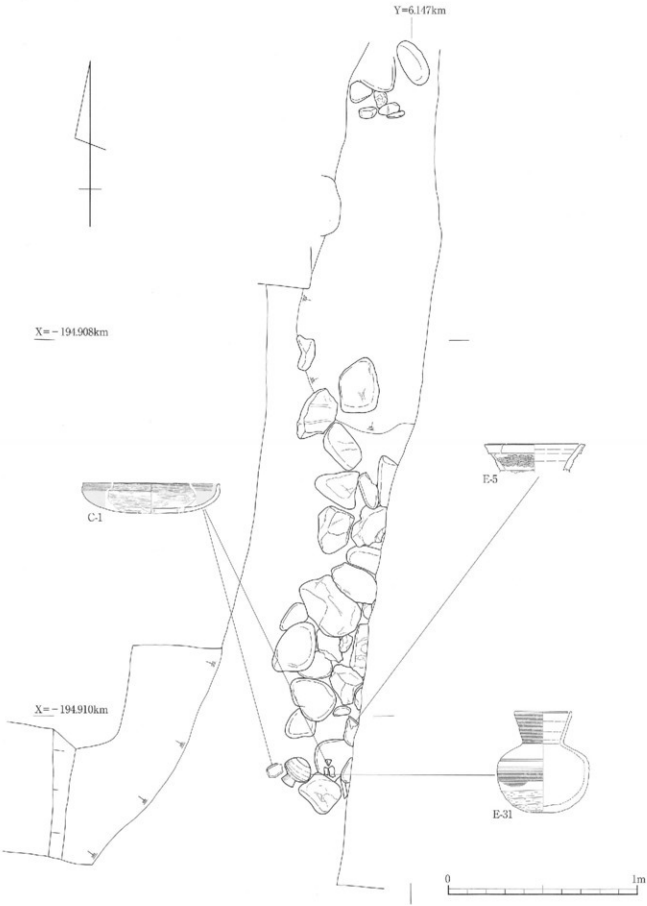
調査区内には撹乱が複数あり、遺構や墳丘が大きく削平されており、これらの撹乱中からも多くの遺物が出土した。G-1平瓦（第37図1）のほか、須恵器の長頸瓶の頸部片が出土している。E-1甕（同図4）など須恵器の甕片、土師器片が多数を占め、縄文晩期の大洞C1式のA-1浅鉢（同図2）も出土している。また、E-30須恵器は内面に自然釉の塊が接着していることから、瓶類の底部と考えられる（同図3）。その他、C-2非ロクロ土師器の小片が出土している。坏か蓋の破片であり、漆が付着していた。

(4) 第1次調査出土遺物

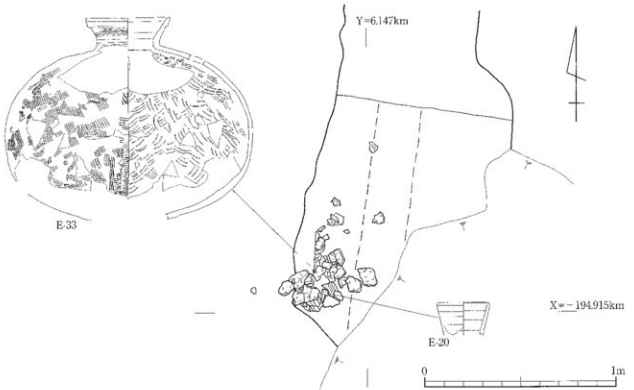
第1次調査出土遺物については、遺物カード、ネーミングでは「玄室」、「玄門外」などと記載されており、大別して玄室内と玄室外に区分される。玄室外出土遺物は、羨道出土遺物である可能性が考えられる。

玄室外出土遺物

F-1丸瓦は凹面に布目痕が認められる（同図6）。第1次調査報告では出土した布目瓦片について、「筒瓦の破片一点」と記載されている（註6）。今回の再整理では他に丸瓦片が認められず、このF-1丸瓦が記載されたものと思われる。遺物カードには「前庭」と記載されており、羨道部出土遺物であろう。須恵器のE-40、E-15、E-38、E-16甕は頸部片であり、沈線によって区画された中に波状文が穏やかな曲線で描かれている（同図7～10）。波状文



第31図　前庭部北部遺物出土状況（S=1/20）



第32図　E-33横瓶出土状況（S=1/20）

は３～４本単位であり、法領塚古墳から出土した須恵器甕の頸部のほとんどに同様の波状文と沈線が施されている。E-10甕は第１次調査報告の図版第17-8で写真が掲載されている。E-38甕は図版第17-6で写真が掲載されている。E-16甕は、図版第17-5で掲載されたE-11甕（第39図1）と同一個体の破片として、『仙台市博物館調査研究報告』７において掲載されている。両者は胎土や調整が類似しているが、今回は別個体として掲載している。

玄室出土遺物

須恵器のE-26長頸瓶は頸部片である（第38図３）。灰白色を呈しており、焼成は不良である。器形は外反しながら立ち上がる。E-13甕は口縁部片である（同図５）。端部は外側に発達せず、断面は長方形を呈している。E-11、E-12、E-18甕は口縁部、頸部片である（第39図１～３）。E-11、E-12甕は共に頸部の装飾について、玄室外出土の甕の頸部と同様である。E-18甕は細かい櫛目を一定間隔で平行に刻んだ文様が施されている。これを挟むように、上下２条ずつの沈線が廻っている。このような装飾を施したものは他に認められず特徴的である。

Ⅴ．まとめ

今回の調査では、墳丘の規模、形態、また年代等について新たな知見が得られた。まず墳丘の規模について、従来は直径約32mの円墳と推定されていたが、今回の調査の結果、直径約55mの円墳であることが明らかとなった。墳丘の築造方法についての詳細は、上述した仙台市文化財調査報告書第393集に譲るが、現況からの推定では上段、下段からなる二段築成の円墳の可能性が高い。

法領塚古墳の埋葬施設は南側に開口する横穴式石室である。その構造について、第１次調査時の見解では玄室の前に短い前庭部が付属するものとされている。しかし今回の調査では、さらに南側に通路状の遺構が検出された。第１次調査で「前庭部」とされた部分は南端で約20cmの段差を形成し、今回検出された遺構へ続いている。そのため、第１次調査の「前庭部」が羨道部、今回検出された施設が前庭部にあたると考えられる。

前庭部の規模について、境界が明確に判別できた西肩部で長さ約12.2mであるが、中軸線と墳丘裾部の復元想定

ラインとの合流点までの推定中軸長は約13mである。また、東肩部は南部の残存状況が悪く不明瞭であるが、中軸線から線対称の位置に復元した場合、南端部での東西幅は約4.8mとなり、南方へ向けて前庭部が開いていく様子が想定できる。

さらに前庭部と一連の道構と考えられるSD1溝跡に関しては、掘方埋土である第15層上面で形成されているため、一連の施設が機能していた時に同時に機能したものと考えられる。また前庭部底面と同様、南へ緩やかに傾斜しており、排水溝としての機能が想定される。

次に個別の須恵器の検討を行った上で、古墳の築造年代について検討する。

提瓶　E-21提瓶（第34図1）については、県内では類例が見られない。他地域の事例としては、福島県河沼郡会津坂下町の樋渡台畑遺跡A区16号住居跡で出土した提瓶が挙げられる（註7）。把手の形状は若干異なるものの、鈎針状を呈する点やカキメ調整に共通性が認められる。このような器形は、陶邑窯では近つ飛鳥博編年Ⅱ型式4、5段階に認められる（註8）。E-23提瓶（第36図2）は東海産須恵器の特徴と照合させると、全体の器壁の薄さや色調、胎土などから静岡県湖西窯産の可能性が高い。口縁端部は欠損しているものの、頸部の作りや器形は湖西窯のものと酷似している。県内での湖西窯産の提瓶の出土例は、体部器形が球形に近く、環状把手が付くものが大崎市三本木に所在する坂本館山横穴墓と宮城郡利府町に所在する道安寺横穴墓から出土しており、両者とも7世紀前葉頃のものと考えられている。これらと比較すると、E-23提瓶のように扁平な体部の器形のものは、型式的に古い段階にあたり、県内では他に例がない。これと類似するものは、静岡県浜松市地蔵平A62号墳出土提瓶がある（註9）。湖西窯産須恵器の編年では、6世紀末葉と考えられる（註10）。

フラスコ形長頸瓶　E-27フラスコ形長頸瓶は器形や胎土等の特徴から湖西窯産と考えられる（第33図8）。破片資料であるため、年代は限定し難いが、型式的に7世紀中葉から末頃の形態と考えられる。E-19フラスコ形長頸瓶は器形や胎土等の特徴から、愛知県猿投窯産のものと考えられる（第34図2）。仙台市内では善応寺横穴墓20号、23号墓で確認されており、7世紀代と考えられる。

長頸瓶　E-24長頸瓶は器形や胎土等の特徴から、湖西窯産と考えられる（第33図7）。肩部に明瞭な稜をもつ器形から、8世紀前葉の年代が考えられる。

壺　E-31壺については、丁寧な作りで焼成も良いこと、体部から口縁部までカキメ調整を施し、2本の沈線を廻らす点に高い装飾性がみられ、副葬品としての要素が強い（第34図3）。時期を限定することは難しいが、7世紀代に収まるものと想定される。

横瓶　横瓶の出土例は仙台平野周辺では極めて少ない。福島県南相馬市善光寺1号窯で出土している横瓶には、頸部に細密な2条の波状文のほかに、口縁部外面にも細密な波状文を施している（註11）。この横瓶は近つ飛鳥博編年Ⅱ型式5段階古：7世紀初頭であり（註12）、法領塚古墳出土のE-33横瓶（第35図1）は、それよりも型式的に新しいと考えられることから、近つ飛鳥博編年Ⅱ型式5段階新と想定しておきたい。年代としては、7世紀前葉でもその前半にあたる。

甕　法領塚古墳から出土した甕の口縁部の文様は、2条1組の沈線による文様帯区画に波状文を施すものが大半を占める。この甕については、沼向遺跡第4～34次調査報告書の総括文中で触れられている（註13）。沼向遺跡では、⑥B1期前半（近つ飛鳥博編年Ⅱ型式5段階古：7世紀初頭）の甕には、外側に肥厚した口縁に沈線状の凹みによって作り出した突帯が認められるが、法領塚古墳の甕にはこのような特徴がなく、単純な形態となっている。頸部の文様について見てみると、2条1組の沈線による文様帯区画は共通しているが、波状文の形状が沼向遺跡⑥B1期前半の甕よりも雑である。このような特徴から、近つ飛鳥博編年Ⅱ型式5段階新に位置付けられている。またE-32甕については、頸部が他より短く、4条1組の比較的緩やかな波状文が1列廻らされているのみである（同図3）。器形は器高に対し横幅が広く、扁平な形態を呈している。口縁部形態は他の甕と同様であるが、頸部が短いことや

波状文の施文状況など新しい要素が認められる。年代的には他の甕と同様、近つ飛鳥博編年Ⅱ型式5段階新に位置付けられ、より新しい要素が認められることに注意しておきたい。

これらの須恵器の出土状態について、前庭部の第6層で比較的まとまって出土したもの以外は一部の破片しかないものが多く、同一個体の破片でも出土地点が離れているものが認められる。第6層で出土した完形品のE-31壺についても、前庭部底面との間に堆積土が認められ、古墳に関わる埋葬行為、儀礼の当時の原位置を示すものではない。第5層からは、遺物の性格上本来副葬品であったと考えられるNa-1馬具が出土しており、少なくとも今回出土した遺物の一部は、副葬品として納められていたものが二次的移動を伴って出土したものと考えられる。また、墓前祭祀を積極的に示す痕跡は認められなかった。

古墳築造の時期について、第2次調査では前庭部第6層出土須恵器が近つ飛鳥博編年Ⅱ型式4～5段階の幅をもつが、時期を限定できるE-4、E-6甕、E-33横瓶はⅡ型式5段階新である。第1次調査においても、玄室出土遺物の中で最も古い須恵器がE-11、E-12甕で、Ⅱ型式5段階新であることから、古墳の築造年代は7世紀前葉でもその前半にあたると推定される。また、E-24長頸瓶は破片資料であるが、明らかに古墳の埋葬、儀礼に関わる遺物であり、8世紀前葉まで古墳としての機能が維持されていた可能性が考えられる。なお、古墳とは直接関連しないSD2溝跡から出土したE-23提瓶は、この遺跡の年代幅を示すと理解しておきたい。

註1　仙台市教育委員会1972『仙台市南小泉法領塚古墳調査報告書』

註2　大澤正己氏が分析を行い大陸産の可能性があることを指摘し（大澤1990）、仙台市史の考古資料編において、「移入品であることが判明し」たとされている（工藤1995）。

註3　付表の遺跡の立地に関しては、仙台市文化財調査報告書第360集に掲載されている微地形分類図を参考にした。

註4　第28図において、輪郭の線が細いものが第1次調査の図面と整合しなかった礫である。

註5　鉄製品の数値については、X線写真を基に計測した数値であり、今後変更する可能性がある。

註6　前掲p8

註7　「樋渡向畑遺跡」会津坂下町文化財調査報告書第17集

註8　『年代のものさし－陶邑の須恵器－』大阪府立近つ飛鳥博物館図録40

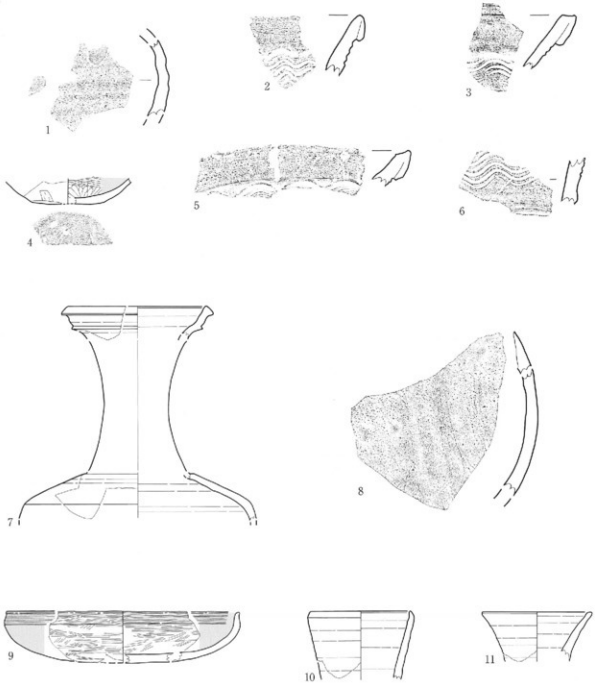
註9　浜松市博物館1992『有玉西上地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』下

註10　袋井市教育委員会の松井一明氏の御教示による。

註11　『国道113号バイパス遺跡調査報告』Ⅳ　福島県文化財調査報告書第192集

註12　「沼向遺跡第4～34次調査」（仙台市教育委員会2010b）の総括による。

註13　註12に同じ。

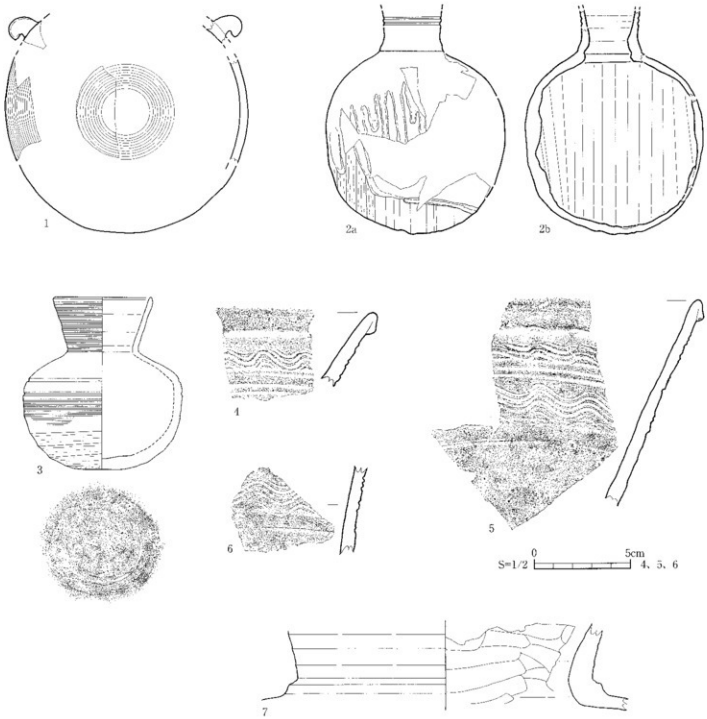


S=1/2 0 2cm 1~3、5~6、8

S=1/3 0 10cm 4、7、9~11

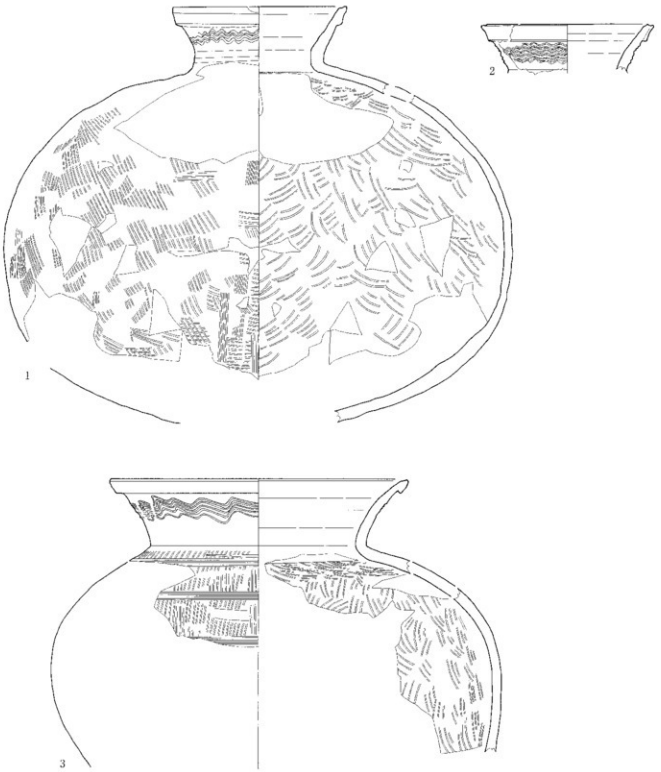
No.	登録No.	遺構・層位	種別・器種	法量（cm）	調整・特徴	写真図版
1	E-25	前庭部・1層	須恵器・平瓶	不明	外面：ロクロナデ　一部に種　内面：ロクロナデ	24-1
2	E-35	前庭部・3層	須恵器・甕	不明	外面：ロクロナデ→波状文あり　内面：ロクロナデ　胎土：白砂粒、石英含む　流成：良	–
3	E-34	前庭部・3層	須恵器・甕	不明		–
4	D-1	前庭部・4層	ロクロ土師器・坏	（底径）5.6	外面：ロクロナデ（雑種）→一部ヘラケズリ　内面：ヘラミガキ　黒色処理 底面：目粗糸切り→一部ヘラケズリあり　胎土：石英、砂粒含む　焼成：良	24-2
5	E-2	前庭部・4層	須恵器・甕	不明	外面：ロクロナデ→波状文あり　内面：ロクロナデ　胎土：砂粒、石英含む　流成：良	–
6	E-3	前庭部・4層	須恵器・甕	不明	外面：ロクロナデ　波状文あり　内面：ロクロナデ　胎土：石英、砂粒含む　流成：良	–
7	E-24	前庭部・5層	須恵器・長頸瓶	（口径）10.6　（肩部幅）18.4	外面：ロクロナデ　自然釉　内面：ロクロナデ	24-3
8	E-27	前庭部・5層	須恵器・フラスコ形長頸瓶	不明	外面：ロクロナデ　一部回転ケズリ　破片上半部に自然釉　内面：ロクロナデ　溝内窯重	24-4
9	C-1	前庭部・6層	津ロクロ土師器・坏	器高4　口径18	外面：口縁ヨコナデ→ヘラミガキ　体部ヘラミガキ、黒色処理 内面：口縁ヨコナデ　体部ヘラミガキ、黒色処理　胎土：砂粒、石英　焼成：良	24-7
10	E-20	前庭部・6層	須恵器・平瓶	口径7.8	外面：ロクロナデ　一部灰かぶり　内面：ロクロナデ　一部灰かぶり	24-8
11	E-29	前庭部・6層	須恵器・平瓶	口径8.6	外面：ロクロナデ　内面：ロクロナデ	24-9

第33図　前庭部出土遺物１



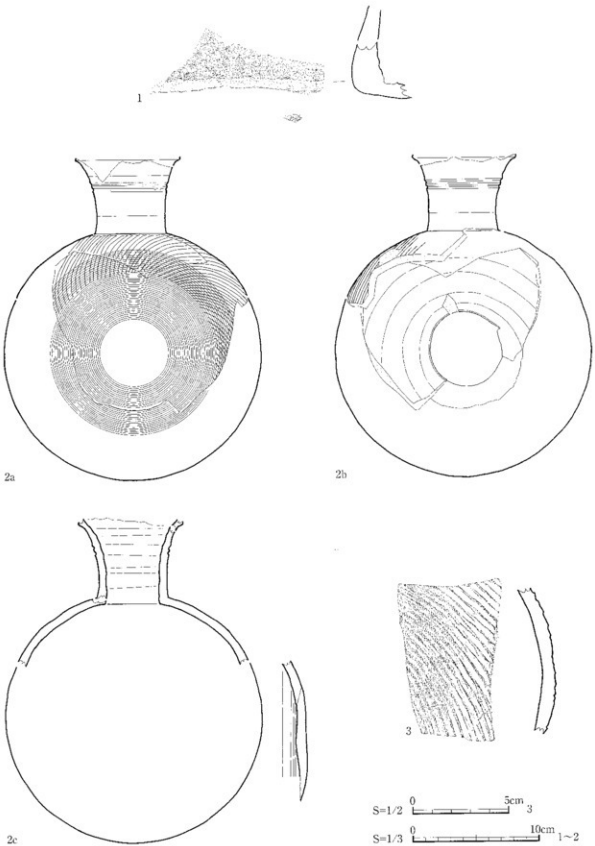
No.	登録No.	遺構・層位	種別・器種	法量（cm）	調整・特徴	写真図版
1	E-21	前庭部・6層	須恵器・提瓶	不明	外面：ロクロナデ→カキメ（同心円状に入れる） 内面：ロクロナデ 中心部オサエメ	25-1
2	E-19	前庭部・6層	須恵器・ワラスコ形山茶碗	体部径14.4	内面：ロクロナデ 屈部円盤内側はユビオサエ	25-3
3	E-31	前庭部・6層	須恵器・壺	器高13.5 口径7.3 底径3.3	外面：ロクロナデ 口縁部、屈部、胴部、体部にカキメ 体部に2条の沈線あり 体下部→光部に反転ケズリ 屈部のほとんどに灰 内面：ロクロナデ 底部切り離し不明→回転ケズリ	25-2
4	E-4	前庭部・6層	須恵器・壺	不明	外面：ロクロナデ→波状文、沈線あり 内面：ロクロナデ 胎土：石英、砂粒含む 焼成：良	25-5
5	E-7	前庭部・6層	須恵器・壺	不明	外面：ロクロナデ→波状文、沈線あり ヘラナデあり 内面：ロクロナデ 胎土：石英、砂粒含む 焼成：良	25-4
6	E-9	前庭部・6層	須恵器・壺	不明	外面：ロクロナデ→波状文、沈線あり 内面：ロクロナデ 胎土：石英、砂粒、小石粒含む 焼成：良	-
7	E-6	前庭部・6層	須恵器・壺	不明	外面：ロクロナデ 内面：ロクロナデ→部部ユビナデ、体部有ヘラ状跡 胎土：砂粒、石英含む 焼成：良	25-6

第34図　前庭部出土遺物2（6層出土）



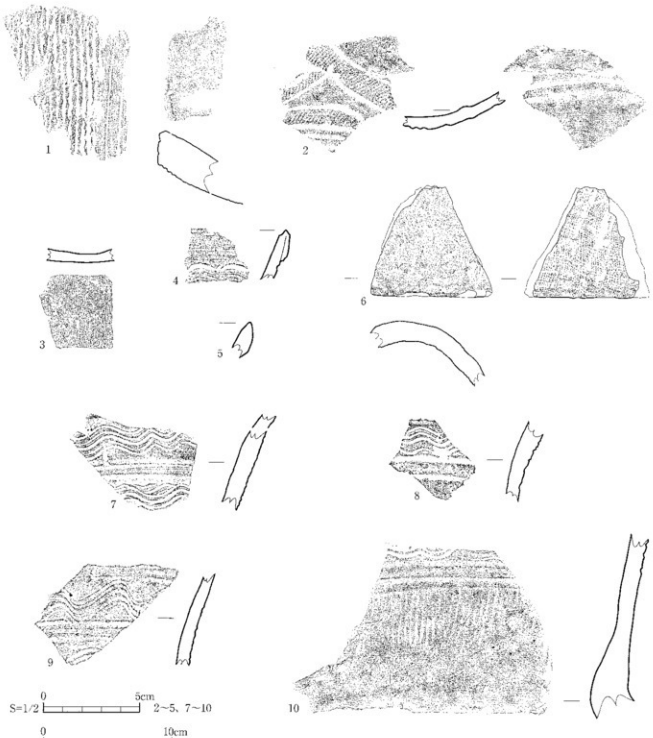
No.	登録No.	遺構・層位	種別・器種	法量（cm）	調整・特徴	写真図版
1	E-33	前庭部・6層	仮想器・横瓶	器高32.4　口径13.3	外面：口縁部ロクロナデ　波状文あり　体部ハケメ　カキメ 内面：口縁部ロクロナデ　体部当て具痕　胎土：石英粒、砂粒、2.2mmの小石少量含む　焼成：やや良	26-1
2	E-5	前庭部・6層	仮思器・横瓶?	（口径）13.2	外面：ロクロナデ→波状文あり　内面：ロクロナデ　胎土：石英、砂粒含む　焼成：良	25-7
3	E-32	前庭部・4層以下	仮思器・甕	口径22.8	外面：口縁ロクロナデ、波状文あり　体部ハケメ→カキメ、ナデ 内面：口縁ロクロナデ　体部当て具痕跡　胎土：砂粒、石英含む　焼成：良	26-2

第35図　前庭部出土遺物３



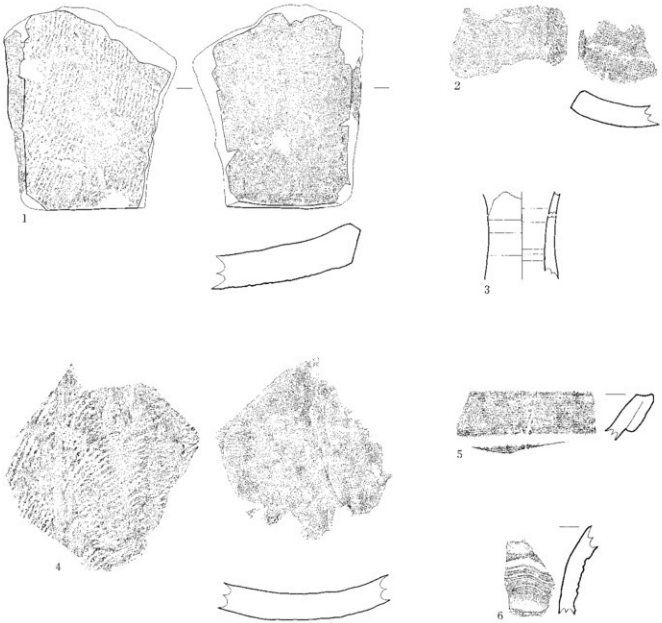
No.	登録No.	遺構・層位	種別・器種	法量	調整・特徴	写真図版
1	E-10	SD2・2層	須恵器・甕	不明	外面：ロクロナデ　内面：ロクロナデ　胎土：砂粒、石英含む　焼成：良	27-1
2	E-23	SD2・2、4層	須恵器・提瓶	不明	外面：ロクロナデ、体部中央　同心円カキメ、体部～肩部　放射状カキメ、深緑色自然釉、被部　沈線2条　内面：ロクロナデ　調査窓変　肩部欠損のため、側面図掲載不可	27-2
3	E-28	SD2・3層　前面部・d層　須恵器・模倣?		不明	外面：平行タタキ→カキメ　内面：ロクロナデ　他同一個体1点あり	27-3

第36図　SD2溝跡出土遺物



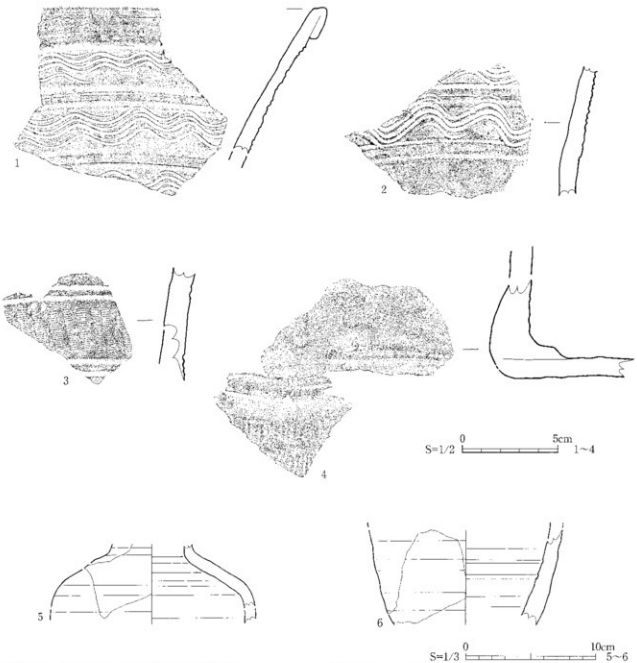
No.	登録No.	遺構・層位	種別・器種	法量（cm）	調整・特徴	写真図版
1	G-1	カクラン	平瓦	厚2.6	凹面：布目痕　凸面：縄タタキ痕　側面：ヘラケズリ→沈線あり　胎土：石英、砂粒含む　焼成：やや良	27-4
2	A-1	カクラン	縄文十器・浅鉢	不明	外面：LR縄文→ミガキ（環状）　内面：ミガキ　胎土：砂粒、石英含む　焼成：良	27-5
3	E-30	層位不明	須恵器・平瓶?	不明	外面：切り離し不明　瓦板ケズリ　内面：ロクロナデ　軸が多くかかっている	－
4	E-1	層位不明	須恵器・甕	不明	外面ロクロナデ→波状文あり　内面：ロクロナデ　胎土：石英、砂粒含む　焼成：良	－
5	E-36	層位不明	須恵器・甕	不明	外面：ロクロナデ　内面：ロクロナデ　胎土：石英、砂粒含む　焼成：良	－
6	F-1	須恵部	丸瓦	最大厚1.7	凹面：布目痕　端にヘラケズリ　凸面：縄タタキ→ヘラナデ　指圧痕あり　胎土：石英、砂粒含む　焼成：良	27-6
7	E-40	「玄門前」	須恵器・甕	不明	外面：ロクロナデ→波状文、沈線あり　内面：ロクロナデ　胎土：石英、砂粒含む　焼成：良	－
8	E-15	「玄門外」	須恵器・甕	不明	外面：ロクロナデ→波状文、沈線あり　内面：ロクロナデ　胎土：石英、砂粒含む　焼成：やや良	－
9	E-38	「玄門前」	須恵器・甕	不明	外面：ロクロナデ→波状文、沈線あり　内面：ロクロナデ　胎土：石英、砂粒含む　焼成：良	－
10	E-16	「玄門外」	須恵器・甕	不明	外面：ロクロナデ→波状文、沈線あり　タタキ痕あり　内面：ロクロナデ　胎土：砂粒、石英含む　焼成：良	27-7

第37図　出土遺物（6～10…第1次調査）



No.	登録No.	遺構・層位	種別・器種	法量 (cm)	調整・特徴	写真図版
1	G-3	「玄室」・「玄室内床面」	平瓦	最大厚3.6	凹面：布目痕　端部ヘラケズリ　凸面：縄タタキ痕　側面：ヘラケズリ　胎土：石英、砂粒含む　焼成：良	28-1
2	G-4	「玄室」	平瓦	最大厚1.8	凹面：布目痕　側面：ヘラケズリ　胎土：石英、砂粒含む　焼成：良	–
3	K-26	「玄室」	鉄製品・鉄製品	不明	外面：ロクロナデ　内面：ロクロナデ　焼成が不十分で赤色を呈している	–
4	G-2	「玄室」・「玄室閉塞石」	平瓦	最大厚2.1	凹面：布目痕　凸面：縄タタキ痕　一部ヘラナデあり　胎土：石英、砂粒含む　焼成：やや良	28-4
5	K-13	「玄室」	陶器器・瓷	不明	外面：ロクロナデ　内面：ロクロナデ　胎土：石英、砂粒含む　焼成：良	28-2
6	K-14	「玄室」	陶器器・瓷	不明	外面：ロクロナデ→板状文、沈線あり　内面：ロクロナデ　胎土：砂粒、石英含む　焼成：良	–

第38図　玄室出土遺物（第１次調査）



No.	登録No.	遺構・層位	種別・器種	法量（cm）	調整・特徴	写真図版
1	E-11	「玄門内側」	須恵器・甕	残存長9.8cm	外面：ロクロナデ→波状文、沈線あり　内面：ロクロナデ→一部ヘラナデ　胎土：石英、砂粒含む　焼成：良	28-3
2	E-12	「玄室」	須恵器・甕	不明	外面：ロクロナデ→波状文、沈線あり　内面：ロクロナデ　胎土：石英、砂粒、小石粒含む　焼成：良	
3	E-18	「玄室」	須恵器・甕	不明	外面：ロクロナデ→沈線あり　ハケメ状痕様　胎土：石英、砂粒含む　焼成：良	28-5
4	E-17	「玄室」	須恵器・甕	不明	外面：ロクロナデ　タタキ痕あり　内面：指圧ロクロナデ→ヘラナデ　体部底で異常感　胎土：砂粒、石英含む　焼成：良	28-6
5	E-37	出土地点不明	須恵器・壺	（肩部幅）15.6	外面：ロクロナデ　内面：ロクロナデ	28-7
6	E-42	出土地点不明	須恵器・壺	不明	外面：ロクロナデ　内面：ロクロナデ	28-8

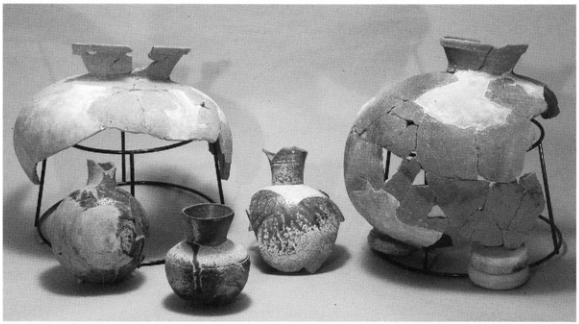
第39図　第１次調査出土遺物

1．前庭部調査状況（南から）

2．前庭部調査状況（南から）

写真図版17　前庭部

1．前庭部全景（南東から）



2．前庭部出土遺物

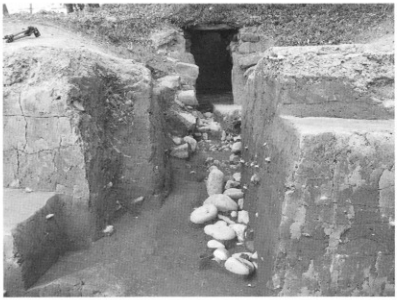
写真図版18　前庭部と出土遺物

1．SD2検出状況（南から）

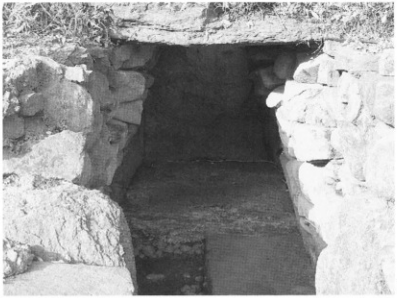
2．前庭部西端と墳丘裾の接続部（南から）

3．前庭部西側墳丘裾検出状況（南東から）

写真図版19　前庭部南端



1．前庭部礫検出状況（南から）



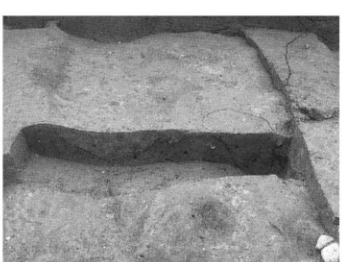
2．玄室（南から）

3．羨道礫検出状況（南東から）

写真図版20　玄室前調査状況

1．前庭部断面（南から）

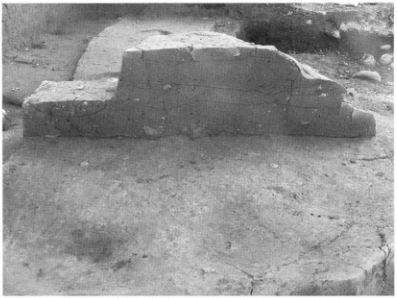
2．調査区南壁断面



3．前庭部掘方断面（北から）

写真図版21　前庭部東西断面

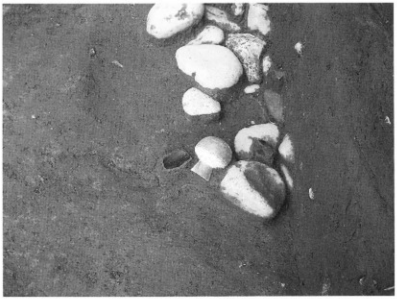
1．前庭部北部断面（南西から）



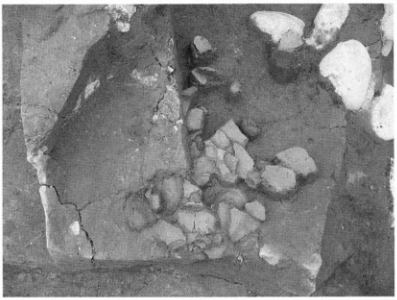
2．前庭部中央部断面（西から）

3．前庭部南端部断面（西から）

写真図版22　前庭部南北断面



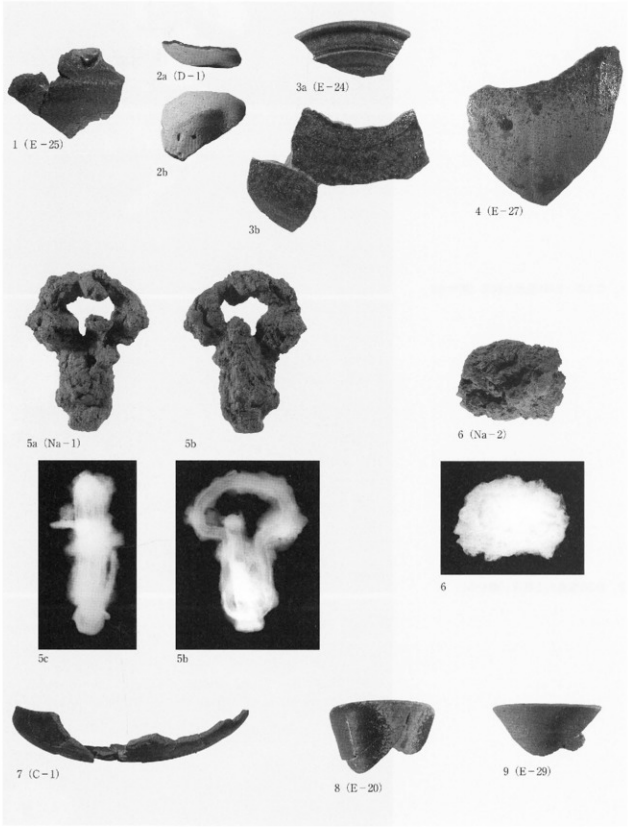
1．C-1坏・E-31壺出土状況（南から）



2．E-33横瓶出土状況（南から）

3．E-33横瓶・E-20平瓶出土状況（東から）

写真図版23　遺物出土状況



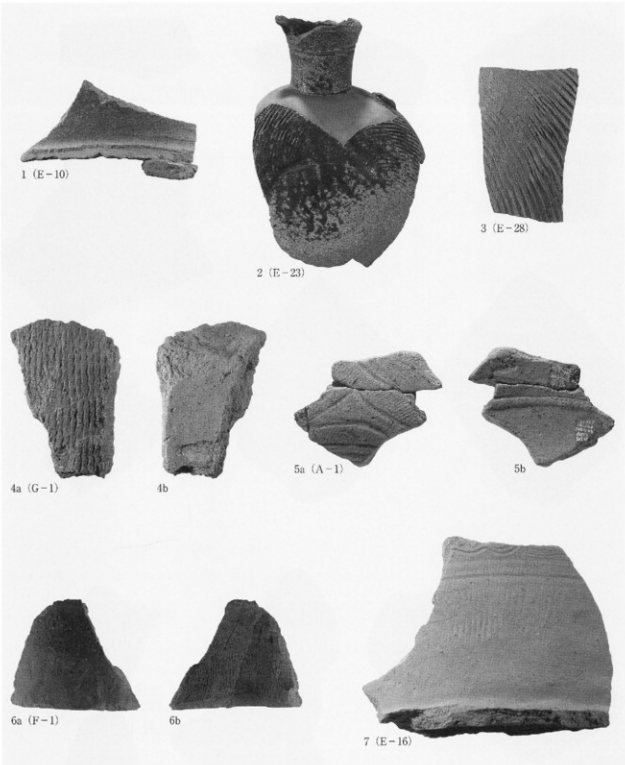
写真図版24　前庭部出土遺物（縮尺は図と同一、5、6…1/2）

写真図版25　前庭部6層出土遺物（縮尺は図と同一）

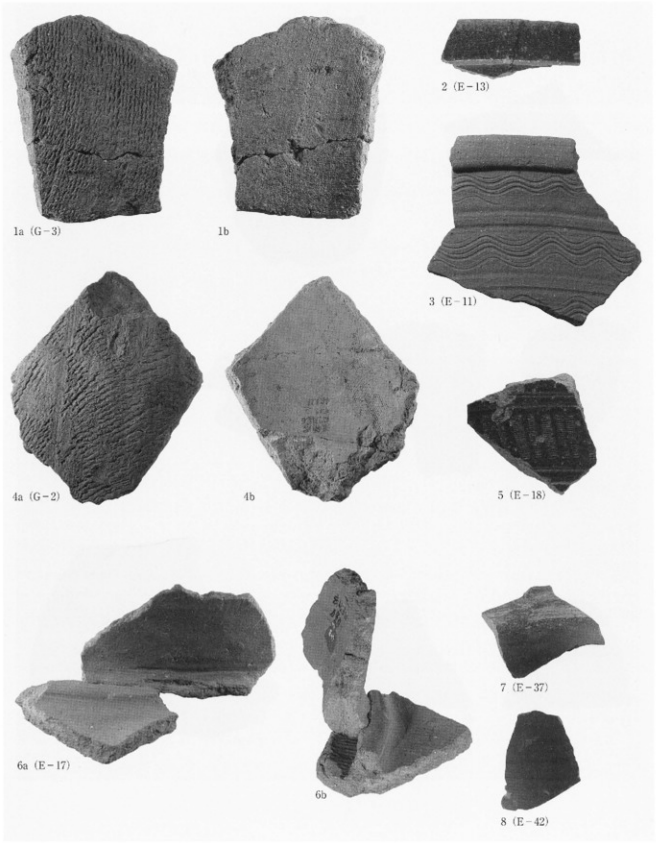
1（E－33）

2（E－32）

写真図版26　前庭部出土遺物（縮尺は図と同一）



写真図版27　出土遺物（6・7は第１次調査時に出土　縮尺は図と同一）



写真図版28　第１次調査出土遺物（縮尺は図と同一）

第5章　総　括

Ⅰ．郡山遺跡

今年度の郡山遺跡の調査としては、個人住宅建築に伴う調査（第201次、202次調査）や開発に伴う事前調査（第200次、203次調査）が行われた。本書に掲載した第203次調査では、Ⅰ期官衙期の材木列が検出された。調査区の制約上、詳細を明らかにすることはできなかったが、特徴的な遺物が出土している。胎土に籾物が多く含まれる非ロクロ土師器坏や、口縁部形態や焼成が特徴的な須恵器甕が出土したほか、須恵器のE-537長頸壺には台が付くものと考えられる。台付長頸壺の出土事例としては、多賀城市市川橋遺跡で栗囲式期の集落の区画溝と考えられているSD6517溝跡から出土したものが挙げられ、佐藤隆氏の陶邑編年のⅣ古段階：TK209型式（６世紀末～７世紀第１四半期）にあたることが指摘されている（註１）本例は体部下半のみ残存しており、詳細な検討はできないが、これに近い時期の遺物と考えられる。本調査区の北西約80mに位置する第98次調査では、SI1386竪穴住居跡のカマドの構築土から須恵器のE-365高坏が出土している。この高坏は坏部に細密な波状文が施されているが、市川橋遺跡出土の台付長頸壺にも同様の波状文が施されている。また器形が類似するものとして、市川橋遺跡のSD6517溝跡の西約450mの地点で検出された、SK6777大土坑から出土した長脚２段スカシ入り高坏が挙げられる。坏部に波状文は施されていないが、ロクロナデにより突線を作り出す技法や坏部の器形が類似している。この高坏は他の共伴遺物と総合して考慮すると、同編年のⅣ古段階：TK209型式～Ⅳ中段階：TK217型式（６世紀末葉～７世紀中頃）にあたることが指摘されている。以上のことから、郡山遺跡出土のE-537長頸壺やE-365高坏も概ね同時期と考えられる。このように、今回の調査地点の周囲では官衙に先行する時期の遺物が出土しており、今後、郡山遺跡内における遺構も含めた当該期の様相について明らかにしていくことが重要である。

Ⅱ．大野田官衙遺跡

今年度は官衙の区画溝東辺部の調査を行った。調査区を３箇所設定し、いずれの調査区からも南北方向に縦走する溝跡が検出されている。2b区で検出されたSD50溝跡と2c区で検出されたSD60溝跡は、規模や断面形がほぼ一致している。また、堆積土の大別層も全て対応しており同一の溝跡と考えられる。両溝跡を結んだ主軸方向はN-2～3°-Wである。両溝跡については、当初の想定ライン上から検出されたこと、これまで検出された区画溝の規模と一致することから、官衙の区画溝東辺であると考えられる。また2a区のSD40溝跡については、ほぼ想定ライン上で検出されているが、規模がSD50、SD60溝跡と大きく異なっている。削平が及んでいない溝の下幅で比較すると、SD50、SD60溝跡が1.6～1.8mであるのに対しSD40溝跡は30～40cmであり、南で検出された溝跡に比べ規模が小さくなっている。堆積土の状況については、SD40溝跡の最下層である第４層に、基本層由来と考えられる褐色の砂質シルトがブロック状に多く含まれるほか、第２層にも同様の砂質シルトが含まれることが特徴的である。SD50、SD60溝跡において同様の砂質シルトが多く含まれる堆積土は、底面直上に堆積する第８層のみである。溝跡の規模だけでなく、堆積環境においても差が生じていた可能性を指摘しておきたい。以上のような差異が挙げられる一方、共通性も認められる。いずれの溝跡でも、堆積土の最上部に基本層のⅢ層が落ち込んでおり、比較的良好にその堆積状況が確認できる。またSD40溝跡の方向はN-2°-Wであり、SD50、SD60溝跡の方向とほぼ一致している。さらに各溝跡はほぼ同一直線上に位置していることから（第40図）、SD40溝跡も官衙の区画溝東辺であると考えられる。

なお、SD40溝跡は2a区の南端で西へ屈曲することが確認されている。調査区の制約上、T字状となり南へ延びてSD50溝跡へ続くものなのか、L字状に折れるものなのかは確認できなかった。2a区は調査区設定当初から、官衙

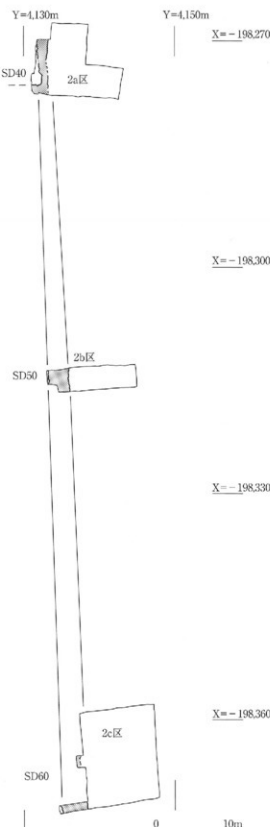
を東西に横断するSD57溝跡との接続地点と想定されており、ほぼ想定通りの地点から屈曲部が検出されたこととなる。屈曲部の規模が明らかでないため、今回の調査成果からはSD57溝跡と同一とは認定できないが、関連性を考慮しつつ、今後周辺の調査を進める必要がある。

またSD40溝跡の底面は南から北へ向かって傾斜しており、深くなっていく様子が窺える。そのため、より北側では溝跡の規模が大きくなる可能性が考えられる。但し、南側で検出されたSD50、SD60溝跡と同等の規模となるかは不明である。官衙の区画溝北部については、様相が明らかにされた調査事例が少なく、未解明の部分が多い。今後の調査成果を待って検討すべき課題である。

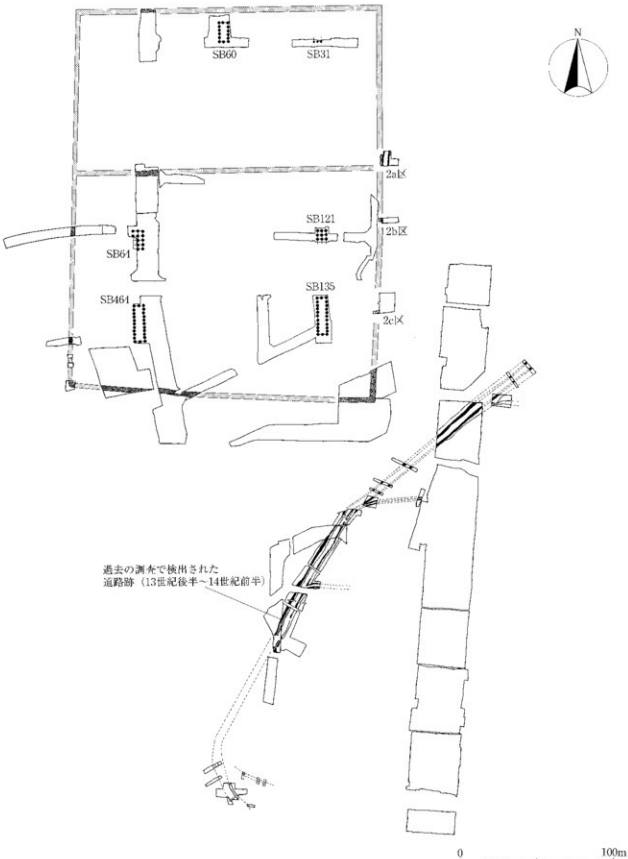
また今回の調査では、2a区で道路跡が検出されている。遺構の時期を比定できる遺物は出土していないが、基本層との関係から若干検討を加えていく。道路跡は新旧2時期確認されたが、2時期とも道路の西側溝が基本層のⅢ層上面で検出されている。Ⅲ層は灰白色火山灰を含む層であることから、少なくとも10世紀初頭以後の遺構と考えられる。

また、2b区ではSD46、SD47溝跡が検出されている。この２本の溝跡は2a区で検出されたSD36、SD37溝跡と主軸方向が異なるものの規模や堆積土が類似している。また、SD47溝跡がⅢ層上面で検出されていることからも、SD46、SD47溝跡はそれぞれSD36、SD37溝跡と同一の溝跡であり、道路の東側溝として機能していた可能性が考えられる。なおSD46溝跡はⅡ層上面で検出されており、SD47溝跡も堆積土の状況により本来Ⅱ層上面から掘り込まれた可能性を第３章Ⅲで指摘した。2a区ではⅡ層が確認されていないが、2b区で検出された溝跡を道路側溝の延長と考えると、道路跡は本来Ⅱ層上面で形成されたことになる。このⅡ層についてはこれまでの大野田地区の調査において、上面から中世の遺構が検出されている土層と対応している。

また大野田官衙遺跡の南方、大野田古墳群、王ノ壇遺跡のこれまでの調査において道路跡が検出されている（第41図）。南西から北東方向へ延びる道路跡であり、複数時期あることが確認されている。その中には今回大野田官衙遺跡で検出された道路跡と同様、両側に側溝をもち、その間で波板状凹凸が検



第40図　区画溝東辺検出状況（S＝1/500）



第41図　大野田官衙遺跡とこれまでの調査で検出された周辺の道路跡（S＝1/2500）

出される構造の道路跡も確認されている。これまでの調査で見つかった道路跡の年代については、出土遺物や検出された基本層位の状況から13世紀後半から14世紀前半を中心とした年代が指摘されている。

以上を踏まえ、今回検出された道路跡の年代については、官衙の区画溝より新しいこと、Ⅲ層上面で検出されており、本来はⅡ層上面から掘り込まれた可能性があること、道路跡の様相が過去の調査で検出されたものと類似することから、年代の幅はあるが古代末期以降から中世にかけての時期を中心とした年代を考えたい。

大野田官衙遺跡の追加調査とした六反田遺跡7F-1区の調査では、木棺墓が良好な状態で検出された。木棺は蓋部が残存しており、その下方に位置する棺内の人骨や副葬品も比較的良好な状態で出土している。また、袋状掘り込みが検出され、非ロクロ土師器の坏と甕が出土している。さらに、この木棺墓では銅鏡が埋葬されている。銅鏡は古墳時代の副葬品としての出土は仙台市内で３例目であり、今後文様が明らかにされた上でその性格を検討する必要があろう。今後、周辺地域から出土した遺物も含め、他地域との関係やその影響を考えていくことが重要である。

Ⅲ．法領塚古墳

今回の調査では、古墳の構造について大きな成果を得ることができた。墳丘の直径が約55mであることが明らかとなり、現況からの推定で上段、下段からなる二段築成の円墳である可能性が高いと考えられる。このような墳丘の構造は、周辺地域において古墳時代中期後半の主要な古墳で認められる。大野田地区では春日社古墳が挙げられ、西方の丘陵裾部では裏町古墳や兜塚古墳（註２）が挙げられる。法領塚古墳の築造方法の系譜を考える上で注意しておきたい。

また法領塚古墳の南方約800mには南小泉遺跡の第22次調査地点が位置する。この調査では６世紀末葉の集落跡の中の居住域が発見されている。この居住域は幅７mの大溝で区画されており、南小泉型関東系土器も出土している（註３）。また、この大溝SD3溝跡からは須恵器のE-29短頸壺が出土している。この個体は胎土、焼成などの特徴から湖西窯産と考えられており、報文中では脚付短頸壺の可能性が高いことが指摘されている。年代は６世紀末葉であり、今回の法領塚古墳の調査で出土した須恵器のE-23提瓶と産地、時期が一致する。以上のことから、６世紀末葉における法領塚古墳に先行する湖西産須恵器の出土と南小泉遺跡第22次調査で確認された居住域の関連性が注目される。今後、法領塚古墳を築造した集団や南小泉遺跡の集落を構成していた集団の関連性を考慮しつつ、調査、検討を行っていく必要がある。

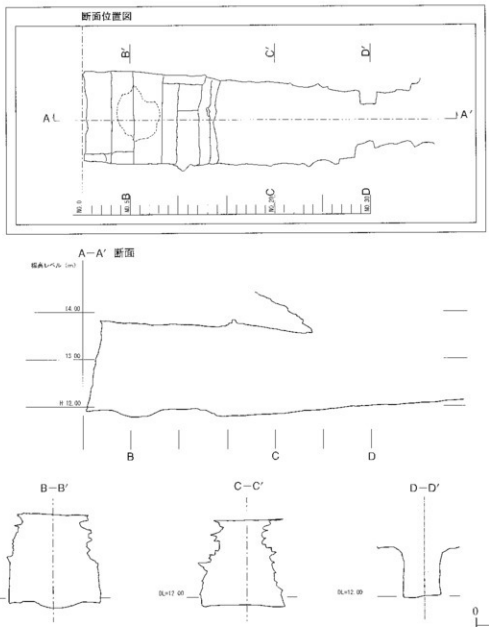
また法領塚古墳の測量終了後、石室の現況を把握するためレーザー測量を行い、３次元のデータを得ることができた（第42図）。これらのデータを今後の保存、整備に活用し、市民に安全に公開できるような対策を講じていく所存である（註４）。

註１　『市川橋遺跡の調査』宮城県文化財調査報告書第218集

註２　兜塚古墳は墳丘上段の調査が行われていないため、詳細な構造は不明であり、「少なくとも二段以上」という位置づけである（藤沢1995、1998）。

註３　仙台市教育委員会1994、2010b

註４　レーザー測量の後、3月11日の東日本大震災により石室の一部が崩落する被害があり、石室の現況は第28図、第42図と異なっている。



第42図　法領塚古墳石室断面図（S＝1/80）

引用・参考文献

会津坂下町教育委員会　1990 『樋渡台畑遺跡』会津坂下町文化財調査報告書17

荒井　格　2008 「大野田古墳群他－官衙関連遺構－」『第34回古代城柵官衙遺跡検討会資料集』 pp.65-72

近江俊秀　1995 「道路遺構の構造」『古代文化』47-4　pp.3-16

大池昭二　1972 「十和田火山東麓における完新世テフラの編年」『第四紀研究』11-4　pp.228-235

大澤正己　1990 「南小泉遺跡祭祀土坑出土鉄滓の金属学的調査」『南小泉遺跡』 仙台市文化財調査報告書140 pp.280-289

小山正忠、竹原秀雄　1989 『新版標準土色帖』1989年版　日本色研事業株式会社

加藤　孝、他　1978 『菅谷道安寺横穴群』利府町文化財調査報告書２

木本元治、他　1989 『国道113号バイパス遺跡調査報告』Ⅴ　福島県文化財調査報告書211

工藤哲司　1995 「南小泉遺跡」『仙台市史』特別編２　考古資料 pp.318-323

小口雅史　2003 「古代北東北の広域テフラをめぐる諸問題」『日本律令制の展開』 吉川弘文館

後藤建一　1992 『湖西一ノ宮工業団地内遺跡発掘調査報告書』 湖西市文化財調査報告29

後藤建一　2009 『新設中学校建設地内遺跡確認調査報告書』 湖西市文化財調査報告43

後藤秀一、他　2001 『山王遺跡八幡地区の調査』２　宮城県文化財調査報告書186

佐藤敏幸、大久保弥生　2007 「宮城県の湖西産須恵器」『宮城考古学』９　pp.111-133

佐藤則之、他　1997 『山王遺跡』Ⅴ　宮城県文化財調査報告書174

三本木町教育委員会　1971 『宮城県志田郡三本木町坂本館山横穴古墳群調査報告書』 三本木町文化財調査報告書１

三本木町教育委員会　1972 『坂本館山横穴古墳群第二次調査報告書』 三本木町文化財調査報告書２

鈴木敏則　2001 「湖西窯古墳時代須恵器編年の再構築」『須恵器生産の出現から消滅』第１回東海土器研究会資料 第５分冊　補遺、論考編　pp.141-170

仙台市教育委員会　1972 『仙台市南小泉法領塚古墳調査報告書』

仙台市教育委員会　1981 『六反田遺跡発掘調査報告書』 仙台市文化財調査報告書34

仙台市教育委員会　1990 『南小泉遺跡』仙台市文化財調査報告書140

仙台市教育委員会　1992 『上手内』 仙台市文化財調査報告書165

仙台市教育委員会　1994 『南小泉遺跡』 仙台市文化財調査報告書192

仙台市教育委員会　2000a 『大野田古墳群、王ノ壇遺跡、六反田遺跡』 仙台市文化財調査報告書243　pp.295-394

仙台市教育委員会　2000b 『王ノ壇遺跡』 仙台市文化財調査報告書249　pp.295-394

仙台市教育委員会　2004 「大野田古墳群」『平成16年度宮城県遺跡調査成果発表会　発表要旨』 pp.17-22

仙台市教育委員会　2005 「大野田古墳群」『第31回古代城柵官衙遺跡検討会資料集』 pp.299-305

仙台市教育委員会　2008a 『長町駅東遺跡第１、２次調査』 仙台市文化財調査報告書324

仙台市教育委員会　2008b 「六反田遺跡、大野田古墳群」『平成20年度宮城県遺跡調査成果発表会　発表要旨』 pp.99-102

仙台市教育委員会　2009a 「（仮称）大野田官衙遺跡」『第35回古代城柵官衙遺跡検討会資料集』 pp.242-249

仙台市教育委員会　2009b 「（仮称）大野田官衙遺跡」『郡山遺跡』29　仙台市文化財調査報告書347　pp.98-114

仙台市教育委員会　2010a 「大野田官衙遺跡」『郡山遺跡』30　仙台市文化財調査報告書373　pp.45-87

仙台市教育委員会　2010b 『沼向遺跡第４～34次調査』 仙台市文化財調査報告書360

仙台市教育委員会　2010c 「法領塚古墳第２次調査」『平成22年度宮城県遺跡調査成果発表会　発表要旨』 pp.7-12

仙台市教育委員会　2010d 「六反田遺跡、大野田官衙遺跡」『平成22年度宮城県遺跡調査成果発表会　発表要旨』 pp.25-30

仙台市教育委員会　2011「六反田遺跡、大野田官衙遺跡」『第37回古代城柵官衙遺跡検討会資料集』pp.178-189
高橋一敏　1987『西笠子第64号窯跡発掘調査報告書』湖西市教育委員会
高橋一敏　1990『吉美中村遺跡』湖西市文化財調査報告書25
竹田幸司　1999「仙台市王ノ壇遺跡、大野田古墳群、南小泉遺跡の中世道路跡について」『中世の道と物流』山川出版社　pp.97-117
田中則和　1987「普応寺横穴墓群、法領塚古墳出土鉄、銅製品整理報告」『仙台市博物館調査研究報告』7　pp.1-22
千賀　久　2003「古墳時代の馬との出会い」橿原考古学研究所特別展図録59　橿原考古学研究所附属博物館
千葉宗久、阿部博志　1978「兜塚古墳」『宮城県文化財発掘調査略報』昭和52年度分
鶴間正昭　2001「関東出土の東海産須恵器」『須恵器生産の出現から消滅』第１回東海土器研究会資料　第５分冊　補遺、論考編　pp.171-210
贄元　洋　2001「古代湖西窯編年の再構築」『須恵器生産の出現から消滅』第１回東海土器研究会資料　第１分冊　pp.89-111
長谷川聡　2009『かがやきにこめた権威と荘厳』平成21年特別展　茨城県立歴史館
浜松市博物館　1992『有玉西土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』下巻
福島県教育委員会　1988『国道113号バイパス遺跡調査報告』Ⅳ　福島県文化財調査報告書192
藤沢　敦　1995「兜塚古墳」『仙台市史』特別編２　考古資料 pp.256-257
藤沢　敦　1998「仙台平野における埴輪樹立古墳の墳丘と外部施設」『東北文化研究室紀要』39　pp.1-17
藤沢　敦　2010「東北」『前方後円墳の終焉』雄山閣　pp.40-57
藤村博之、伊藤裕　1996『米泉館跡』宮崎町文化財調査報告書５
古川一明　2005「墳墓にみる７世紀の宮城県地域の特質」『前方後円墳以後と古墳の終末』第10回東北、関東前方後円墳研究会人会発表要旨資料　pp.25-33
町田　洋、新井房夫　1992『火山灰アトラス』東京大学出版会
町田　洋、新井房夫　2003『新編　火山灰アトラス』東京大学出版会
町田　洋、他　1981「日本海を渡ってきたテフラ」『科学』51-9　pp.562-569
宮崎泰史、他　2006「年代のものさし－陶邑の須恵器－」大阪府立近つ飛鳥博物館図録40
桃崎祐輔　2000「馬具」『風返稲荷山古墳』　霞ヶ浦町教育委員会　pp.28-54
棒澤和明　2009『市川橋遺跡の調査』宮城県文化財調査報告書218
山田一郎、庄子貞雄　1980「宮城県に分布する灰白色火山灰について」『多賀城跡』昭和57年度発掘調査概報　宮城県多賀城跡調査研究所年報1979　pp.97-102
横須賀倫達、奥山誠義　2006「勿来金冠塚古墳出土遺物の調査」Ⅱ『福島県立博物館紀要』20　pp.23-46

調査成果の普及と関連活動

1．主な広報・普及・協力活動

年月日	行事名称	担当	主催
2010．4．14	郡山遺跡展示室・ビロティ見学	森田	八本松市民センター
4．19	郡山遺跡展示室・ビロティ見学	森田	古代史の旅
6．5	郡山遺跡展示室・ビロティ見学	森田	歴史を学ぶ会
6．18	郡山遺跡展示室・ビロティ見学	森田	八本松市民センター
6．25	郡山遺跡展示室・ビロティ見学	森田	東北大学文学部
7．6	郡山遺跡展示室見学	佐藤（正）	仙台市立東長町小学校
7．13	郡山遺跡展示室・ビロティ見学	森田・熊谷	中田中部町内会連合会婦人部
7．20	郡山遺跡展示室・ビロティ見学	森田・熊谷	太白区婦人防火クラブ連絡協議会郡山支部
10．8	郡山遺跡展示室・ビロティ見学	熊谷	旭ヶ丘老壮大学
10．27	郡山遺跡展示室・ビロティ見学	長島	岩切探訪の会
10．29	郡山遺跡展示室・ビロティ見学	整備活用係	ディスカバー太白　区内探訪会
11．14	ＪＲ小さな旅	整備活用係	ＪＲ長町駅
11．17	郡山遺跡展示室見学	長島	南相馬市教育委員会
2011．1．18～20	職場体験学習	佐藤（正）	仙台市立八軒中学校２年生
4．8～（毎月８日）	薬師堂手づくり市	整備活用係	薬師堂手づくり市実行委員会

2．調査指導委員会の開催

大野田官衙遺跡調査現地指導　　平成22年９月１日・７日

平成22年度　郡山遺跡・陸奥国分寺跡等調査指導委員会

平成23年３月４日　仙台市役所２階第４委員会室

・平成22年度の調査成果について

・平成23年度の調査計画について

3．展示室の利用者

平成22年４月～平成23年３月　　361名

展示室見学風景

薬師堂手づくり市

報 告 書 抄 録

ふりがな	こおりやまいせき
書名	郡山遺跡31
副書名	平成22年度発掘調査概報　郡山遺跡・大野田官衙遺跡・法領塚古墳
巻次	31
シリーズ名	仙台市文化財調査報告書
シリーズ番号	第394集
編著者名	長島榮一、森田賢司、佐藤正弥、熊谷敏哉、及川謙作、大久保弥生
編集機関	仙台市教育委員会（文化財課）
所在地	〒980-0802　宮城県仙台市青葉区二日町1－1　　TEL022（214）8893～8894
発行年月日	2011年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
こおりやまいせき 郡山遺跡	みやぎけんせんだいし 宮城県仙台市 たいはくくこおりやま 太白区郡山	4100	1003	38° 12′ 58″	140° 53′ 41″	200次 2010.10.12 ～2010.12.10	300㎡	店舗建築
						201次 2010.6.21 ～2010.6.23	22.4㎡	個人住宅建築
						202次 2010.8.9 ～2010.8.10	10.6㎡	児童館建築
						203次 2010.8.17 ～2010.8.26	60㎡	水道管埋設
おおのだかんがいせき 大野田官衙遺跡	みやぎけんせんだいし 宮城県仙台市 たいはくくおおのだ 太白区大野田	4100	1566	38° 12′ 47″	140° 52′ 45″	2010.5.21 ～ 2010.10.1	257㎡	重要遺跡の範囲確認調査ほか
ほうりょうづかこふん 法領塚古墳	みやぎけんせんだいし 宮城県仙台市 わかばやしく 若林区 いっこんすぎまち 一本杉町	4100	1007	38° 14′ 39″	140° 54′ 11″	2010.10.18 ～ 2010.11.20	160㎡	校舎建築

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
郡山遺跡	官衙跡	飛鳥～平安	・材木列 ・溝跡	・土師器　・須恵器	・Ⅰ期官衙材木列
大野田官衙遺跡	官衙跡	奈良～平安	・溝跡	・土師器　・須恵器 ・鉄製品　・石器	・区画溝東辺
法領塚古墳	円墳	古墳	・石室前庭部	・土師器　・須恵器 ・鉄製品	・石室前庭部

要約

郡山遺跡では第203次調査において、Ⅰ期官衙期の材木列が検出された。調査区が狭小であったが、幹数的な遺物が出土している。

大野田官衙遺跡の調査では、官衙の区画溝の東辺が検出された。3地点の調査区のうち一番北の2a区では溝跡の規模が小さく、他地点と異なる様相であった。また、調査区南端で西へ屈曲する様子が確認された。官衙を東西に横断する溝跡が過去の調査で検出されており、その溝跡と関連している可能性がある。また、官衙より新しい時期の道路跡が検出された。

大野田官衙遺跡の追加調査としての六反田遺跡7F-1区の調査では、古墳時代後期の木棺墓が良好な状態で検出された。副葬品や管玉、ガラス小玉などの副葬品が出土している。また袋状掘り込みを伴っており、当時の葬制を検討する上で重要な事例である。

法領塚古墳の調査では墳丘や石室の構造が判明し、古墳時代終末期として東北地方最大の円墳であることが明らかにされた。また、前庭部から須恵器や馬具が出土し、古墳の築造年代が7世紀前葉頃と考えられる。

仙台市文化財調査報告書第394集

郡山遺跡 31

平成22年度発掘調査概報
―郡山遺跡・大野田官衙遺跡・法領塚古墳―

2011年3月
発行　仙台市教育委員会
仙台市青葉区二日町1－1
文化財課 TEL 022（214）8893
印刷　モリタ印刷　株式会社
仙台市太白区郡山八丁目20－30
TEL 022（246）0105